
マジックワールド。魔法の世界へようこそ

ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジックワールド。魔法の世界へようこそ

【Nコード】

N7088Y

【作者名】

ケン

【あらすじ】

これは突然、魔法の世界に来てしまった少年、如月集の波乱万丈な物語である。

プロローグ

「はく最悪。理科の点数が50点ってやばいな」

一人の学生服を着た少年が悲壮感を漂わせながら家路を歩いていた。

彼の名は如月^{きさらぎ} 集^{しゅう}

とある高校に通う高校一年生である。

ちなみに今日は査査返却日であり

全教科が帰ってくるという日であった。

「はく余裕ぶっこいてたらまさかの計算ミスで

10点落とすし数？も計算ミスで10点落とすし、最悪」

しかし少年の顔はそんなに気にしていないような顔だった。

「ま、いっか。人生気楽にいかないとな」

この少年は物事全てに関心が薄く

あまり気にも留めず、物事を気分で行っていた。

しかし、勉強だけは気分ではせずキチンとしていた。

その理由は良い点を取れば親が喜ぶという単とも単純な理由だった。

集は両親が大好きだった。幼い頃は一緒に遊び、お風呂も一緒

出かけるのも一緒。それは高校生になってもそうだった。

例え、マザコン、ファザコンと呼ばれ気持ち悪がられても変わらな

かった。

しかし、去年の年の瀬に両親は死んだ。

原因は交通事故だった。

二人の乗った車に大型のダンプカーが衝突し二人の車の正面は

ぐちゃぐちゃに壊れていた。

そして両親は即死、相手のドライバーは捕まり今は務所暮らしをしている。

集にとってそれは、性格を大きく変えるほどの事件だった。

あれだけまじめにしていた勉強もしなくなり

生活は不摂生ばかりしていた。

そして今の如月集が出来た。

「・・・・・・・・帰ろ」

「∴相変わらず静かな部屋」

家のドアを開け真っ暗な部屋を進み

ブレザーを椅子にかけて制服のまま布団に横たわった。

集の家はとても人が住めるような部屋ではなかった。

あの事件から集は前の家売り払った。

その家では二人との思い出が多すぎた。

集は今は一人暮らしをしていた。

部屋の壁はシミだらけで元々の色が何色なのかも、

分からないほど汚れており畳も同じく。

さらに風呂はシャワーだけという部屋だった。

なぜ、こんな部屋に住んでいるかというと、

この部屋の家賃はかなり安く破格だった為だった。

しかし、借りた人は全員1か月も経たずに引っ越したという

曰くつきの一室だったが集はあまり

そんな事を気にも留めない性格なので借りていた。

「はー面白くないな〜今の世の中。何かいいこと無いもんかな〜

いや、それよりも今の生活は普通すぎるから刺激がほしいな。

例えば・・・・・・・・このまま寝て起きたら別の世界に

いたりとか・・・・・・・・そんな小説みたいな話ないよな。寝よ寝よ〜

集はそのまま目を閉じ10分後には熟睡してしまった。

自分の思っていたことが現実になるとも知らずに。

プロローグ（後書き）

こんばんわ。初めまして。ケンと申します。
一次創作を書くのは初めてです。
今まで二次創作をやってきましたので。
これから、よろしくお願いいたします。

第1話 目が覚めたら魔法の世界!?

「んゝ今何時だ？」

目を覚ました集は今の時間を知るべく

時計を探そうと手を動かすがその時計が見当たらなかった。

「ん？この感触・・・土？」

手を動かしていると部屋の床の冷たい感じではなく

地面を素手で触っているような感覚がした。

不思議に思い目を開けると・・・

「な、何ここ」

周りは草ばっかりで集の部屋ではなかった。

「ここどこ？・・・ひとまず散策するかな」

集は一旦、周りを散策する事にした。

「何もねえな」

散策してみたがあまり情報は得られなかった。

分かった事は集のいる場所は森で人が住んでいる気配はなかった。

「どうすつかねゝ」

集は何となく後ろを振り向いた。

「・・・」

よく絶世の美少女を見ると目が離せないと

クラスメイトが言っていたがその事がようやく

分かった。その姿は赤い服に黒いマントを

はおり腰には刀を差しており

髪の毛は肩にピツタリと切りそれられていて

なお且つきれいな黒髪だった。

「あ、あの少し」

集が言いかけた時突然、その少女は刀を抜き切りかかって来た。

「ひっ！」

集はまっすぐに振り下ろされた刀を慌てて横に避けると今度は横なぎに変えて集に切りかかって来た。

「うわああああ！！！」

集は恐怖のあまり腰を抜かしてへたり込んでしまった。

そのお陰で何とか刀は髪の毛を少し掠るぐらいで避けれた。

「！！！！！！！」

その少女は驚いたような顔をしたがすぐさま

冷静になり集に向けて刀を振り下ろそうとするが

「・・・・・・・・」

集と目が合い数秒固まった後に刀を鞘に戻した。

「は、はは。よ、良かった」

「すまない。どうやら君は違ったようだ」

「え、何が？」

「いや何もない。立てるか？」

「んゝ無理ですね。手を貸してくれませんか？」

「ああ、良いとも」

「すみません」

集が少女の手に触れた瞬間、集の頭に映像がよぎった。

『・・・・・・・・・・か？』

『・・・・・・・・・・さ。・・・・・・・・・・ず・・・・・・・・・・る』

「な、何これ？何で女性が泣いてる？」

何でそんなに悲しそうに顔をしてるんだ！」

その映像は粗く音も

割れすぎていてほとんど聞こえなかった。

「大丈夫か？」

「え？あれ？」

先程の映像が急に消え普通の景色に戻った。

「あ、ああ大丈夫です」

「そうか、すまないな。急に襲ったりして」

「い、いえ別にそんな」

「ところで君はこの者だい？あまり見ない顔だが」

「へ？どって日本ですけど」

「ニホン？そんな国あったか？」

「は？いや日本ですよ？日本」

「何を言ってるんだ君は？ニホン

とか不思議な言葉を使っているが」

「す、すみませんがここはどこですか？」

「何を言ってるんだ？ここはコラリスではないか。

本当に大丈夫か？」

集は困惑していた。何せ聞いたこともない地名が出ていたのである。

「コラリス？何じゃそりゃ。…」

ひとまずここは、怪しまれないように合わせておこう」

「す、すみません。最近ここに来たもので」

「ふむ、そうか・・・ところで名は？」

「ああ、そうでしたね。僕の名は

如月集って言います。貴方は？」

「私は桜ゆえだ。よろしく頼む」

「あれ？僕と同じ漢字の名前。ここって

俗にいう異世界なんだよな？」

集は不思議に思いながらもその事は頭の片隅に退かした。

「はい！」

お互いに握手を交わした。

「ひとまずはその格好を何とかしないと」

「へ？あ」

よく見ると集の制服は土だらけで元の色が見えてなかった。

「私の家に行こう。すぐ近くだからな」

「ええ、分かりました」

森を出て、少し歩くとそこにはたくさん露店が立っており人々の活気の言い声が聞こえてきた。

「へー結構広いんですね」

「まあな。ここはこの地域では一番規模が大きいマーケットだからな。ところで、君はどこからきたんだ？」

「え、えーっとですね。まあ、遠い所から」

「そうか、長旅で疲れて寝てしまったのか？」

「ははは！！そうなんですよ！」

「ならば宿にでも泊まれば良かったものを」

「じ、実は今、一文無しなんです」

「一文無しとは、なんだ？」

「しまったーここは日本じゃないから

ことわざとかも知らないんだった」

「あ、いや僕の国の決まり文句でしてね。

お金が全くない事を言うんですよ」

「ほー初めて知ったな」

「あ、危ねー」

「ここが私の家だ」

「へー結構大きいんですね」

「ふふ、まだ小さい方だぞ？」

そこには結構大きめの家が建っていた。

広い庭がありきれいな花や木々がたくさん生い茂っていた。

「あら、ゆえちゃん。御帰りなさい。

その隣の男の子は？」

「ああ、紹介するよ。この子はさっき森であった旅人の如月集だ。それでこっちが私の母だ」

「はじめまして。如月集と申します」

「ふふ、そんなにかしこまらなくても良いわよ？

私はゆえちゃんの母のユイです。

よろしくね〜集君」

「はい、よろしくお願いします」

「ま、ひとまず中に入ろうか」

「あ、はい」

「上がって頂戴」

ひとまず集は客室に案内された。

「ひとまず集。体を流してきたらどうだ？」

「あ、はい。そうさせて頂きます」

「そんなに畏まらなくていいぞ？」

「じゃあ、分かった」

「ああ。シャワー室はそこを右に曲がった突き当りだ。タオルなどは後で持って行くよ」

「ああ、ありがとう」

「覚悟はしていたけどお風呂じゃないか〜」

集が入った場所はお風呂ではなくただ単にだだっ広いシャワーだけの浴室みたいなものだった。

そこで、集は一応体を洗い貸してくれたタオルを使い、服も借りた。

「ああ、上がったのか。集」

「ああ、ありがとう。さっぱりしたよ」

「まあ、座れ」

「うん」

「ではまずは君の話を詳しく聞かせてもらおうか？」

「へ？何の事？」

「惚けない方がいい。私の勘は良い方だな。」

君はこの・・・いやこの世界の人間じゃないんだろう？」

「！！！！！！」

「凶星か」

「うん」

「話してくれないか？何か力になれるかもしれない」

「分かった。話すよ」

それから集は今までの事を話した。

「そうか。つまり君は異世界から来たという事で良いかな」

「うん。ま、気にしてないけど」

「元の世界に戻りたくないのか？」

「何で？」

「何でって君が今まで過ごしてきた世界なんだぞ？」

そして突然目を覚ましたら異世界って怖くないのか？」

「んゝそれほどは」

「・・・何があったんだ？」

「・・・何もなかったよ。何もね」

そういう集は悲しそうな顔をしていた。

「そう言えば集はこんなを見た事はあるか？」

「ん？」

するとゆえが突然、手のひらから炎を出した。

「・・・へ」

「むむ？感動すると思ったんだがな」

「そう。残念だったね」

「そう言いながらもお前、まじまじと見てるぞ？」

集は炎を近くでまじまじと見ていた。

「・・・凄いな。僕にも出来るのか？」

「分からないな。君はこの世界の住人ではないからな。

この世界では幼い頃からこれを勉強してるらな」

「それって魔法なのか？」

「ああ、魔法だよ」

「・・・教科書ある？」

「ああ、あるがどうするのだ？」

「見せてくれ！！僕もマスターしたい！」

その目はきらきらしていた。

「い、良いぞ。後ろの書庫に教材が大量にあるから見ていいぞ」

「よし！」

そう言い集はダッシュで書庫に向かった。

「あら？集君は？」

「集なら書庫に行ったよ」

「あらそう。折角おいしいパンを作ったのに」

「まあ、後で分からなくなっ出てくるさ。

その時に食べさせよう」

「そうね」

そして夜

「おい。集、大丈夫かゝ入るぞ」

ゆえが入るとそこには・・・

「何をしてるんだ？」

「……本の海で泳いでる」

本の山に埋もれた集がいた。

「それよりも晩御飯だぞ」

「ああ、悪いな」

集はゆえに連れられ晩ご飯を食べ
また書庫にこもり一日を過ごした。

第1話 目が覚めたら魔法の世界！？（後書き）

こんばんわ。連続更新です。
如何でしたか？

感想もお待ちしております。
それでは、さよなら

第2話 目覚めの時 Wake up!!!

「んゝ良く寝た。さてと起きるかな」

ゆえが起きようとした時、庭で大爆発が起こった。

「な、何だ!?!」

「大丈夫!?! ゆえちゃん!!」

ゆえの母が慌ててパジャマのまま、走って来た。

「うん。私は大丈夫だけど何が起こったの?」

「分からないわ、庭の方で何かあったみたいだけど」

「私が行ってくる」

「……気を付けてね」

「うん」

ゆえは黒いマントをはおり刀を持って庭に出た。

「…………切っていいか?」

「だ……め……に……きま……てんだろ」

そこにはボロボロの集がいた。

「一体何をしたらあんな爆発が起こったんだ?」

集は大きな穴に落ちていた。

「いやゝ実はさ、昨日書庫の本、全部読み終わったからさ。僕も魔法を試みようと思っただけさ」

「あの書庫には数万冊の本があると言われてるんだぞ!

それに君はまだこの世界の言葉を知らないんじゃない?」

「うん、そうなんだけど何故か読めたんだよ。

まあ、本読むの好きだし読む速さも自信あるし。最後にはなんだっけ? だ、だい」

「大魔法全書か?」

「そう! それを読み切ってやったら爆発した」

「どれどれ・・・！！！」

ゆえが見たページには賢者クラスと書いてありそこには炎の最大魔法が記されていた。

「流石に最大魔法はきついな」

「集。君はどれからしたんだ？」

「それだけど？」

「はゝ死ぬ気か。まずは初級魔法からだろう」

「ああ、そうだな。よし！いくぜ！」

集が手のひらを返すと炎が出たことには出たが音だけがデカイ爆弾みたいな魔法だった。

「うお！！」

「ふむ。炎はダメと、よし次だ！」

「お、おう！次は水だ！」

もう一度出すと今度は蛇口から出る水みたいにチヨロチヨロと出てきた。

「…次行こうか」

「うん…」

「君はある意味凄いな」

「……………」

ゆえの真下にはぼろぼろになった集がいた。

「雷を出せば感電し、自然を使えばつるが自らを縛り無機を使えばがらくたが出て、肉体強化を使えば豚みたいなデブになった」

「仰る通りです」

「つまり君は今のところはどの属の魔法も

使える事は使えるが実践には無理という状態だ」

「でも、まだ属はあるぞ」

「闇と氷だな。だが闇に関しては魔族のみが使える

氷に関しては机上の空論だ」

「あゝ最悪だゝ」

「集」

「何ゝ？」

「学校に行ってみてはどうだ？」

「は？学校？」

「ああ、そうだ。学校に行けば自分の魔法が分かるかもしれない」

「でも、僕が行けるのか？」

「どうしてだ？行きたくないのか？」

「そりゃ行きたいけど学費とかがだな」

「ああ、それなら大丈夫だ」

「何で？」

「私の父は守護隊の隊長だからな」

「守護隊って？」

「守護隊とはその名の通り民間を護るために

結成された国家直属の部隊なんだ」

「ふゝん。それで？」

「行くか、行かないか」

「……行く」

「よし！ならばさっそく準備に取り掛かろう！！」

それから忙しかった。

まずはゆえの父に了承を得るために会ったり

部屋着を服を取りそろえたり等など色々な事をした。

そして……

「ふああああゝ」

「おいおい、本当に受験生か？集」

ゆえと集は学校の前にいた。

「眠いものは眠いの。それで、ここが」

「そうだ。ここが私が通ってるシルバロン魔法高等学校だ!!」

そこには真っ白な建物に闘技場のようなもの。それに寮の様なものやさらにはお店までもが完備されていた。すると二人の前に一人の女性が突然現れた。

「うお!!」

「はじめまして。貴方が如月集君ね？」

「はい」

「私は今日一日貴方の試験官を務める
フィーリ・ブリュッセルよ」

「よろしく願いいたします」

「ええ、よろしくね。早速会場に行こうか。」

桜さんも来る？」

「はい！」

二人はフィーリに連れられて試験会場に案内された。

「まずは今日の日程を説明するわね。」

この編入試験は一日を通して行われるわ。」

まずは一次試験の筆記テスト。次に

二次試験の身体能力を計る実技テスト。

最後に魔法戦闘を見る実技試験。質問は無いかな？」

「はい」

「よし、なら始めよう」

「がんばれよ! 集」

「ああ、任せろ」

こうして集のテストは始まった。

一次試験…筆記テスト

結構難しいな。でも、解けない事は無い」

二次試験…実技テスト

「このテストでは私の魔法を避けてもらうわ。
自分の魔法は使わないでね」

「了解」

「では、始めるぞ!!」

合図とともに次々と魔法が放たれた。

炎の玉や雷の弓の様なもの、

水を周りに敷いて雷を全体に通すものなど

ハイレベルな攻撃が行われたが、

集は何とか全てかわした。

「はい。そこまで!次でラストよ…

と言いたいけど昼休憩よ」

「りよ、了解」

休憩室へ

「お疲れさまだな。集」

「ああ」

「しかし貴様は避けるのだけはピカイチだな」

「褒めてんのか貶してんのか、どっちだよ」

「褒めているんだぞ？」

こここの入試試験はかなり厳しいものだ。

そして編入試験はさらに厳しいものだと言っている。

私もやったが一回は当たってしまったぞ」

「偶然だよ。偶然。じゃ、そろそろ行くわ」

「ああ、行って来い!!」

「お疲れ様。これで最後よ」

「はい」

「内容は私と全力勝負よ」

「了解」

「さっきの試験でこの人の攻撃は

大体読めた。あとは」

「言っとくけどさっきの試験の魔法はかなり手加減したから」

「！！」

「本気で来ないと」

フィーリは手に炎を纏わせ地面を殴った。

すると…

「ま、まじで？」

地面が大きくへこんだ。

先程の試験では全く傷すらつかなかったものが。

「死んじゃうわよ？」

「ひい！！」

最終試験が始まった。

別室でゆえが二人の勝負を観戦していた。

しかし、その内容はフィーリが圧倒的に有利な状況だった。

「まずいな。今の集はまだ魔法をキチンと使えていない。」

それに自分にあつたものも未だに分からない」

ゆえが考えていると後ろから何人かの人物がやって来た。

「おうおうやってるやってる」

「珍しいな。貴様らが見に来るとは」

そこには5人の少女と1人の少年がいた。

「別に良いでしょ？ 私達も見に来たいときもあるわよ」
金髪で露出度がかなりきわどい少女が話した。

「いい加減貴様のその破廉恥な服はやめろ。目に毒だ」
「あら。これでもスタイルは抜群よ」

金髪の少女が言うとおりの腰はかなりくびれており
胸もかなり大きく顔も整っており
軽く化粧をしていた。

「ゆえ……正解……貴方……凄く……破廉恥」

「貴様も貴様だな」

今喋った少女は緑色の髪のに
身長は少し低めできれいというより
可愛いという言葉がぴったりだった。

「彼……噂……人物」

「ああ、そうだ。彼は」

ゆえが言いかけた時少年が口をはさんだ。

「如月集。生年月日・身長・体重・年齢と共に
不明な少年だ。おれでも名前しかわからなかった」

「へーこの国一の情報通と謳われるあんたでさえ
分からないなんてね。ミステリアスで良いじゃない」

少年は服にかなりのチェーンを巻きつかせ動かたびに
じゃらじゃら言っていた。

もう一人の少女は青い髪の毛をしていた。

「……………」

何もしゃべらない少女は黒髪で腰ぐらいまでの
長さの髪をしていた。

「なあ、何であいつ魔法使わねえの？」

「私：不明：回答：要求」

「ああ、集は、そのだな」

「魔法が使えない、いやまだ眠っているのか」

「「「！！！！！！」」」

少年が部屋に入って来た事により

その場の空気が一気にピリピリしたものに変わった。

「へー貴方が来るなんてね。今日は大雨の日かしら？」

「悪いが俺は雨男ではない」

この少年は髪の色が6色に分かれていた。

「何故その事を？」

「何となくだ。貴様らも感じているんだろ？未だ

感じたことのない気配を」

「「「……………」」」

「まあ、その内、面白くなるさ」

「はあ、はあ」

「どうして魔法を使わないの？」

「さあね」

「余裕をこいてる訳でもなさそうね。

次行くわよ！！」

「くそ！！」

集が避けようとした時に地面が先程の水の魔法で

濡れていたために足を滑らせてしまい転んでしまった。

「うお！！」

「隙ありよ！！」

フィーリがその隙を逃す筈もなく、大きな炎の

球を作り集にぶつけた。

「集! !」

その光景を彼女たちも見ていた。

「あゝあ。残念、これで彼も終わりかしらね」

「私…同感」

「終わったわね。帰ろうかな」

三人の少女達が帰ろうとした時

「待て。これからだ」

「「「???」」」

「さあ、見せてみる。お前の魔法を」

「あちゃゝやりすぎちゃったかしら?」

フィーリはのんきに考えていた。

「でも、これであの子は…?」

突然フィーリの体が震えた。

「寒! !…まさか、彼がこれを?」

フィーリは集のいる場所を見てみると

「う、嘘でしょ」

巨大な氷がそこにはあった。

第2話 目覚めの時 Wake up!!! (後書き)

おはようございます!!! ケンです!!!
如何でしたか?

今日確認したらアクセス数がまさかの14でした。

確認したとき、まじで?と思いました。

まあ、二次創作とは違って一次創作は

ヒットしにくいですからね

感想もお待ちしております!!!

それでは

第3話 全てを凍らす者

「ここはどこだ？」

集は浮遊感を感じていると

頭の中に声が響いてきた。

『貴様が呼んだのか？』

「誰？」

『私は氷の魔法の……まあ何だ、そう言う事だ』

目の前に一人の真っ白な服を着た人物が現れた。

「分からないんだけど」

『つべこべ言うな。で？どうする？』

「何が？」

『貴様は氷魔法の力が欲しいか？』

「氷？氷魔法は確か机上の空論だけど」

『違うな。その昔大きな魔法戦争があった事は知っているだろう』

「うん、まあ」

『そこでその戦争を止めた英雄はだれだ？』

「確か炎、雷、水、闇、無機、自然の魔法使いじゃなかったけ？」

『そうだ。だがそれは口伝え故に一つ消えた属性がある』

「それが氷？」

『そうだ。さあ、どうする？このまま死ぬか』

奴を倒し合格するか！！選択するんだ！！』

「僕は……合格するんだ！！合格してこの世界で

楽しく過ごすんだ！！だから力を！！』

『良いだろう！』

「こ、氷？」

「あいつ何をしたんだ？」

「氷の魔法は存在しないんですよ？」

「……………」

「不明…実際…目の前…起こってる」

「見ろ！氷が碎けるぞ！」

ゆえが叫ぶとともに氷が砕け現れたのは…

「集なのか？」

髪の色が白色に染まった集がいた。

「そ、そんな氷の魔法は存在しないんじゃない！！」

「……凍れ」

集が地面を蹴ると共に辺り一帯が凍り始めた。

「ああ、もう！！」

フィーリは自然の魔法で大木を出現させそれを足場にして空中に飛び上がった。

「空気は凍らせられないでしょ！！」

「ふん、なめんなよ」

集の足もとが凍りだし氷柱となって一気に伸びて近づいた。

「う、嘘！！」

「空中では動けないよね？」

集が空気を叩く様に腕を振るとフィーリに氷の魔法が直撃し床に氷となって激突した。

「どうだ？」

しかし、氷が突然割れ一人の男が現れた。

「ん？貴方は？」

そこには六色の髪の色をしている少年がいた。

「すまないな。割り込む気はなかったんだが今の君は危険すぎるため、割り込ませてもらった」

「じゃ、じゃあ試験は？」

「合格でよろしいですね？フィーリ先生」

「ええ、文句の言いようがなく合格よ」

「よっしゃー!!」

喜んだ瞬間、集は気を失ってしまった。

「ん?ここは」

「目が覚めたか、集」

横にゆえがいた。

「うん、でもここは?」

「ここは」

「ここは保健室よ!!」

「?!!」

後ろからドアが蹴り破られたかと思うと五人の少女が出てきた。

「え、えっと誰?」

「ああ、紹介しよう。まずは破廉恥娘だ」

「誰が破廉恥娘よ!! 私の名はライカ・サイトよ!!」

ライカで良いわよ!」

「は、はあ」

「じゃあ、次は私ね?」

私はアクア・ラナよ?ラナで良いよ?」

「ど、どうも」

「私:名前:フォレル・シンラ。

:フォレル:良い」

「な、何故に片言?」

「昔かららしい」

「.....」

「ほらあんたも挨拶、挨拶」

「.....」

黒髪の少女がライカに耳打ちした。

「大丈夫だって!さあ、早く」

「わ、わた、私の」

黒髪の少女が名前を言いかけた時、集が突然頭をなで出した。

「ふえ？」

「そんなに怖がらなくても良いよ」

「：うん！私の名前はルーラ・ダークって言うの！！
ルーラで良いよ！！」

「珍しいわね」

「確かに、ルーラが初対面の人に怖がらないとは」

「ねえ、集君だっけ？」

「はいそうですが？」

「何で君はあの時なでたりしたの？」

「怖がってたからかな」

「意味が分からないけど、これからよろしくね？」

「ええ」

「これで集も私達と同じ学校か」

「一緒のクラスになれたらいいな」

ゆえとラナが嬉しそうに言った。

「そうですね。それでいつから何ですか？」

「今は長期休暇だから多分、登校は

長期休暇明けになると思うよ」

「楽しみです。ルーラさん」

「もう！ルーラで良いよ！！」

「癖だね。まあ、一週間もすれば治るよ」

「そろそろ帰ろうか、集。先生も帰っていいと

さっき、言っていた」

「うん」

「ふむ。この子が例の」

「はい」

理事長室にフィーリと理事長と思わしき人物がいた。

「で？どうだったかな？机上の空論の氷魔法は」

「はい、実際戦ってみて応用性、破壊力ともに

目を見張るものがあります。しかし、慣れていないのだと思います。威力にむらがありました」

「ふむ」

「それに試験が終わった後、気を失うほどまでに疲労していました」

「そうですか。ですが将来性はあると」

「はい」

するとドアがノックされた。

「どうぞ」

「失礼致します」

先程の六色の少年がやって来た。

「相変わらずカラフルな髪の色ですね」

「そうですね。昔からこれです」

「それで、どうでしたか？」

「はい。過去の文献を徹底的に漁ったところ
やはりある時代の所で意図的に氷魔法の
文献が消されていました」

「そうですか。それでその時代は？」

「魔法革命時代です」

「そうですか…」

「どうなさいますか？」

「んゝ今は観察という事にしておきましょう」

「分かりました。失礼致しました」

「如月集君か。楽しみだ」

その顔はまるで子供のような純粋な笑顔だった。
実際子供の様な姿だが

「あ？」

「どうしましたか？理事長」

「いや、今子供と言われたような」

「気のせいでは？」

「だな」

第3話 全てを凍らす者（後書き）

こんばんわ！ケンです！

いや〜一次創作は難しいですな〜

今日アクセス数確認したらまだ、51人でした〜

まあ、まだ連載しだして二日目ですからね〜

これから増えて行く事を祈っています。

それよりも如何でしたか？

次回で集が学校に編入致します。

それでは、感想もお待ちしております。

さよなら〜

第4話 初めての登校日

ここは学園の地下にある訓練場。

年中余程の事がない限り開いており

生徒が鍛練するのにもっとも最適な場所である。

今この場所で一組の男女がいた。

ゆえと集である。

「ふむ。ではやってみろ」

「ああ。行くぜ!!」

集が地面に手を置くとその箇所が徐々に凍り始めていき最終的に巨大な氷の花を咲かせた。

「うむ。前に比べるとムラもなくなっ

て威力も安定している。それに疲労も少なくなった」

「そうか？」

「ん？何か不満なのか？」

「ああ、まだ何か足りない気がするんだよ」

「何かとは何だ？」

「それがさっきから考えているんだが分からないんだ」

「難儀な話だな」

「ああ。まあ、前よりも疲れもないし。

成長はしたかな？」

「そうだな。だが、まだ鍛練しないといけないぞ」

「ああ、次やる…」

集が言おうとした途端に訓練場のドアが蹴り破られた。

「おっはよー！ー！！」

「おはよ」

「：おはよう：」

「おはよう？」

上からライカ、ルーラ、フォレス、ラナである。

「ああ、皆おはよう」

「おはよう」

二人も挨拶を返した。

「朝早くから熱心な事ね」

「まあ、鍛錬しないと強くなれないし」

「：言うとおりの：」

「で？どうだったの？集」

「うん。だいぶ慣れたよ」

「そっか？ねえ、今度私と模擬戦しようよ！」

「ああ、そうだね。僕も一回皆と闘いたいな」

「そんな事よりもう行くぞ。始業式が始まるのだから」

「「了解」」

ゆえが皆に言うのと早足で歩いていった。

「ここから理事長室は」

集は大きな扉の前にいた。

「よし、失礼します」

「はーい」

集が入るとそこには小さな子供がいた。

「間違えたか？」

「合っているぞ！私がこの学校の理事長だよ」

「理事長！」

「あ、やばい！」

すると理事長は集の後ろに隠れてしまった。

「あ、あれ？君、理事長知らない？」

「ええ、知りませんが」
「そう、ありがとう」

「もう良いですよ」

「ふゝすまないな。君が如月集君だね？」

「はい。えゝと本当に理事長？」

集が膝を曲げてしゃがみ込んだ瞬間

「そりゃ!!」

「ぐえ！」

突然、顎に頭突きを貰った。

「ふん！初対面の人にそれは無いのではないか？」

「す、すみません」

「まあ、良い。もう慣れたしな。さて、君のクラスなのだが」

「はい」

「ああ、その前に言う事があった」

突然思い出したかのように言いだした。

「君の魔法なのだがね」

「はい」

「出来るだけ、使わない方がいい」

「何故ですか？」

「君の魔法は氷だったね？」

「ええ、まあ」

「それは今の常識では有り得ない魔法なんだ。

まあ、昔は常識だったみたいだがね。

それに、今は不穏な動きを見せる輩もいるからね」

「分かりました。出来るだけこれは使いません。

でも、誰かの命が関わってるときは使いますよ？」

「ああ、そこら辺の判断は君がするといいさ」

「はい、それでクラスは？」

「ああ、すまない。クラスの方は選ばせてあげよう」

「へ？」

「実はなこの学校の入試・編入試験で優秀な成績を取った者にクラスを自由に決める権利を与えているんだ。そこで、君は史上初の全教科満点だ」

「まじですか？」

「まじです。何組が良いんだ？」

「ちなみに上から優秀な輩が集まっているぞ」

渡されたクラス表には全部で10クラスが書いてあった。

「……………だったら僕は8組で」

「ふむ。何故だい？君の実力ならば

余裕で1組に入れるんだがな」

「何となくです。それに僕って上ら辺の

クラスって嫌いなんですよね」

「だったら4組とか5組でも良いんじゃないのか？」

「一番初めに見えたのが8組だったもんですから」

「ふん。分かった。では、君は8組の29番だ」

「分かりました。それで、担任の先生は？」

「ああ、担任は」

「私ですよ。集君」

そこにいたのは編入試験で戦ったフィーリだった。

「フィーリ先生！」

「おはよう。じゃあ、行きましようか？」

「はい！」

こうして集は8組に在籍する事になった。

二人が出て行った後理事長は後ろを向き

「……出てきなさい。隠れてるのは分かってるぞ」

「おやおや、バレテしまいましたか。さすがは最強の乙女」
フリュンヒルデ

物陰から金髪の少年が出てきた。

「たわけ。それは昔の名前だ。今は」

「か弱き乙女ですか？」

「分かっているじゃないか。第4位。で？何の用だ？」

「まあ、少し興味があるお話を

されていたので聞きたいと思ひましてね。

それとその第4位という呼び方はよして下さい」

「ふん。まあ良い。だが残念だったな」

「そうですね。彼なら確実に1組に来ると思ったのに」

「私も安心しているよ。あんな人間とは思えない奴らのいる1組に入らずに済んで」

「おやおや、えらい言われようですね」

「そうか？あそこは実力主義の馬鹿が集まるところだからな」

「それは自分も同感ですね。貴族の在籍率が

この国ではトップの学校ですから」

この世界には貴族と呼ばれるものが存在している。

貴族は、その昔、活躍した偉人達の血を

継いでいると言われそれにより貴族は

税金が減額されるなどの特権などが与えられ優遇されている。

しかし、その影で権利が乱用され貴族と平民の間の差別などが今日の問題となっている。

「私は貴族というものが嫌いだな。自分は何もしていないのに偉人達の栄光をあたかも自分の物の様に飾る」

「そうですね。下のクラスにも彼らよりも優秀な生徒はいますから。ま、どの時代でもそういう咬ませ犬は

存在していますから。しかし、そのお陰でこの学校も一躍有名となっているでしょ？」

「私は名声などには興味がなくてな。この学校は先祖代代ひっそりと受け継がれてきたものだ。

今頃、ご先祖様は泣いておられるだろうな」

「ふふふ、そうですね。まあ、考えは人それぞれありますからね。そろそろ時間ですので私はこれで」

「ああ、その前に言う事があるぞ」

「何でしょうか？理事長」

「今年は気を付けた方がいいぞ。何せ彼がいるのだからな」

「如月集君ですか：忠告として受け取っておきましょう」

そういう少年は消えた。

「さて。この学校でどんな事を
パラドックスしてくれるのかな？異世界人」

理事長はその顔を歪めさせ笑った。

「じゃあ、私が言ったら入って来て頂戴」

「分かりました」

先にフイーリが入っていくと先程まで騒がしかった教室が静かになり号令が響いた。

「おはよう、皆」

「「「おはようございます!!」」」

「はい。じゃあ、S H Rを始めるわね。まずは皆長期休暇はどうだったかしら？」

「今日から心機一転してやっていきましょね」

「先生は男、出来ましたか？」

「：成績を10段階ほど落としておこうかしらね」

「す、すみませんでした!!!」

教室から笑い声が響いた。

「あの人独身だったのか」

「ちゃっかり初めて知った集だった。」

「それよりも今日はビッグニュースがあるわよ」

「もしかして先生が30代に入ったとか？」

「：来年は留年かしらね」

「す、すみませんでした」

「そうじゃなくて今日は転校生よ!!」

「「「おおおお!!!!」」」

「こんな時期に転校生？」

「男かな？」

「男だったら狙おうかな」

「じゃあ、入って来て頂戴」

「そう言われ集はドアを開けて入っていった。」

「「「……………」」」」

「えゝ如月集です。分からないことだらけですがよろしく願います」

「「「……………」」」

「「きゃ」」

「きゃ？」

「「きゃあああああああ！！！！」」

「！！！！！！！！」

突然、女子生徒達が甲高い叫び声をあげた。

「カッコいい！！」

「あの、白い髪に静かなオーラ。クール！！」

「この国に生まれてきてよかったー！！！！」

「はい。静かに！！じゃあ、如月君は端の席ね」

「はい」

「じゃあ、この後は教室で放送による始業式があるからね」

「「はーい！！」」

「あゝ疲れた」

「にやははは！！大変だなゝモテ男め」

「ん？君は」

「ああ、俺はゼロ・エスターテって言うんだ。よろしくな！！」

「ああ、よろしく！！」

「それで、お前の魔法は何なんだ？」

「ああ、僕は…秘密だよ」

「うゝケチだな」

その後、ゼロを通してクラスの人々とは知り合いにはなった。

そして、始業式も終わり授業は明日からという事で

今日は午前中には帰宅となった。

「んゝ眠」

「おお、いたいた」

「ん？ゆえか」

「私達もいるわよゝ」

ひよこつとライカとルーラ、そしてフォレスが現れた。
「ねえ、集って何組なの？」

「僕は8組だよ」

「ふーん。集なら1組に来ると思ったのに」

「どうも、上のクラスって好きじゃないんだよな」

「ふーん。あ、ちなみにこの皆は全員1組だよ」

「1組か。また遊びに行くよ」

「あゝそれは止めておいた方がいいわね」

「どうして？ライカ」

「1組：貴族：多い：差別：黙認：ひどい」

フォレスが片言で呟いた。

「ああ、この学校はこの国で

最も貴族の在籍率が高くてな」

「あいつらは一組の奴らには優しいけど」

「他クラスには平気で魔法の的にしたりとかするんだよ」

ゆえの後に続けてライカとルーラが補足した。

「ひどいな」

「ま、集なら問題ないだろう」

「だと良いけど」

「心配：集」

「ま、今日は帰りましょ」

「そうだな」

「おい、見たか今の奴」

「ああ、見た」

「あいつ一組じゃないよな？」

「ああ、カスクラスの癖に我らの

姫たちと対等に話している」

「これは報告だな」

集が1組で、姫と呼ばれている女子達と一緒に帰っている光景を恨めしそうに見ていた事に気付かずに笑いながら集は帰っていった。

第4話 初めての登校日（後書き）

こんにちわ！！ケンです！！

如何でしたか？

一時創作は難しいですね。

こんな作品をお気に入り登録してくださった方には感謝です！！

感想もお待ちしておりますので。

それでは！！

第5話 決闘の申し込み、そしてランカーの存在

「ん〜よく寝た〜さて、起きるとするか！」

桜ゆえの一日は5；00から始まる。

顔を洗い軽く歯を磨いた後

家の周りをジョギング。そして魔法の鍛練を行う。

そして、それを30分で終わらせた後

剣を15分間振るい、

今日の座学の予習を行う。

これが終わった時間に集が起きてくる。

最近はこのパターンが多くなっていた。

「遅い。何故今日は集が起きるのが遅いんだ」

ゆえは居間でイライラしながら待っていた。

何故待っているのかというと集の鍛錬に付き合う為である。

集はまだ、細かい魔法の操作が粗いためそれを

鍛練するのだが今日はいつもよりも来る時間が遅かった。

「仕方がない。起こしに行くか」

ゆえは集の部屋へと足を運んだ。

「起きろ！集！時間だぞ！！」

ドアを強く開けると部屋から冷気が漏れてきた。

「寒いな。仕方がない」

魔法を扱うものは最も自分にあつた魔法が体に

大きく影響を及ぼす。例えば雷を扱う者なら金髪で

年がら年中、静電気が起きてしまい

髪を整えるのも一苦労する。

炎を扱う者なら、人よりも体温が高く冬でもそれ程着こまなくても寒いとは感じない。

そして、氷の集は髪の色が白になりそこにいるだけで天然のクーラーとなる。

なので部屋に溜まった冷気がドアを開けたことにより外に漏れ出したという事である。

しかし、全員が全員、髪の色が染まったりする事はない。

案の定、集は気持ち良さそうに涎を垂らしながら熟睡していた。

「やれやれ。起きろ、集!!」

「うお!!」

耳元で叫ぶと集が飛び起きた。

「鍛錬の時間だぞ」

「へ? もうそんな時間?」

「ああ、とつくに過ぎている」

「ごめん。すぐに準備するよ」

「ああ」

ゆえは集が着替えるので外にいとぼさぼさの髪の手で出てきた。

「集。その寝癖は何とかならんのか?」

「直すのめんどくさいしね。始めようか」

「ああ」

こうして朝の時間帯はこうして過ぎて行く。

「つ、疲れた」

「やはりお前は細かい操作が苦手だな」

「自分不器用ですから」

「不器用にも程がある」

「おっはよ」

「うお！ライカ。頼むから朝から

タツクルしないでくれ」

後ろからライカが強烈なタツクルをかましてきた。

「まあ、良いじゃない。で？学校生活はどうかかな？」

「まだ、登校して二日目なんだけど」

「良いじゃないのよはっはっはっはっは！！」

「朝：うるさい：ライカ：迷惑：頭：痛い」

「そう言うあんたはテンション低すぎるのよ！！」

「いや、フォレスぐらいがちょうどいいんだが」

「え」

「早く行くぞ。遅刻するぞ」

「「はーい」」

「了解」

「じゃあ、今日の連絡はお終い。授業頑張ってね」

フィーリ先生のSHRが終わり次は集にとって初めてとなる
授業が始まるうとしていた。

「なあ、ゼロ」

「ん？どうかしたか？」

「授業って何やんだ？」

「授業は、歴史、用法、実践、研究、その他いろいろ。

一時間目はその内の用法だ。ほら、先生が来たぞ」

「授業を始める」

キンコーン、カーンコーン

「む。ここまでか。じゃあ、今日は終わりだ。

宿題はさっき言った通りの箇所だ。

くれぐれも忘れるなよ？特に！ゼロ！」

「は。はい！」

「今度忘れたらみっちりしごいてやるからな」

「は、はい」

「つ、疲れた」

「全部寝ておいてよく言うな。ゼロ」

「寝るのも疲れるんだぜ？な、後でノート見せてくれ」

「良いけど、所々端折ってんぞ？」

「良いの、良いの」

「なら、良いが」

「さっすが集だぜ！トイレ行こうぜ」

「ん。分かった」

「にしても簡単だったな」

「まあ、今は基本事項しかしてないし、俺達一年だし」

「そうだな。ん？あれは？」

目の前に野次馬が見えた。

「うわゝあれは関わらない方がいいな」

「何で？」

「よく見てみろよ。あの制服の胸の刺繍」

「刺繍？あれがどうしたんだ？」

「あれが付いているのは貴族って印なんだよ」

「ふゝん」

片方の生徒の制服の胸に刺繍が付いており

それが、貴族の証だという。

「お前、この俺にぶつかるとはいいい度胸してんじゃないか。平民のくせに」

「す、すいません」

「このワルロス家の長男にぶつかっておいてそれだけかよ？ああ！？」

「ご、ごめんなさい。で、でも急に貴方が出てきたから避けきれなくて」

「ああ！？この俺がわざとお前などにぶつかったとでもいうのか！？」

「な？やばいだろう？」

「ヤバいというか、ワルロスって奴名前にワルってあるから外見も悪そうだな」

集の言うとおりその生徒は金髪で服装もかなり着崩していた。

「お、お前！くくくくく！！！！わ、笑かすなよ」

「ぷくくく！！だって、見るからに悪そうだろう？」

「くくくく！！我慢だ、我慢だ」

「貴様分かっていないようだな。貴様そこで脱げ」

「え？」

「あ？」

「聞こえなかったか？脱げと言っている」

「い、嫌です！」

「ほう。平民の癖に貴族の言う事が聞けないのか！！」
ワルロスは女子生徒に手を振り上げた。

「きゃー！！」

「貴様、何の真似だ？」

「こっちが聞きたいね。貴族の男子が
か弱き乙女に手を挙げていいの？」

ワルロスが女子生徒を殴ろうとした腕を

集は掴み、当たる寸前で止めていた。

「ふん。そんな奴生きていても変わらないだろう」

「あ？何だった」

「聞こえなかったか？貴族でもない奴が生きていても
意味がないと言っているんだ！！」

集の中で何かが切れた。

「ぐうえ！！」

「「「！！！！！！」」」」

集はワルロスの顔を思いつき殴った。

「貴族の何が偉いんだ？こら！！」

「な、何だと？」

「お前らは何をしたんだ！？」

何か人に凄いといわれる事をしたのか！？

てめえらはただ単に威張ってるだけだろうが！！」

「き、貴様！！俺を侮辱する気か！？」

「侮辱だと？お前がこいつを侮辱したんじゃないのか？」

「貴様！！決闘だ！！！！」

「「「！！！！！！」」」」

「ああ、良いZ」

「待て！！集！決闘はよせ！！」

決闘を受けようとした集をゼロは慌てて止めに入った。

「何だよ？」

「貴族は俺たちみたいな平民よりも

魔力の潜在量が強いって決まってるんだよ！！」

「そんなもん誰が決めたんだ？」

「そ、それは」

「お前らはただ単に貴族が偉人の血を次いでいるからという事で強いとか思ってるのか？」

「……」

「んな訳があるか！！」

「！！！！！！」

「貴族だから俺たちよりも強い！？

そんなもん誰が決めたんだ！！」

「ならば決闘を受けるのか？」

「ああ、上等だ！！受けてやる」

「ふん！後悔するなよ？」

決闘は明後日の闘技場で行う！！

それまでに精々鍛錬でもしてろ！！

ふはははははははははははは！！！！」

「くそ！！胸糞悪いな。大丈夫か、お前？」

「は、はい。……ごめんなさい！！」

「何、謝ってるんだ？」

「私の所為で貴方が貴族と闘う事になって」

「別に良いよ。それにあんな奴に負ける気なんかしないし」

「で、でも」

「良いから。さっさと教室に行きなよ」

「は、はい」

そしてその時間は何も起こらず一日が終わり放課後となった。

「集!!!」

放課後、一人で帰っていると後ろからゆえの声が聞こえ振り返るとゆえとルーラ、そしてライカがいた

「ん、ゆえか。どうかしたのか?」

「どうかしたのかじゃない!! 何であんな事をしたんだ!?!」

「あんな事?」

「今朝の事だよ。集ったら貴族を殴ってさらに決闘まで受けたんでしょ? 学校中の噂になってるよ?」

「ああ、そんな事か」

「そんな事か、じゃない!! 分かってるのか!?!」

君の今の實力は」

「うるさいな」

「何!?!」

「決闘を受けたんだから俺はそれを受ける。

そして、あいつに勝つ!!!」

「だ、だが」

「いいじゃない。ゆえ」

「ライカ!!! だが」

「どうしたの? あんたらしくないわよ?」

「だが」

「大丈夫だよ!! きっと集は勝つよ!! ね?」

「当たり前だ!! 絶対に勝ってやる!!」

ゆえは自室で考えていた。

「なぜ私はあの時、あそこまで必死になって集を止めたんだ？ 集が怪我をするからか？

いや、集は確かに強くはなっている。だが、その強さは平民の中で言う事で、

いや、だが貴族とも：あゝもう。分からん」
考えれば考えるほど泥沼にはまっていった。

「ゆえちゃん。ご飯出来たから降りておいで」

「はゝい。ま、良いか」

「ご馳走様でした」

「はゝい。美味しかったかしら？」

「はい！とても美味しかったです！！」

「ふふふ、ありがとう。食器は置いておいていいわよ」

「はい、ありがとうございます！！」

「集、少しいいか？」

「あ、悪い、寝る前で良いか？」

「あ、ああ別に良いが」

「悪いな」

そう言い集はどこかへと出かけてしまった。

「最近、集君食事が終わったらすぐにどこかに行くわね」

「え？それって本当？お母さん」

ゆえの母が突然、思い出したかのように言った。

「うん。だって昨日も食べた後に出て行って

帰って来たのは夜遅かったかしらね」

「そう：ありがとう。ご馳走様でした」

「はーい」

「あ、しまった。教室に宿題を忘れた。

仕方無い。取りに行くか」

ゆえは復習をしていると授業で出された

宿題にプリントを学校に忘れた事に気がついた。

「まだ、時間もそんなに遅くはないから取りに行くか」

ゆえは母に断ってから学校に取りに帰った。

「あつた。あつた。これが無いと宿題が出来ないな。ん？」

ゆえが帰ろうとしている時に地下鍛錬室の明かりがついている事に気がついた。

「こんな時間帯に誰が？」

ゆえはつけっ放しかと思ひ確認しに行くとそこには：

「集？」

集が一人で鍛錬をしていた。

「はあ、はあ。まだだ！！」

集は立ち上がり炎の魔法を放つが出した途端に炸裂し、炎が辺りに拡散された。

しかし、以前は音だけだった魔法が

辺りに炎を撒き散らすほどにまで上達していた。

「凄い威力だな。初級魔法でありながら

ここまでの威力を出すとは。

だが、やはり細かい作業が苦手なようだな」

「またかゝ…次やるか!!」

集はまた立ち上がり鍛錬を一人黙々と続けた。

〔頑張れよ。集〕

ゆえは敢えて集には声をかけずに気付かれないように鍛錬室を去り家へと帰っていった。

第5話 決闘の申し込み、そしてランカーの存在（後書き）

こんばんわ、ケンです！！！

如何でしたか？

感想もお待ちしております！！

それでは！！

第6話 初めての模擬戦、

「んゝ…やべえ！！寝過ぎた！！」

集が目を覚ました時間は鍛錬の時間を大幅に過ぎていた。

何せ昨日は細かい魔法の作業を鍛錬をしていたら

気付いたら日付が変わる寸前だった為、

慌てて帰って、寝たのは良いが結果はこれだ。

「やばい、やばい！ゆえに怒られる！！」

集は慌てて階段を降り居間に入った。

「悪い！！ゆえ！！寝坊した！！」

「ん？集か。まだ、6…30だぞ？学校に行くには早い時間だぞ？」

「へ？」

予想とは違いゆえは満面の笑みで集を迎えた。

「い、いやだから鍛錬は」

「ああ、鍛錬か。あれは曜日毎にしようと思う」

「曜日毎に？」

「ああ、今日は休みにして明日にしようと思うのだが？」

「あ、ああ。そうさせてもらう」

「じゃあ、まずは顔を洗ってきたら？集君」

「あ、はい。そうさせて頂きます」

「珍しいわね。ゆえちゃんが人を気遣うなんて」

「か、母さん！！人を鬼のように言わないでよ！！」

「あらあら。そこまで反応するなんて、もしかして集君の事が」

「集！！やはり鍛錬をするぞ！！」

「はー！！？ちょ、ちょっと待て！！今さっき今日は休みだって！

！」

「前言撤回だ！！鍛錬は毎日してこそその鍛錬だ！！行くぞ！！決闘は明日なのだぞ！！」

「へーい。ようやくゆっくりりと朝を過ごせると思ったのに」

「なんか言ったか！！？」

「い、いえ何もありません！！」

ゆえは顔を赤くしながら集を掴み出て行った。

「でも、本当に変わったわねーゆえちゃん。

これも集君が来てくれたおかげかな？」

母は嬉しそうに顔を緩めた。

「で？今日は何をするんだ？」

「今日は私と模擬戦だ」

「了解」

「準備は良いか？」

「ああ、いつでも」

辺りに一瞬静かな空気が流れるがその空気は何かが発するような音で砕かれた。

「せい！！」

「うお！！」

ゆえが物凄い速度で近づき、顔面を殴られかけたが何とか避け、距離を取った。

「何だ今の？何かが発したような音が一瞬した後、ゆえが目の前にいて、そして殴られた」
集はいったん距離を取りながら考えた。

「さあ、次行くぞ！！」

「つまりあの音がしたら伏せればいい事!!」

そして音が一瞬間こえ、ゆえが消えた。

「喰らうか!!」

集が伏せた瞬間、何かが通り過ぎた感じがした後に連れて放たれた炎に飲み込まれてしまった。

「たわけが。二度も同じ技を連続で使うと思うか？

使えば使うほど技は相手に慣れを与え避けられるものだ」

ゆえが言い終わった瞬間、炎の中から氷が見えた。

「危なかった」

「ギリギリで自らを凍らして炎のダメージを無くしたか」

「いやゝほんと危なかったよ。昨日までの僕だったら

確実にやられてた」

「ほゝ昨日の自分よりも強いと」

「ああ。それと余所見は禁物だ。ゆえ」

「なn」

ゆえが言いかけた瞬間、上空から氷柱が何本も落ちてきた。

「この前の僕は遠くの部分を、凍らす事は

出来なかったけど、今はある程度の距離なら

遠くの物も凍らせるようになった」

「そうか。それは喜ばしい事だ。だが、この程度で

私は倒せんぞ」

火柱が立ち氷柱を一気に水へと

変えてゆえが現れた。

「ああ、そう思ってるよ!!」

集が腕の前に出すと

冷気が放出されゆえも炎を放出し防いだ。

「こんなものなのか？お前の力は!？」

「んな訳ねえだろ!!」

集はさらに魔法を放っていくが
それをゆえは魔法も使わずに全て避けていった。

「おかしい。何故さっきから同じ攻撃ばかりしている」

先程から集は空間を叩くようにしてゆえに

氷の魔法をぶつけてようとしているが

何度も避けられているにもかかわらず同じ攻撃をしていた。

「同じ攻撃ばかりして勝てると思ってるのか!？」

「さあね？」

「ならばなZ!!!」

ゆえが言いかけた時何かにぶつかった。

「これは、氷?…まさか!？」

ゆえは慌てて周りを見渡すが既に

周りは氷山の様な氷に囲まれ逃げ道が無かった。

さらに大部分が水びたしになっていた。

「何もなしに同じ攻撃ばかりする訳ねえだろ!？」

突然、地面から体に電気が流れ込んできた。

「うぐ!! まさか、この為に同じ攻撃で氷を作り

逃げ場をなくしていたのか」

「そうだ!!」

「!!!!!!」

見上げると集は空中に飛んでいた。

「さあ、終わりだ!!」

集は逃げ道のないゆえに向かって

氷の魔法を最大威力で放った。

「残念だが終わるのは君だ」

「????」

ゆえが地面を強く蹴ると円状に炎が展開されていき
そこから円柱が集にめがけて放たれた。

それにより全ての氷は溶かされ集は空中にいるので
回避できずに直撃した。

「はあ、はあ、はあ」

「私の勝ちだ、集」

集の首には刀が当てられており

周りにはいつでも攻撃できるように炎が揺らめいていた。

「負けました」

二人は鍛錬場を抜け、教室までの道を歩いていた。

「あゝ疲れた」

「当たり前だ。あれだけばこすか、使えば魔力が切れるに決まっ
ているだろう」

「んゝつい意識から飛んでしまうというか」

「はゝそんな事で勝てるのか？明日の決闘に」

「あんたとあんな奴を比較したらダメでしょが」

「ライカ！」

後ろからライカが話に割り込んできた。

「おはよ。にしても傷だらけねゝ集」

集の全身には包帯が巻かれていた。

「ん、まあねゝ。じゃあ、僕はこっちだから」

「ん。また放課後ねゝ」

集は二人と別れ教室へと向かって行った。

「ねえ、ゆえ」

「何だ？ライカ」

「あの時の魔力からしたらあんた魔力を制限する奴、外さなかったのね？」

「ああ、外したらあいつは」

「分かってる。でも、何であんたが集みたいなのの特訓に付き合ってるわけ？」

.....

「前のおんななら確実にあんな奴とは話もなかった。それがあんなの本性でしょ？」

「そうだな」

「何があったの？ あいつは貴方の本性を出すのを躊躇うほどの何があるの？」

「分からないんだ」

「珍しいわね。ま、良いわ。その内分かったら教えてよね」

「ああ」

二人は意味深な話をしながら教室に入って行った。

[illegible]

「笑いごとではありませんよ！？理事長！！」

理事長室には高笑いが響いていた。

「いやゝすまない。まさか転校そうそう、

貴族を殴るとは。愉快、愉快」

「分かってるんですか、理事長！！ワルロス家は貴族の中でも上位の強さなんですよ！？それをまだ編入して間もない集君が戦うなんて無謀にも程があります！」

「良いではないか。これも良い経験だ」

「あゝもう！！貴方も言つて下さいよ！！」

そこには一人の生徒がいた。

「よろしいではありませんか」

「あゝ何で貴方もそう言うのよ!？」

「私は決闘なんぞに興味はありません」

「だったら」

「でも、如月集君の実力が見たいんですよ。」

1組に入れる實力を持ちながら敢えて8組に入った彼の實力と魔法をね」

「残念だが集君は君の見たがっている氷は使わないぞ？」

「でしょうね。しかし、それだけが彼が1組に入れる理由ではないんでしょ？」

「……」

「勝手ながら私はあの編入試験の様子を記録した物を見せていただきました」

「はゝ何度言えば分かる。あれは教員以外閲覧禁止だぞ」
実は教員用に入試・編入試験での戦いの様子を
事細かに魔法で書かれた物が作成され保管されていた。

「まあ、そこは置いておいて率直に思ったのは異常ですね」

「置いておくのはよろしくないが、まあ良いが

集君が異常とはどういう意味だ？」

「ええ。彼のあの攻撃の避け方は
恐らくこの学園で一番、効率よくかつ疲労が少ない
避け方でしたよ。あんな芸当は恐らく我々でも無理かと」

「…それで」

「後は応用性です。」

あの、氷柱による接近は、初心者とは思えないですよ。
普通なら試しにどのようなものか、確認するんですがね。

まあ、まだ素人なので負ける気はしませんがね」

「ほゝそこまで気付いていたとは、大したものだ」

「それでも伊達に第四位をさせて頂いていますから」

「あのゝそう言えば何ですがランカーって

全部で十人ですよね？」

「ああ、そうだが」

「でも、分かってるのはたった数人ですよね？」

「ええ、皆シャイなんでしょう」

「それだけなんでしょうか？」

「さあな。とにかく明日の決闘は決行だ！！異議は認めん！！」

第6話 初めての模擬戦、（後書き）

こんばんわ!!! ケンです!!!

如何でしたか!?

つくづく自分の文才の無さを感じさせられますね。

他の方の作品を見ている時は特に。

感想もお待ちしております!!!

それでは。

第7話 戦いの始まり

集が通学路を歩いていると突然、後ろから声をかけられた。

「…おはよ」

「……！ ビックリした。フォレスか、おはよう」

「…今日…決闘…楽しみ…集…頑張れ」

フォレスは小さくガッツポーズをした。

「か、可愛い……！ たまんねえ……！ ギュっとなしたい……！ 家で愛でたい……！」

「集…どうかした？ …顔…可笑的……」

「あ、ああごめん。応援よろしくな？」

「勿論…集…勝つ？」

「当たり前だ……！」

「…そう…ガンバ」

そう言い残しフォレスは早足で教室に向かって行った。

「僕も行くかね」

集が教室に入ると全員が同情の様な視線を向けてきた。

「あ？ 何だよ？」

「な、なあ今でも遅くないから謝った方がいい」

一人の生徒が集に近寄ってこう言った。

「何で？」

「だってお前、無謀にも程があるだろ。俺たち平民はあいつらには勝てない。絶対に。」

お前、今日負けたら、学園の笑いもn」

クラスメイトが言いかけた時、集は机を蹴とばした。

「「……！……！」」

「うっせえぞ……！ お前らは貴族、貴族つつて

一生あいつらに媚を売る気か！？ああ！？」

「「……………」」

「俺はごめんだ。お前らみたいに俺はあんなクズな奴らどもに媚を売るのなら死んだ方がまだ」

「ちっ！！胸糞悪いな」

集に何人かの生徒が近づいてきた。

「ん？」

「頑張ってね！！集君！！」

「応援してるから！！」

先程とは違い純粹に応援しているようだった。

「俺も応援するぜ？集」

「ゼロ」

「お前のお陰で目が覚めたよ。頑張れ！！」

「ああ、勿論だろ！！」

「すっげ〜。デカイな」

集がいる場所は決闘が行われる闘技場だったがその広さに驚いていた。

「まあな、ここは全生徒が入るし大会とかもここで行われるんだぜ？」

「で？何でお前がここにいる？ゼロ」

「いや〜近くでお前の雄姿を見たくてさ」

「別に良いけど。誰だよ？そこに隠れてる奴！！」

「おやおや、バレてしまいましたか」

「いつからお気づきに？」

「魔力を僅かに感じた」

「ほう。魔力はほぼ、消していたんですがね
まだまだという事ですか」

「ところで、お前誰だ？」

「し、知らねえのかよ！？集！この人は
ランカーで第4位の人だぞ！？」

「ランカー？何だそれ？」

「知らねえのかよ！？ランカーって言うのは一年に一度行われる
全学校対象で開かれる大会で上位十人の事だよ！！」

それで、この人は第4位の

ライト・サンダーさんだよ！！会えるとかまじですげえ！！」
ゼロは目を輝かせて言った。

「で？その4位さんが何の用ですか？」

「いえいえ、君に会いたかったんですよ」

「そうですか。もう良いですか？そろそろ時間なんですけど？」

「ええ、どうぞ。もう満足です」

そう言いライトは一瞬で消え去った。

「き、消えた」

「まあ、頑張れよ！！集！！」

「ああ」

「ふうなかなか面白い人でしたね」

「で、どうだったのよ。ライト」

「おやおやこれは第五位のライカさんではないですか。
いつもでも美しいですね」

「それはどうも。で、聞いてんだけど？」

「そうですね、彼は勝つでしょうね。それも圧倒的に」

「へー珍しい。あんたが勝利宣言するなんて。」

今日は雷が降るかしら？」

「はっはっは！！それは無いですよ」

「そう。そろそろ始まるわね。見に行こうっと」

ライカは消え去ってどこかに行ってしまった。

「自分も行きますかね」

ライトも一瞬で消え去った。

会場はかなり熱狂していた。

「あゝ何で理事長も許しちゃうんですか？」

「はっはっはっは！！ま、私も興味があるのだよ」

「はゝ集君、勝ちますかね？」

「さあな。ま、結果はすぐに付くと思うがな」

「何ですか？」

「直感だ」

「はゝ」

「よく来たな。平民」

「俺は平民で言う名前じゃない。如月集だ！！」

「平民の名前を覚えると思うか？この俺が」

「覚えなくてほしいね。お前みたいな奴には」

「ま、また！！まあ、良い。ここで君は負けるのだから」

「あっそ。で、どうする？」

「何がだ？」

「ハンデだよ」

「はっはっはっはっは！！そうか、そうか。君は勝てないからハンデをくれというのか！？いい心がけだな」

「何を勘違いしてんだ？お前がするんじゃない。

ぼくがするんだよ」

「「「「はははははははははは！！！！」」」」

会場が笑いの渦に巻き込まれた。

「あいつ、何言ってんだ？」

「さあ？」

会場からこの様な声が多数聞こえた。

「はははははは！！！これは参ったな。

まさか君が俺にハンデとはな。何かの冗談かい？」

「いや。大真面目だが？」

「そうか。ならいらないな。君はすぐに死ぬのだからな！！！」

『それでは、これよりボルテック・ワルロスと

如月集の決闘を始める。始め！！』

「先攻は君にあげよう。さあ、かかってきたまえ」

「良いのか？本当に？」

「ああ、良いとも。ま、君程度の攻撃が

この俺に届く事はn」

ボルテックが言い終わる前に吹き飛ばされた。

「「「……………」」」

先程まで大騒ぎしていた会場が一気に静かになった。

「うん。手加減したけど中々飛ぶな」

「ごほ！！ごほ！！くそ！！」

「おゝい。大丈夫か」

「貴様！！何をした！？」

「べっつにーただ単に殴っただけだけど」

「もう泣いて謝っても許さん！！」

ボルテックは剣を抜き集に切りかかって来た。

「凄いですねー集君は」

「はっはっはっはっはっはっは！！！！！！」

「ふあああ」

「……」

「いっけゝ集!」

「ZZZZZZZZ」

別室は凄まじい事になっていた。

ちなみに上からライト、ライカ、髪の色が六色の少年
フォレス、ルーラ、チェーンの少年である。

「あ、あのゝ試合は見ないのでですか?」

待機していた執事の様な男性が声をかけた。

「ん? ああ、見る必要はないな。もう勝つ方は決まった」

六色の髪をした少年は試合を見ずに

あくびをしながら答えた。

「え? もうですか?」

「あゝ腹筋割れそう。集があんなへなちよこ貴族に負けるとでも?」
今まで大爆笑していたライカが質問した。

「い、いえ。ですが」

「そうだよ!! だってゆえと鍛錬したんだよ?」

「あゝそう言う事ですか。納得しました」

執事の男性は納得したのか自分の持ち場に戻った。

「でも、凄いね」

ルーラが感心したように言った。

「そうですね。まさかここまで圧倒的とはね」

「当たり前だ!! 何せ私と鍛錬したからな!!」

ゆえは自慢げに言った。

「集…強い…」

「はゝ面白かった」

「ふふふ、凄いな」

ルーラが持っているコップが突然、黒い何かに

飲み込まれ消えた。

「ふふふ、本当にすごいな〜あ〜
一回で良いから食べてみたいな〜」
その笑顔は黒く冷たいものだった。

「おおおおお！！」

「おい、いつまで続けるつもりだ？」

「何！？」

「さっさとお前の魔法使えよ。負けるぞ？」

「いいだろう！！使ってやる」

ボルテックは一旦距離を取った。

「俺の魔法は雷！！」

「ネタバレすんなよ」

ボルテックは刀に雷を纏わせ体にも纏わせた。

「喰らえ！！」

「……」

一瞬、ボルテックが消え、集の後ろに現れた。

「雷の魔法で体に電気を纏わせ身体能力を一時的に上げて切る。

お前は切られた事にすら気づかずに死ぬ」

剣を納めようとした時、いつもより剣が軽かった。

見てみると刀身が折れていた。

「馬鹿な！！」

「速いけど十分反応できる早さだな」

「き、貴様何をした！？」

「簡単だよ。ただ単に君が僕を切る瞬間に刀身を
強く殴って砕いただけ」

「そんなバカな！？」

「確かに速かったけど十分対応できる早さだし」

「ふふふ。ははははははは！」

「ん？狂った？」

「隙だらけだ！」

ボルテックが手を上げると、

集に向けて落雷が落とされた。

「はははははははははは！！どうだ！？所詮、

平民如きに俺達、貴族に勝てるはずがないんだよ……！！

平民は一生、貴族の道具だよ!!!」

「ちよつと待てよ」

「な！まだ、お前立って」

「平民が道具？ ふざけるな！！」

「!!!!」

「貴族だろうが平民だろうが同じ人間だろうが！！」

それなのになんでお前達は貴族という立場だけで

「平民を差別するんだ！」

「この世界は強きものが生き残り弱い物は死ぬ！！」

「ならば弱い物を道具として使って何が悪い！」

「悪いに決まってるだろうが!!俺がお前たちに教えてやる!!」

平民も貴族も関係ない事をな！！」

集はボールを投げるように腕を振ると

雷が放出されボルテックに直撃した。

「それでも、分からねえようなら俺が分かるまで」

「お前たちを潰していく」

「い、今は一体」

「ふん。凄いじゃない、集」

「そうですね」

「何が起こったんだ？ライカ」

「集は落雷が直撃する前に咄嗟に

腕に雷の魔法を纏わせたのよ」

「それにより雷に対し耐性を作り

落雷のエネルギーを自らの雷にプラスしてぶつけたという訳です」

ライカとライトはお互い雷の魔法のランカーである為

雷に関しては人よりも詳しかった。

「だ、だが集は氷以外の魔法を使うと暴発していたんだぞ？」

「あら、そうなの？ そうには見えなかったけどね」

会場はまた静かになっていた。

何せ平民が貴族にハンデをやるといういはじめ

さらには貴族を圧倒した闘いを披露した。

「終わりか？」

集が帰ろうと後ろを向いた瞬間……

[illegible]

「！！！！！！」

ボルテックから大量の黒い何かが出てきた。

第7話 戦いの始まり（後書き）

おはようございます。如何でしたか？
感想もお待ちしております。
それでは。

第8話 戦いの終わり、そして…

「理事長!!」

「あれは…まさか!!」

別室で見ていた理事長の顔が黒い何かを見た途端に驚愕に染まった。

「どうなさいますか!？」

「すぐにランカーを闘技場に派遣しろ!!」

それと教員は生徒たちの避難誘導の準備を!!」

「は、はい!!」

フィーリは慌てて他の教員に連絡しに行った。

「まさか、奴が?」

会場は騒然としていた。

ボルテックが叫びをあげたかと思うと突然、苦しみながら黒い何かを出し始めた。

「これは?」

集は目の前に出てきた黒い何かを睨んでいた。

黒い何かは炎の様に揺らめいていた。

すると、突然黒い何かがボルテックを包みこみだした。

「あれはやばい!!」

直感的にそう思った集はすぐさまボルテックを救出しに行くが黒い何かがそれをさせまいと攻撃してきた。

「うお!! 何だあれは!？」

黒い何かから飛ばされてきた物は

床についた瞬間、その部分の床が消滅した。

「な！き、消えた？それよりも、あいつだ！！」

集は攻撃を避けながら近づいて行くが遅かった。

黒い何かがいきなり拡散した。

「く！！」

「ぐうううう！！！」

「ボルテック…じゃなさそうだな」

その姿は、目は真っ黒に変色しており体から

黒い何かが煙のように揺らめいていた。

「ぐわあ！！」

「！！！！」

得体のしれない何かが地面を強く蹴ると地面は抉れ衝撃波が集を壁に打ち付けた。

「があ！！痛ってえな！！」

集は視線を上げた瞬間には目の前に膝が迫っていた。

「くそ！」

どうにかして首を曲げて避けると壁は碎かれ崩壊した。

「どんな膝してんだよ！？」

驚きながらも相手から眼を離すわけにはいかなかった。

「ぐがああああ！！！！」

相手は止まらずにさらなる追撃をかけようとしてきた。

「目を覚ませ！！この野郎が！！」

集は顔面に拳を直撃させたがそれでも止まらずに逆に相手に殴られ壁に衝突した。

「ぐうえ！！」

集の体からは既に大量の血が流れていた。

「まだ、皆が避難しきっていないから氷が使えない」

「ぐううう」

動けなくなっと思ったボルテックは今度は
観客席に体を向けた。

「や…めろ」

「ぐううう」

「や…めろって言ってんだろ!!」

「があああああ!!!!」

「止めろー！ー！ー！ー！！！」

得体のしれない何かが雷を

観客席に残っている生徒に向かい放ち大爆発を起こした。

「な、何だあれは!?!」

別室で見っていた彼らもその様子を見ていた。

「ルーラ!! あんた何か分かる!?!」

ライカはルーラに疑問をぶつけた。

「分からない!! あんなのは見たことが無いよ!!」

「じゃ、一仕事といくか」

今まで寝ていたチェーンの少年が目を覚まし行動を開始しようとした。

「少しお待ちになってくれませんか？」

「ん？」

ライトが動こうとした少年に声をかけ動きを止めた。

「この件は彼に任せてみませんか？」

「どういう意味だ!?! ライト!!」

「私は彼の实力が見たいのですよ。 ゆえさん」

「何を言っている！？早く行かないと集が！！」

「彼は唯一の氷の魔法の持ち主です。私はそれがみたいですよ」

「そんな事は知らん！！私は行く！！」

「おやおや、珍しいですね。貴方があの程度の人物を助けに行くとは。あの時とは大違いですね」

ライトがそう言った瞬間、ゆえは怒りを露わにして刀を抜き刀身に炎を纏わせライトに向かって行った。

「うるさい！！」

ライトも刀を抜き雷を刀身に纏わせ受け止めた。

「ちょ、ちょっと！！こんなところで戦う気！？

状況を考えなさいよ！！二人とも！！」

「ライカは黙ってる！！ライト、つくづく私は貴様のその考えが気に食わん」

「よく言われます。ですが見たくはありませんか？

氷の魔法の力を」

「お前の見たがっている氷、あいつ使ったぞ」

「おお！！」

ライトはそう言われ画面に食いつくように見た。

「ぐううう」

満足したのかボルテックだったものはさらなる標的を探そうと背を向け移動しようとしたが足に冷たさを感じた。

「ぐう？」

不思議に思い足に目をやると足が凍っていた。

「はあ、はあ。もう良いや。皆はまだ、いるみたいだけど

逃げるのに必死だろ。お前を凍りづけにしてやる」

集は咄嗟に観客席の壁を凍らし巨大な氷壁を作り雷から守っていた。

「ぐああああ!!!」

ボルテックだったものは集に向かっていき雷を撃つが集はそれを氷の壁を瞬時に作り防御した。

「お前は俺を怒らした。覚悟しろ」

集はその壁に触れて、瞬時に氷壁を横に伸ばして相手にぶつかっても伸ばし続け、壁に激突させた

「ぐえええええ!!!」

壁に激突してもなお、相手は氷を碎き

集に向かってきた。

「まだ、動くか。仕方無い。許せよ、ボルテック」

集はボルテックの体を徐々に凍らしていった。

「ぐつああああ!!!」

「中にいるのは、誰かは知らないが、

ここで凍りづけになってもらう。

永遠にその中で眠ってろ!!!」

集はボルテックごと凍りづけにして行動停止状態にまでした。

「はあ、はあ、はあ。痛いな。終わったか」

「集!!!!!!」

後ろからゆえの声が聞こえ振り向くと皆が見えていた。

「おい、皆!!!」

集が皆に手を振った瞬間…

「集!!!! 後ろ!!!」

「へ? うしr」

ルーラに言われ後ろを向いた瞬間、集の体を黒い何かが貫いた。

「が、あ」

良く見るとボルテックを凍りづけにした氷はいつのまにか

砕けておりそこから黒い何かが集の体に伸びていた。

「集――！！！！！！！！！！」

最後に聞こえたのはゆえの自分を呼ぶ叫び声だった。

第8話 戦いの終わり、そして…（後書き）

こんばんわ！！ケンです！！

如何でしたか！？

徐々にこの作品もアクセス数が増えて参りました。

これも皆さんのおかげです！！

ありがとうございます！！

感想もお待ちしておりますのでよろしくお願いいたします！！
それでは！！

第9話　ギルドと蘇りし闇の王

「失礼します」

「どうぞ」

理事長室にはフィーリと理事長の二人だけがいた。勿論、防音用の魔法までも施して。

「それでどうだった？」

「はい。如月君ですが命に別条はないそうです」

「そうか。もう片方は」

「残念ながら」

「そうか…死因は？」

「医師によると魔力が完全に体から無くなったことによるものだそうです」

「そうか…ありがとうございます。引き続き頼む」

「分かりました」

「今年は厄介なことになりそうだな」

理事長は苦虫を噛み潰した様な顔をした。

「ん…ここは？」

集はうつすら目を開けると薬品のニオイが感じられた。

「えっと、確か、戦ってて、それで何かに刺されて」

徐々に頭が冴えていき起き上がろうとすると

お腹辺りに重さを感じて起き上がれなかった。

「ん？何か乗ってる？」

目線をお腹に向けると見慣れた赤い服が見えた。

ゆえがお腹を枕にして眠っていた。

「ゆえ？」

「集？…起きたのか！？集！！」

「あ、ああ」

「大丈夫か！？どこか痛む所とかは！？」

「お、落ち着けて。別に痛むところもないし」

「そ、そうか良かった」

ゆえは安心したように胸を撫で下ろした。

「全く、倒したつもりで不意打ちを食らうとは。

まだまだ、鍛錬が足りんようだな」

「ああ、そうだな。それよりもあの黒いものは何だったんだ？」

「さあ、分らん。今、先生方が調査をしてきているのだろう」

「ふん」

すると医務室のドアが思いっきり蹴破られた。

「大丈夫かしらー！！集！！」

「ライカ…うるさい…病室…響く」

「そうだよ。フォレスの言う通りだよ」

上からライカ、フォレス、ルーラである。

「皆！！」

「大丈夫？集？」

ルーラが心配そうに見つめた。

「ああ、もう大丈夫だよ。心配掛けてごめんね」

「ううん。でも、良かった…私が食べる前に

死んでもらっては困るしね……」

「ごめん、最後の方よく聞こえなかった。もっかい言ってくれる？」

「いや、何でもないよ」

「そう、なら良いけど」

「にしても、あんた、よくあんな奴と闘えたわね」

ライカが不思議そうに質問した。

「うん、まあ、観客席の皆が、

危なかったから無我夢中で」

「かと言ってそれで命を落としたら元も子もないぞ」

「分かっているよ。これからもよろしく頼むよ？ ゆえ」

「あ、ああ。任せろ！！」

集の笑顔を見たゆえは少し顔を赤くして了承した。

知られることのない会話

とある場所にて10人ほどの人物が集まっていた。

「それではの方は？」

「ああ、まだ完全に復活なされるには足りないが
順調に魔力を蓄えておられる」

するとドアが開かれ一人の男性が入って来た。

「「「「お帰りなさいませ！！マスターハデス！！！！」」」」

ハデスと呼ばれた男は手で全員を座らせ椅子に座った。

「皆、私を解放してくれた事に感謝する。」

我が封印されてから何年たった？

「30年でございます！！」

「そうか：あ奴のせいで我は、魔力をほぼ失い封印された。

だが、お主たちのお陰で再びこの世に復活できた。

まだ、魔力を取り戻すのに時間はかかる。

そこでお主たちに、当分は組織の、指揮権を与える。

その間は自由にしてくれて構わん」

「「「「は！！ありがたき幸せ！！」」」」

「ふむ。この世を支配する為に！！」

その言葉をハデスが言った瞬間全員が跪いた。

翌日には医務室の先生から、学校に行っても良いと言われ集は翌日から学校に行った。

先生によると治りが早く傷が既に塞がったらしい。それでも、異常だと言われてしまった。

そんな事は気にせずに

教室に入ると、一番にゼロに話しかけられた。

「集！！昨日、お前大丈夫だったか！？」

ゼロの大きな声で全員が心配そうにこちらを見た。

「ああ、大丈夫だよ！！だから、みんな心配しないで！！」

集が大声でそう言うど皆、安心したかのように喋り始めた。

そして、チャイムが鳴り全員が席に着いた。

「はーい、皆おはよう」

「「「おはようございます！！！！」」」

「今日の連絡は一つだけよ。もうじき、

学校生徒によるギルド任務が近づいてきてるから

その班分けを6時間目にするから誰と組むか

相談しておいてね。それと如月君は昼休みに理事長室に行って頂戴」

「分かりました」

「今日の連絡は終わり。皆、今日も一日頑張ってね」

フィーリが出て行くと同時に教科担当の先生が入って来た。

「はい、じゃあ授業を始める。

知っての通りもうじきギルド任務が行われる。

そこで今日は魔物について詳しくやっていく。

教科書のp13を開けてくれ」

「魔物ね、予想はしてたけど本当にいるとはね〜」

集が考え事をしていると先生にあてられてしまった。

「じゃあ、如月。その5行目を読んでくれ」

「はい。魔物というのは我々、人間とは離れた場所に

暮らしている生物の事を言う。魔物は種類が膨大に

存在しており新種の魔物もいると言われている」

「はい、そこまでで、良いぞ。さっき読んでもらったとおり

魔物は本当にたくさん存在している。有名なところで言うと

ゴブリン種やウルフ種、ドラゴン種や古龍種、

他にも種類は存在している。ほとんどが人間を

襲っているが中には人間と共存している種もいる。

そこだけは、しっかりと頭に入れておいてくれ」

それから先生の武勇伝や魔物から貰ったものなど

ほとんどが自慢話だったが説明していた。

キーンコーン、カーンコーン

「む。終わるか、まあ良い。この続きはまた次回だ」

そう言い先生は教室から出て行った。

「あゝ疲れた」

「確かにさっきの話は疲れるな。ゼロ」

「ああ、ほとんど自慢話じゃねえか」

「本当かは別として面白かったがな」

「まあ、そうだけどさ〜」

「それよりも、ゼロ。ギルドって何だ？」

「おいおい、世間知らずにも程があるぞ」

「悪い」

「守護隊は知ってるよな？」

「ああ」

「あれは民間のとか言われてるが実際は
国家からの推薦がないと入れないんだ」

「ふむふむ」

「でも、ギルドってのは推薦とか一切いらずに
そこに登録するだけで依頼を受ける事が出来るんだ」

「その依頼ってどんなのがあるんだ？」

「依頼にもランクがあるんだ。最初、登録すると
ランクDの物しか受けられないんだ。」

ちなみにランクは最高がSSSで最低がDだ」

「そのランクってのはどう上げていくんだ？」

「そうだな。主に依頼の数をこなしていくかそのランクの中で
最も難しい依頼を成功させたりしたら上がる。」

ちなみにそのランクはこういうギルドカードだったので確認できる」

ゼロはポケットから一枚のカードを

取り出すとそこには顔写真とランクが書かれてあった。

ちなみにD。

「ふーん。で、班はどうする？」

「一緒に組まないか？ 集」

「んーまあ、このクラスで一番仲が

良いのはゼロだし組もうか」

「決まりだな。後はまあ6時間目で決めようぜ」

「了解」

その後、特に何もなく昼休みを迎えた。

「おーい、集。昼飯一緒に……って先生に呼ばれてたっけ」

「ああ、ごめん」

「いいよ、ほかの奴らと食べとくから」

「ああ、じゃあな」

集は教室を出て理事長室に向かった。

「失礼します」

「どうぞ」

中から理事長の声が聞こえたのでそのまま入っていった。

「やあやあ、集君。昼休み中にごめんね」

「いえ、別に。それで何でしょうか？」

「ふむ。君のギルドカードが出来たからね。それを渡そうとね」
集はカードを受け取りながら質問した。

「それならフィーリ先生から直接貰った方が早いのでは？」

「私が集君にここに来てもらったのは

それだけが理由じゃないんだ」

「え？そうなんですか？」

「ああ、君に一つ言いたい事があってね」

「はあ」

「ああ、その前に」

理事長が指を鳴らすと周りの空間が一瞬だけずれ、また戻った。

「理事長？」

「ああ、すまない。これは防音用の魔法でね。

あまり君以外には聞かれたくないんだ」

「は、はあ」

「まあ、座りたまえ」

集はすぐ近くにあった椅子を取り机をはさんで
理事長の真正面に座った。

「それで言いたい事って？」

「ああ、この前の決闘の時、君が

戦ったものがあつたね？その事についてだ」

「!!!!!!」

集の体が一瞬、強張った。

「大丈夫だ。落ち着いてくれ」

「は、はい」

集の額から冷汗が流れた。

「あれの事だが、もしも、また会ってしまった場合は
すぐさま逃げるんだ。何があっても」

「どうしてですか？」

「すまないが今はまだ、言えない。だが、これだけは言える。
君では絶対に勝てない。そんな相手なんだ」

「……分かりました。出来るだけ逃げるようにします」

「ああ、そうしてくれ。言いたい事はそれだけだ」

「はい。失礼します」

理事長が魔法を解き集は部屋から出て行った。

「まだ、奴は完全には、復活していない。その間に
私が封印しなければならんな。それが、母様の願いだ。
ハデス：お前はその目で何を見ているんだ」

第9話 ギルドと蘇りし闇の王（後書き）

こんばんわ!! ケンです!!

実はさっきまで今までの話を修正していました!!

どうも、主観的にしか見れないもんですから。

友達にかなり矛盾点を言われて修正しておりました。

如何でしたか？

感想もお待ちしております!!

それでは。

第10話　しっくり来る刀

「これはどうだ？集」

「ん」

集は今、ゆえと共に武器屋にいた。

何故、そんなとこにいるかというところそれは朝にまで時間を遡る。

「ふああゝおはよ、ゆえ」

「ああ、おはよ」

結局、鍛錬は曜日毎に行う事になり今日は、学校が休みであり鍛錬も無い為、ゆっくり寝ようかとも、思ったが自然といつもの起きる時間に起きてしまった。

「ふああゝ眠い」

「だらしないぞ？集」

「そうは言っても眠いし」

「ならば、出かけないか？」

「ふえ？今日？」

「もちろんだ。ここら辺をまだ案内していなかったからな」

「んゝいいや。今日は一日ダラダラ」

集が二度寝をする為部屋に戻ろうとすると

肩を女の子の握力とは思えないような握力で掴まれた。

「い、痛い！！痛いから、ゆえ！！」

「行くよな？集」

「…はい」

ゆえのオーラに怖気つき、なくなつて従う事にした。

「ふむ。よろしい。ならば、さっそく準備だ！！」

「お、おう」

集は二度寝を諦め外出の準備をした。

という事で二人は初めて会った時に、立ち寄った市場にいた。
休日ともあってか大勢の買い物客で賑わっていた。

「相変わらずここは、賑やかだな」

「そうだな。前も言ったと思うがここは

コラリスで最も規模が大きいと言われている市場なんだ」

「ふん」

集は店を見ているとふと気がついた。

「『そう言えばこの世界の通貨って何なんだ？』」

「なあ、ゆえ」

「何だ？」

「この世界の通貨ってさ、なんなんだ？」

周りに聞こえないように小声で言った。

「そういえば、言ってなかったな。」

「この通貨はペルだ」

「ペル？」

「ああ」

「それで、どこに行くんだ？」

「ああ、もうじきギルド任務があるだろう？」

「まあね」

「その時に武器はあった方がいい。魔物は魔法だけで倒せるものばかりとは限らないからな」

「でも、武器って強制なのか？」

「いや、強制ではないが集はあまり、人前で魔法は使えないだろう？その為だ」

「ああ、成程」

その後何分か歩き、武器屋が集まっている地域に着き
ゆえと集はその内の一軒のお店に入った。

「いらっしやい。おや？これはこれは、ゆえさんじゃないですか」
「お久しぶりです。店長」

この店はゆえが、今使っている刀を購入した
店でお勧めらしい。

「今回はどのような用事で？」

「ああ、彼の武器を買おうかと
思ってるんだが見て回っても良いか？」

「ええ、どうぞ。ごゆっくり」

集とゆえは店内を見て行った。

「これなんか、どうだ？集」

ゆえが勧めてきた物は長めの剣だった。

「これは？」

「これは、魔法の伝達率が最高クラスなんだ」

「魔法の伝達率って？」

「伝達率というのは、その武器にどのくらい魔法を
伝えやすいかという指標だ」

「つまり、魔法を纏わせるといふ事？」

「まあ、そんな感じだ。武器だけで戦っても相手に傷は付けられるが
それだけでは勝てないからな」

「ふーん」

「どうだ？集」

一旦、持ってみたがすぐにゆえに返してしまった。

「んー何かしっくりこないんだよねー」

「そうか…なら他を探してみるか」

「んーこれもしっくりこないな」

「またか？もうこれで、この店の物は全部見て回ったぞ？」

「おやおや、どうやらしっくり来る物が無かったようですね」
後ろから店長が杖をつきながらこちらにやって来た。

よく見ると右足が義足だった。

「では、店の裏にある倉庫を、見てみては如何ですか？」

「良いんですか？ 店長」

「ええ、武器は一番しっくり来るものでないといけませんからね」
店長に案内され、集とゆえは店の裏にある倉庫に入った。

「へーいっばいあるんですね」

「ええ、まあ。もしお気に召したものがあれば言って下さい」

「はい、ありがとうございます」

「んー中々無いねーしっくり来る物が」

集は武器の山を漁っていると気になったものが見えた。

「ん？ これは」

集は何かに惹かれるように武器の山に埋もれた刀を探していった。

「どうした？ 集」

「うん、ちょっと気になったものが

あつてね。抜けないな」

「手伝おう」

ゆえも手伝いながら武器の山を、退かしていくと一本の刀が出てきた。

「これか？ 集の探していたものは？」

「うん。それだよ」

その刀は長い間、放置されてきたのか、埃がかなりかぶっていた。

「しっくり来る物がありましたかな？」

「店長。この刀は？」

「あーこれは確か何十年も前に売られてきた物ですよ」

「ぜ、全部覚えてるんですか？」

集は驚いたように聞き返した。

「ええ。店の武器の事は全部覚えていますから。

それにしても、よくこんな古い刀を見つけてきましたね」

「ええ、まあ」

「集、これ拔けないぞ」

ゆえは鞘から刀を抜こうとしていたが全く拔けなかった。

「そんな筈は」

店長も一緒に抜こうとしたが全く拔けなかった。

「貸してみてくれる？」

「ああ、いいがこの刀は止めた方が」

「抜けた！！」

「何だと！？」

よく見ると確かに刀は抜けていた。

「おお！何だかわからないけどしつくり来る！！」

ゆえ！！僕はこれを買うぞ！！」

「べ、別に良いがいいのか本当に？」

ゆえが心配するのも無理はなかった。

なんせ、その刀は錆だらけで真っ黒だったのだ。

「僕はこれがいい！！」

「あ、ああ分かった。店長、おいくらですか？」

「いえ、お金はいりませんよ」

「え？でも」

「良いんですよ。もうすぐ、あの倉庫の武器は廃棄処分

するつもりでしたから。それに、刀も喜んでいます」

「そうですか…分かりました」

そのまま、二人は武器屋を後にして再び市場の散策に出かけた。

「……貴方の言うとおりあの刀の所有者は見つかりましたよ」

店長は二人を見ながら懐かしそうに呟いたがその声は

誰にも聞こえない。

あれから、市場の散策を終えた二人は一旦家に帰った後、昼ごはんを食べ、学園の地下鍛錬場にいた。

「では、集。これから剣の鍛錬をするが良いか？」

「いいよ。今日は別にやることもないしね」

「分かった。まずは魔力を刀にのせてみる。こういう風に」
ゆえは刀を抜き、魔力を流し込むと
炎が伝わり、まるで刀が燃えているように見えた。

「この原理は魔力を刀に流し込むんだ。やってみろ」
「分かった」

集も刀を抜きゆえの様にしようとしたが

「あり？」

「どうした？早くしないか」

「い、いやしてんだけど。むむ、この！！」

魔力を流してみたが何も変化は見られず、集がありったけの魔力を乗せた途端、刀の刀身の錆が光り始めた。

「何をしている！？集！！」

「わ、分かんねえよ！！」

二人が騒いでいるうちに錆が一気に吹き飛んだ。

「こ、これは」

「白い刀？」

錆だらけだった刀は先程とは変わり全てが白色に変わった。

「きれいだな」

「だが、そんなに白い刀は初めて見る」

集は試しに刀を振った。すると：

「うお！！」

刀から氷の魔法斬撃が出て一気に辺りを凍らせた。

「な、なんて威力だ」

「ゆえ。模擬戦しようか」

「集？」

「闘ってみたいんだ。この刀と共に」

「：分かった」

ゆえは集の真剣な顔を見て刀を抜いた。

「だが、手加減はしないぞ」

「ああ、それで良い」

お互い刀を抜き向き合った。

「「行くぞ！！」」

同時に動き出し、炎と氷がぶつかった。

「つ、疲れた」

「ああ、私もだ」

結局、あの模擬戦は引き分けとなり

その後に、刀の扱い方をゆえに教えてもらい

今日はそれまでにして家に帰る事にした。

そして、今は夕食も食べ終わり寝る時間だった。

「なあ、ゆえ」

「何だ？」

「明後日だったよな？ギルド任務って」

「ああ、そうだな」

「1組の奴らは全員、Dランクなのか？」

「いや、1組はC以上でないと在籍出来ないんだ」

「ふうん。ま、いいや。何やんのかな？」

「さあな、それは班で決める事だからな」

「そっか。楽しみだな」

「ああ」

「御休み。ゆえ」

「ああ、御休み」

鍛錬で疲れていたのか二人はそう、
時間もかからずに眠りに落ちた。

第10話 しっくり来る刀（後書き）

こんばんわ!! ケンです!!

如何でしたか?

やはり、自分は文章で表現するのが下手ですね。

こんな作品をお気に入り登録、してくれた方には感謝です!!

感想もお待ちしておりますのでよろしければ、送ってきてください。
それでは

第11話 ギルド任務

「おっす！！おはよう！！集！！」

「ああ、おはよう。ゼロ」

「何だよ今日はギルド任務だつてのにテンション低いぞ」

「これはいつも通りだよ。君が高いだけ」

「そうか、いいや。行こうぜ！！」

もう、みんな来てるかもしれないしな」

「ああ」

結局、この前に決めた班は男子3人、女子2人の

計5人となった。

「未だにクラスの奴らの名前と顔が一致してないのに
班員なんか分からねえし」

教室に入るとそこには、既にほとんどの生徒が来ており

今日の行動の確認や、班員と楽しそうにしゃべっていたりした。
すると、後ろから肩を叩かれた。

「ん？」

後ろを振り向くとそこには、小柄の女の子がいた。

「おはよう。如月君」

「おはよう…ごめん、名前なんだっけ？」

「おいおい、班員の名前ぐらい覚えておけよな」

「仕方がないよ、ゼロ君。如月君は転校してきて
1か月も経っていないんだから。」

私の名前は、アミヤ・ユーリだよ。アミヤで良いよ」

「うん、分かった。よろしく」

「ところで、あいつらはまだ来てないのか？」

「うん、そうみたいだね」

「あいつらって？」

「私達の班の残りの2人だよ」

「たぶん、もうすぐ来るぜ。ほら、噂をすれば」

「おはよ、ゼロ」

「おう！紹介するぜ、こいつらは俺の幼馴染の
ロック・ランスと暴力女だ」

ゼロがいい終えたと同時にゼロの頭に
カバンが全速力でぶつけられた。

「誰が、暴力女よ！！私はアイリス・メリーって名前があんのよ！
！」

「今まさにそれだが！！」

「何ですって！？」

「おい、そこまでしておけよ」

状況を見かねたロックが二人を止めに入った。

「「あ！？」」

「二人がラブラブなのは結構だが夫婦喧嘩は
余所でしてくれ」

「だ、誰がこんな奴とラブラブなのよ！！！！」

そうは言いながらも顔を真っ赤にしながらゼロを横目でちらちらと
見ながら、否定しているので、説得力がまるでない。

「それはこっちのセリフだ！！こんな奴と夫婦になるんなら
もっと優しい子と夫婦になりたいね！！」

「何ですって！？」

「何だよ！？」

「お前ら状況、分かってんのか？」

「「は！？」」

集に言われ、二人は周りを見渡してみるとクラスの全員が
こちらを見ていた。

「やっと、分かったか。さっさと今日の

確認をするぞ」

「「:はい」」

「という事で今日のギルド任務だが、どこのギルドに行くんだ？」

ギルドは属性になぞられて作られており

例えば炎のギルド、サラマンダーという風に

各地にいくつものギルドが設置されている。

ちなみにどこか一つでも登録されていれば

どこのギルドでも任務を受ける事が出来る。

「やっぱり、ギルド最強って謳われてるサラマンダーじゃない？」

「何言ってるんだよ!？やっぱり、ここは

俺の魔法のアクアパラディンだろう!？」

「お前こそ何を言ってる。ゼロ。ここは

雷のライトニングだろう」

結局、再び3人の言い合いが始まった。

「は〜ロックが大人びて見えたのは僕の勘違いか？」

「いや、集君は間違ってるよ」

結局、集が3人を落ち着かせ多数決を取ったところサラマンダーに決まった。

「やったー!! どうよ!! やっぱりサラマンダーじゃない!!」

「何でサラマンダーなんだ」

「同感だ、ゼロ」

「ほら、ゼロ君もロック君ももう諦めなよ。

決まっちゃったんだから」

「アミヤの言う通りだ。しつこい男は女の子に嫌われるぞ？」

「集は良いよな。頭も良さそうだし顔は良いし髪の毛は白だし」

「いや、髪の色は関係ないと思うけど、まあ良いや。」

そう言う事で僕たちが行くギルドはサラマンダーで決定だ！
意義は認めないからな！！」

「「「はい」「」」」

それからすぐにフィーリ先生が来た。

「はい、皆おはよう」

「「「おはようございます」「」」」

「今日は皆も分かっていると思うけど初めてのギルド任務よ。

これから、配る物があるから班長さんは班員の人数分取りに来て頂戴」

「お前行けよ、集」

「え？僕？」

「うん。きつと集君ならうまくできるよ」

「んゝ分かった。取ってくる」

アミヤとゼロに勧められ班長となった集は

5人分、水晶の様なものを受け取った。

「今配ったものは通信機の様なものよ。

その水晶は私の水晶と通信できるようになってるから

何か困ったことがあったらそれで、連絡を頂戴」

その後、何個か諸連絡をした後にそれぞれの
ギルドへと向かった。

<炎のギルド、サラマンダー>

「着・い・たー！ー！ー！！！！」

「うるせえよ！！アイリス！！」

「良いじゃないのよ！！昔から来たかったギルドにようやく来れたんだから」

「アイリスはここに来たかったの？」

「うん！ねえ、アミヤは紅蓮の剣士って知ってる？」

「聞いた事はあるよ。確か、その人は刀一本と炎の魔法だけで一人で古龍種も倒したことがあるって言う噂でしょ？」

「噂じゃないのよ！！あたし一度実際に見たことがあるのよ！！」

「また、その話かよ」

「うるさいわね」

「紅蓮の剣士か……まさかな」

集の頭の中には一瞬、ゆえが思い浮かんだがそれは無いと思いを考えをすぐにぬぐい去った。

ここから集達の任務が始まろうとしている。

第11話 ギルド任務（後書き）

こんばんわ！！！！ケンです！！！！
如何でしたか？

中々、ユニークが増えない。

やはり難しいですね！！

それでは！！

第12話 任務開始

「んじゃ、入ろうか」

集は入ろうとしたが、皆はドアの前にいるだけで中に入ろうとはしなかった。

「何で、入らないんだよ」

「い、いやだって心の準備というものが」

「そ、そうよ。ゼロの言うとおり心の準備がいるのよ」

あれだけ、はしゃいでいたアイリスまで今は静かになっていた。

「あっそ。じゃあ、僕が先に入る」

「ちょ、ちょっと集!!」

アイリスが止めるのを気にせずに集はドアを開け、中にはいるとそこには……

「うわお。凄いね」

そこには、受付や今現在ギルドに依頼されている任務が掲示されている掲示板。

そして、任務を受けようとするハンター達がいた。

「ここがギルドか」

「初めて入ったけど綺麗なところ」

アミヤの言うとおり中はきれいに掃除されており待合室や資料室などの施設が完備されていた。

「じゃあ、さっそく何受けるか、掲示板見て決めるか」

「うん。確か今日のノルマは3つだったよね？」

集とアミヤはさきさきと進んでいくが後ろの三人は感激していたのか、周りにばかり目を取られていた。

「置いて行くぞ」

「「はーい」」

集の呼びかけでようやく、付いてきた。

「大丈夫かな？今日の任務は」

ちよっぴり心配した集だった。

「それで何するんだ？」

「ねえ、こんなのはどうか？」

「えー村のごみ掃除？もっと違うのしようぜ？」

「じゃあ、これやるか？」

集が指をさした任務は討伐任務だった。

「なにになに？村にゴブリンが群れで襲ってきます。

怪我人も増えてきています。

このままでは、村を移動しなければなりません。

生まれ育った村を移動したくはありません。

どうか、ゴブリンを追い払って下さい、か……

よし、これやろうか？」

「そうね、ゴブリンくらいなら私達でも出来そうだしね。

よし、集！！受注してきなさい！！」

「へいへい、行ってくるからここで待ってろ」

「あ、私も行くよ」

集とアミヤが受付に任務の受注に行った。

二人が帰ってくるのを待っていると……

「あれ？どうして、こんなところに8組がいるのかな？」

「「！！！！」」

後ろを振り返ってみると1組の奴らが絡んできた。

「な、何よ。あたしたちも任務を受注しにきたのよ！！」

「おいおい、ここはギルド最強と謳われている所だぜ？そんなところに雑魚が来ても難しすぎて出来ないんじゃないのか？」

「違うぞ、ギルス。こいつらはDランクだから雑魚相手にしかしないぞ」

「あ、そっかゝごめんねゝ君たちはDランクだったっけゝ」
謝っているがその顔は謝っているような顔ではなかった。

「てめえら!!」

ゼロが胸倉をつかもうとしたが誰かに止められてしまった。

「集!!」

「止めておけ、ゼロ」

「そうそう、所詮君たちは平民なんだから貴族の俺たちには勝てないの」

「こいつらを殴ったら、お前までこいつらと同じようなカスになるぞ」

「な、何だとお前!？」

ギルスと呼ばれた者が気に入らなかったのか集に突っかかるが集はそれを無視して全員を連れていった。

「任務は受注し終わった。さっさと行くぞ」

「あ、ああ」

「ありがたいな、集」

「何がだよ」

「その助けてくれて」

「別に助けた覚えはない」

「そ、それはそうと今から行く村ってどこにあるの？」

アミヤが場の空気を読み話題を変えようと
今から行く任務の内容を聞いた。

「この近くにあるメルル村って言う所。

その村は自然が多くて多くの魔物と共生してる場所だとさ」

「でも、ゴブリンでさ普段は山の奥に住んでるんだろ？
なのに何で山から降りてきてんだよ？」

「さあ？でも、困ってんだからそれを助けに行く。
ほら、見えたぞ。あそこだ」

集達の目の前に、自然に囲まれた村が見えてきた。

「綺麗なところね」

皆が自然に目を奪われていると向こうから

一人の老人がやって来た。

「貴方達が依頼を受けてくれた方々ですね？」

「ええ、そうですが貴方は？」

「私はこの村の村長です」

その村長は5、60代のおじいさんだった。

「あ、村長ですか。僕はこの班の班長の如月集です」

それぞれ自己紹介した後、村の小屋に案内された。

「どうぞ、入ってください。ここは私の家です」

「お邪魔します。それで、詳しい内容をお聞きたいのですが」

集達は用意された椅子に座り、詳しい状況を聞いた。

「ええ、あれは1か月程前の事です。

いつも通り畑を肥やしていると突然、叫び声が聞こえて

見に行ったらゴブリンが家を荒らしてたんです」

「はあ」

「その時は2、3匹だったので、追い払えましたが今度は数で攻め

てきて

我々ではどうにもできなくなつて頼んだんです」

「そうですか…大体何時くらいにいつも来るんですか？」

アミヤが気になった事を質問した。

「もうすぐ来るころなんです」

「「「「ええ!？」」」」」

すると、村の方から叫び声が聞こえてきた。

「村長!!! 大変です!!! また、奴らが!!!」

「皆さん、お願いできますか？」

「分かりました。行こうか」

「「「了解」」」」

それぞれの武器を持ってゴブリンが来ているという場所に行った。

「こっちです!!!」

そこにはかなりの数のゴブリンが来ていた。

「わお!!! 多いね」

「それでもやるぞ!!!」

それぞれの武器を出しゴブリンに向かって行った。

「『そういえば皆の魔法と武器を見るのは初めてだな』」

「行くよ!!!」

アミヤはポケットから銃を取り出し、魔力を込めて引き金を引くと炎の弾丸が発射された。

「ぐええええ!!!」

被弾したゴブリンに弾丸の炎が燃え移り

ゴブリンを燃やし始めた。

「やるじゃない!!! アミヤ!!! 次はあたしよ!!!」

アイリスはブーメランを取り出し投げると

雷の魔法が付加されたブーメランは威力が上がり
何体も一気に切り刻んでいった。

「ぐぎやああああ！！！！」

「俺も行くぜ！！」

ゼロは刀を抜き水の魔法を流し込み

刀を振るうと水の斬撃が飛び

ゴブリンを真っ二つにした。

「次は俺だな」

ロックは地面に手を置き、魔力を流し込むと
地面からツルが生えてゴブリンを締めあげた。

「集、後は頼んだ」

「へーい」

集は刀を抜くと魔力を流し込まずに

そのままの状態で次々にゴブリンを切っていった。

「こんなもんかな？」

集が最後の一匹を仕留めてようやく討伐は終わった。

「それにしても多すぎやしないか？」

「ゼロの言う通りだな。こんなにもゴブリンが一斉に
降りてくるものなのか？」

「こんなもんじゃないのか？」

「いや、ロック君の言う通りだよ集君。

ゴブリンは本来は少数で群れを作ってそれを

いくつも作るんだけど、こんなにも多い群れは初めて見るよ」

「ねえ、確かゴブリンでさ自分よりも強い生き物が現れたら
そこから離れる習性があったわよね？」

「それがどうかしたのか？」

「これは仮定の話だけどゴブリンの巣に
何か強大な魔物が現れてこの村に降りて来たとか」

「……有り得るな。どうする？ 集」

「一旦、この事を先生に連絡しておこうか」

「うん。そうだね」

アミヤがポケットから水晶を出しフィーリに

通信を繋げようとした時、村の人々が騒ぎ始めた。

「ん？ なにかあったのか？」

「あ、あの……！」

「落ち着いて下さい。何があったんですか？」

ロックが女性を落ち着かせると、女性は泣きながらこういった。

「娘がいんです……！」

「娘さんが？ よく探したんですか？」

「この村の目星のつくところは探したんです……！」

「まさか、森に入ったのか？」

「もし、そうだとしたら今の森は危険すぎるよ……！」

危険な魔物もいるかもしれないのに……！」

「くそ……！」

集が急に走り出した。

「集君……！」

アミヤもそれに続いて行ってしまった。

「ちょ、ちょっと集、アミヤ……！」

「お前達はこの事を先生に連絡しておいてくれ……！」

そのまま二人は森の中に入ってしまった。

「ひとまず、この事を先生に伝えるぞ……！」

「今してる……！」

ロックが水晶を出しフィーリにつないでいた。

『あら、もう終わったの？』

「違うんです……！ 実は」

ロックはすぐに今までの事を話し始めた。

『それは本当なの！？』

「はい！！」

『分かったわ。すぐにそちに私が行くから何もしないでおいで』

「い、いえ実は」

『まさかと思うけど、如月君と一緒にいるわよね？』

「……いません」

『あゝもう！！何でこうなるのよ！！貴方達は待っていないさい！！』
それを最後に通信は切れた。

「多分、集は説教くらうだろうな」

「「同感」」

「何でアミヤまで来たんだ！！」

「集君だけじゃ不安なんだもん！！」

集とアミヤは森を走りながら言いあっていた。

「まあ良い。早く村の少女を探して先生に任せないとな」

「うん。でも、何で森なんかに」

「それは多分、ゴブリンを倒しに行ったんじゃないのか？」

「え？」

「村を荒らされて許せなかったんだろう。だから、入った」

「そっか…でも、何となく分かるかな」

「何で？」

集は思わず立ち止まってしまった。

「私もね村出身なんだけど、魔物に襲われてこっちに来たから」

「そうか…悪いな」

「ううん、良いよ別に。それよりも探そう」

「ああ」

二人はさらに森の奥に入っていくと目の前に少年が見えた。

「見つけた!!」

「あの子だね」

その少女は手に鋤を持って何かを探していた。

「おい。その君!!」

「お姉ちゃんたちは誰？」

「私達はね君のお母さんに頼まれて探しにきたんだよ」

「私はいつらをやっつけるまで帰らない!!」

「あのな!!!!!! 危ない!!」

「きゃあ!!」

集が言いかけた時、何かに気付き二人を引き寄せた。

すると、二人がいた場所に何かが放たれ地面が抉れた。

少年が恐怖のあまり泣き出してしまった。

「うわああああん!!!!」

「大丈夫だよ。お姉ちゃんたちがいるから!!」

「やばいな」

集達の目の前に巨大な魚の形で鋭い牙を持った魔物が現れた。

第12話 任務開始（後書き）

こんばんわ!! ケンです!!

如何でしたか？

アクセスは多いのにユニークが中々伸びない。

やはり、面白くないんでしょうか？

まあ、そんな事は気にせずに更新していきます。

それでは!!

第13話 初めての实战

集は少女を抱えてアミヤと共に森の中を逃げ回っていた。

「あゝもう！何でこうなるんだよ！！」

「い、一体どこまで逃げればいいの！？」

「分からねえ！！ひとまず逃げるんだよ！！」

「確かあの魔物はシュガレオンだっけ？」

「ああ、この近くに湖があったからその主なんだろう」

後ろから魚の様な巨大な魔物が体を這わせ、

木々をなぎ倒しながら二人を追っていた。

「僕の氷なら少しは時間は稼げるんだが」

生憎、今は見せられないな」

すると魔物は体を起こし、体をのけぞらせ

口から高圧水流を吐きだした。

「伏せろ！！」

「きゃあ！！」

間一髪避けたがその高圧水流は地面に

着弾した後、拡散弾のように分裂し周りの木々を薙ぎ倒していった。

「あんなもん喰らったらず、体は弾けるな」

「うわああああん！！！！」

「集君！怖がらせるような事言わないでよ！！」

「そんな事より逃げんぞ！！」

集は二人を引っ張り再び逃げ出した。

その後を追うように魔物も体を這わせて追いかけていった。

その頃、村に残った3人はフィーリの到着を待っていた。

「大丈夫かな？あの二人」

「何言ってんだよ!? アイリス!! 集は貴族に勝ったんだぜ?」

「貴族に勝ったとしても魔物に勝てる訳ではない」

「そ、そうだけどさ」

「俺達が焦っても何も状況は変わらない。」

「ここは先生を待とう」

「ああ」

「うん」

「ぜえ、ぜえ。ここなら少しは時間も稼げるだろ」

集達は逃げる途中に洞窟を見つけたので、そこでシュガレオンをやり過ごしていた。

「ひっぐ!! ママに会いたいよ」

「大丈夫!! 絶対にお姉ちゃんとお兄ちゃんが会わせてあげるから」

「でも、お姉ちゃんたちはさっきから逃げてばっかじゃない!!」

「そ、それは……」

「お前、名前は?」

「私はリルカ」

「そうか、リルカ。何で君はこの森に入った?」

「だってゴ布林達が村を襲ってるのが許せなくて」

「そっか。その事に関しては良いと思うけどさ、リルカはゴ布林を倒せるのか?」

「そ、それは」

ゴ布林といえど魔物の一種。リルカの様な小さな女の子が倒せるものではない。

「リルカ、何かを護ろうとする時に、必要なものは何か知ってるか?」

「ううん」

「必要なものはそれを護りたいっていう強い気持ちと強さなんだ」

「強さ？」

「ああ、護りたいっていう気持ちがあったとしても強くなかったら守れないだろ？それで周りに迷惑がかかってしまうかもしれない」

「あ」

「気付いたか？今回はリルカの身勝手な行動でお母さんや村のみんなに迷惑がかかったよな？」

「うん」

「だから、強くなってから今日みたいな行動はしような」

「うん！！」

「よし、偉いぞ。魔物もどこかに行ったみたいだしそろそろ帰るか」
「うん！！」

集達は周りをよく確認した後、洞窟を出た。

「さ、今のうちに帰るぞ」

「しゅ、集君」

アミヤが怯えたような声で集を呼んだ。

「どうかしたのか？」

「あ、あそこ」

「！！！！！！」

アミヤが指をさした方向を見るとそこには待っていましたと言わんばかりにシュガレオンが洞窟の上にいた。

「ま、まさか、僕たちを待ち伏せしていたのか」

「ぎゃおおおおお！！！！！！」

シュガレオンが雄叫びをあげるとアミヤが腰を抜かしたようにその場にへたり込んでしまった。

「あ、あれ力が入らない」

「アミヤ！！」

集がアミヤに近づこうとした時、シュガレオンが集達に高圧水流を吐いた。

「きゃあああ!!!!」

「この子だけは!!!」

アミヤはリルカを護るように抱きしめた。

「...しょうがない」

「集君?」

そして、高圧水流が3人に直撃し炸裂した。

その様子は遠くから見ていた3人にも見えていた。

「集!!!」

「アミヤ!!!」

「ごめんなさい!!! 待たせたわね!!!」

ようやくフィーリが村に到着した。

「先生!!!」

「貴方達はここで待ってて!!! 私が行くから!!!」

「私も行きます!!!」

「ダメよ、貴方達が来ても意味はないわ」

「でも!!!」

「いいからここに残ってなさい!!!」

「「「!!!!!!」」」

普段、あれだけ温和で優しいフィーリが声を荒げた事に3人は何も言えなかった。

「.....分かりました」

「すぐに帰ってくるから」

フィーリは森の中に入っていった。

「あ、あれ? 何も来ない?」

アミヤは襲ってくる痛みを覚悟していたが全く来ない事に

気づき、目を開けてみるとそこには氷壁で高圧水流を防いだ集がいた。

「しゅ、集君？それは」

「アミヤ」

「は、はい！」

「今から起こる事は誰にも言わないでくれるか？」

「う、うん」

「そっか…ありがと」

集の笑顔を見た瞬間、アミヤの心臓が大きくはねた。

「あ、あれ？何で私、こんなにもドキドキしてるんだろ？」

アミヤは顔を赤くしていた。

「行ってくる」

集はリルカをアミヤに任せシュガレオンに向かっていった。

「集君……」

「待たせたなシュガレオン。始めるか」

「ぐぎやああああ！！！！」

シュガレオンは雄叫びをあげて集をその巨体で

踏みつぶそうとしたが集はそれを避けて距離を取った。

「さうて、初めての実戦だ」

集は刀を抜き魔力を流し込むと全てが真っ白に変わった。

「行くぜ？」

集は刀を振るい氷の魔法の衝撃波を出す

シュガレオンはそれを高圧水流で撃ち落とそうとした。

「そんなもんで俺の魔法は撃ち落とせない」

しかし、高圧水流を逆に凍らせてしまった。

「ぐおおおお！！！！」

シュガレオンはその長い尻尾を振りまわし

集を吹き飛ばそうとするが咄嗟に屈んでそれを避け、

「邪魔だ。その尻尾貰うぜ？」

刀でその尻尾を切断した。

「ぐぎゃあああああああああ！！！！！！」

尻尾を切断されたシュガレオンは血しぶきを上げながら苦しみがいた。

「悪いな、お前にうらみは無いがここで狩らせてもらう」

集はシュガレオンに向けて刀を振るい

氷の魔法を斬撃にして撃ちだした。

「ぐぎゃあ…あ…あ…あ…」

斬撃を受けた個所から徐々に全身が凍結し始めすぐにシュガレオンは凍りづけにされた。

「永遠にその中で眠ってろ」

集が指を鳴らすと氷に亀裂が入りシュガレオンごと氷を砕いた。

「す、凄い」

「大丈夫かしら！？二人とも」

「ええ、大丈夫ですよ。先生」

「集君、貴方まさか使ったの？」

「ええ。使わないといけない状況でしたから」

「……そう。分かったわ。村に戻りましょう」

「ええ。アミヤ帰る」

集がアミヤの方を向くと安心したのかアミヤは気を失っていた。

「……私、誰かに運ばれてる？」

アミヤがうつすらと意識が回復したとき誰かにおんぶされて運ばれている感じがした。

「この髪の色……集かな？」

実際、集はアミヤをおぶって村までの道を歩いていた。

「まだ、ドキドキしてる：これって恋なのかな？」

アミヤの脳裏には集の笑顔が何度も再生されていた。

「そっか！初めての恋だね。ふふふ、暖かい」

知られることのない会話：

「失礼致します。マスターハデス」

「入れ」

ハデスの部屋に一人の女性が訪れた。

「何かあったのか？」

「はい、面白い物を見ましたのでご報告にあがりました」

「その、面白いものとは何だ？」

「はい。氷の魔法でございます」

「何だと！？それは本当か！？」

「はい。証拠もこちらに」

女性は凍りづけにされたシュガレオンの一部を取り出し
ハデスに見せた。

「自然界でこのような事はありません」

「ふはははは！！！！そうか、氷の魔法が蘇ったか！！カリヤ」

「はい」

カリヤと呼ばれた女性は下げていた顔を上げハデスを見つめた。

「氷の魔法を誰が使っているのか調べてこい」

「畏まりました。マスターハデス」

カリヤは闇に包まれるとどこかに消え去った。

第13話 初めての实战（後書き）

こんばんわ!!! ケンです!!!

如何でしたか？

やはり、一次創作は難しいですね!!!

今日確認したらお気に入り登録数が1件減っちゃっていました。
ユニークも伸び悩んでいます。

ま、こんなものなのでしょうね。

それでは!!!!

第14話 魔法の呪文

「ん？ここは」

意識が冴え始めたアミヤはうつすらと目を開けると天井が見えた。

「ここは……………」

「ここは学校の保健室だよ」

「集君」

隣から声が聞こえたので横を見ると集がいた。

「そ、そうなんだ。リルカちゃんはどうだったの？」

「あいつも無事だよ」

「そっか。良かった。私ってどのくらい寝てた？」

「大体3時間……」

集が言いかけた時保健室のドアが開けられた。

「アミヤ！！」

「アイリスちゃん！！」

入って来たのはアイリス、ゼロ、ロックの3人だった。

「良かった～無事だったのね」

アイリスはアミヤに抱き着きながらほっとしていた。

「だ～く～らお前は心配しすぎだっつ～の」

「なによ！友達を心配して悪いの！？」

「い、いや悪くないけどさ」

ゼロはアミヤの気迫に押され気味だった。

「まあ、なんにしても二人とも無事でよかった」

ロックが安心したように言った。

「あ、そういえば集」

「ん？何？ゼロ」

「フィーリ先生が職員室に來いだって」

「げ！まじかよ」

「そりゃ、あれだけ勝手に行動すれば呼ばれるわな」
「はゝ行ってくる」

「―「いってらっしゃい」―」

集は憂鬱オーラを醸し出しながら職員室に向かった。

「それで、アミヤ」

「何？」

「あんた集の事、どう思ってるのかしら？」

「い、いや別に何も思っていないよ」

「ほんと？ さっきもずっと、集に視線がいったのは
気のせいかな？」

「!!!!!!」

アミヤは一気に顔を赤くし布団にくるまった。

「あ！ ちょ、ちょっと！！ 何隠れてんのよ！？」

詳しく聞かせなさいよ」

「べ、別に詳しく話すことなんてないもん！！」

女子二人が騒いでいる横で男子二人は待機していた。

「なあ、どういう意味だ？ ロック」

「は？ 分からないのか？ ゼロ」

「ああ、全然話の意図が見えてこないんだけど」

「はゝ君は鈍いと言われた事はあるか？」

「あゝそう言えば言われた事あったなゝ」

俺、そんなに鈍いか？ 鋭い方だと思うけど」

「：鈍い奴は決まってそういう」

「どういう意味だよゝ」

「自分で考えろ」

～これでは、アイリスが苛立つのも分かるな～」

実はロックはアイリスがゼロの事を好きだという事を聞かされており愚痴や色気話を聞かされていた。

「あゝ入りたくないな……逃げるか」

「ダメに決まってるでしょうが!!」

「ぐえ！」

集が職員室の前から逃げようとした時、後ろからフィーリに頭を叩かれた。

「ひとまず説教は教室でするから。良いわね？」

「……」

「良・い・わ・ね？」

「…はい」

結局、担任には反抗できずそのまま8組へと連行された。

「何である時、私が着くのを待たずに森の中に入ったのかしら？」

「村の女の子が森に入ったって聞いて、いてもたってもいられなくなっ」

「そうだとしても、貴方も危険な事には変わりはなかった。

そのせいで着いてきたユーリさんまで危ない目にあわせた。違うかしら？」

「……………」

「はゝ。別に貴方の行動は間違っているとは言わない」

「じゃあ、」

「でも、貴方を心配する人だっているのよ？ 私みたいに」

「え？」

フィーリは集を優しく抱き締めた。

「先生？」

「貴方は私の教え子であって大切な息子、娘みたいなものよ。だから、お願い。今日みたいに突っ走らないで。それで、怪我をしたら私悲しいわ」

「……………分かりました」

「そう。なら良いわ。もう帰っていいわよ」

「はい」

集は教室を去った。

結局、集の班はトラブルのため依頼は一つでいいと言われそのままそれぞれの自宅に帰った。

「ただいま帰りました」

「あら、お帰りなさい。もう終わったの？」
家に帰ると居間でゆえの母が迎えてくれた。

「ええ、まあトラブルが起こったので」

「そう。じゃあ、少しお話でもしましょう」

「はい」

集は近くにあった椅子に座った。

「じゃあ、ゆえちゃんのお話でもしようかな」

「ゆえのですか？」

「うん。集君がこの家に来る前の話なんだけどね。
前のゆえちゃんは今よりも性格がきつかったの」

「ゆえがですか？」

「ええ。学校でも毎日、嫌味を言われるくらいにきつかったわね」
想像ができなかった。

集の鍛錬に嫌な顔一つせず、付き合ってくれ
笑っているゆえしか知らなかった。

「でも、集君が来てからは若干丸くなった気がするわね。
まあ、微々たるものだけど」

「そうなんですか？」

「ええ、ゆえちゃんはあまり他人には関わらない子だったの。

人に何かを教えてと頼まれても他の奴に聞けって言ったらしいわよ」

「あの、ゆえが…」

「でも、集君が来てからゆえちゃん、本当に楽しそうに
集君に魔法を教えてるでしょ？だからね、集君」

「はい」

「これからもゆえちゃんと一緒にいてくれないかな？」

「僕がですか？」

「うん。集君がいてくれるとゆえちゃん本当に楽しそうに笑うから」

「……出来る限りは一緒にいたいです」

「そう。ありがとうね」

そう言い残しゆえの母は晩御飯の支度に戻った。

「一緒にいてくれか……そんなの無理に決まってるじゃないか」

集の両親はしきりにずっと一緒だと言っていたのに死んだ。

「僕はどうしたいんだろう」

集はベッドに横たわりそのまま眠ってしまった。

一方その頃ゆえは最後の依頼をこなそうとしていた。

そのランクはBランク。

1年で出来る者は1組でも上位の実力を持つ者たちがするランクだった。

真っ黒な体毛に鋭い尻尾を持つ

ガザリスを相手にしていた。

「そっち行ったわよ！！アイサ！！」

「任せなさい!!」

アイサと呼ばれた少女は2丁の銃を持っており
それに魔力を流し込んで撃つとその弾丸は

雷の魔法を纏っており雷と同じ速さで動く弾丸だった。

「ぐぎやああああ!!!!」

ガザリスはそれ avoidance しようとしたが速過ぎるため

避けれずに直撃してしまいその場に蹲ってしまった。

「やった!!こいつそうとう弱ってるよ!!ゆえさん!!」

「任せろ!!」

ゆえは背中に炎の翼を生やしており空から様子を窺っていた。

「我が炎よ。全てを燃やしつくせ!!アマテラス!!」

ゆえは叫びながら刀を振るうと炎の斬撃が飛び

ガザリスに直撃するともものすごい速度で燃やしていった。

「終わったね。アイサ」

「うん。イリスもゆえさんもお疲れ様」

「ああ、お疲れ様」

3人の後ろには倒れ伏しているガザリスの姿があった。

「この尻尾を持っていけば任務完了だね」

アイサは片手に長い黒い尻尾を持っていた。

「ああ、もう帰ろうか」

「「了解」」

ゆえが皆に言う二人はゆえについて行き帰っていった。

「それにしても流石はゆえさんだね!!ガザリスを仕留めるんだ
もん!!」

「いいや、君たちが弱らせてくれたから勝てたんだぞ」

「でも、10位の名は伊達じゃないよね」

ゆえはランカーであり10位の位置にいた。

ちなみに先程、ゆえが発した呪文の様なものは

上級になってくると必要になってくる魔法マジックスペルの呪文である。

上に行けばいくほど呪文も長くなり魔力の消費量も多くなるが威力も初級や中級に比べると大幅に上がる。

「疲れた」

「そうだな、早く帰ろうか」

「「賛成」」

「ただいま」

「あ、お帰りなさい、ゆえちゃん。シャワーかご飯、どっちにする？」

「ん」先にシャワーを浴びるよ」

「分かったわ」

ゆえはタオルと服を持って浴室に行った。

「集は大丈夫だろうか」

ゆえは服を脱ぎながら集の事を考えていた。

「まあ、集も強くなってきたから大丈夫だろう」

浴室のドアを開けると目の前に集がいた。

「「……………」」

二人の間に何とも言えない空気が流れた。

「ぎゃあああああああああ！！！！！！」

「ま、待てゆえ！！落ち着け！！」

「見、見るなああああああ！！！！！！」

「うわあああああ！！」

ゆえは腕に炎を集め集に殴りかかった。

「母さん!! 何で言ってくれなかったの!?!」

「ごめん、ごめん。集君が入ってるの忘れてたわ」

ゆえの隣には髪の毛が少し焦げた集がいた。

「ゆえも落ち着けよ」

さっきは瞬時に氷壁を作って防いでいた。

しかし、その氷壁はもうすぐで貫通される所まで溶かされていた。

「は、裸を見られて落ち着けるものか!?!」

「別に僕は興味無いんだから」

「!!!!!!」

「あちゃ〜」

ゆえの母はその場から離れた。

「ほ、ほ〜う。私の体はそんなに女の子っぽくないか…」

「何を言ってるの? そんな事は言って」

その先の言葉を言おうとした時、ゆえの低い声で止められた。

「集」

「は、はい」

「後で私と模擬戦をしよう。もちろん全力でだ」

「い、いや今日は疲れたから寝たいな〜って」

「あ!?!」

「は、はい!?! 喜んでします!?!」

「よろしい」

その後、模擬戦をし集はゆえに完膚なきまでに叩きのめされた。

第14話 魔法の呪文（後書き）

お久しぶりです！！

2週間近くほっとくとこの作品のユニークが減りました！！

ま、元々が少ないのでそこまで精神的には来ませんでしたけど…
そんな事より、如何でしたか？

こんな面白くもない作品をお気に入り登録してくださっている
皆さまには本当に感謝感激です！！

これからよろしく願います！！

感想もお待ちしております！！

それでは！！

第15話 ランク3位の男

「つ、疲れた」

「き、貴様が悪いのだぞ！あ、あんな事を言うから」

「別に僕はゆえに悪い事は何も言っていないような気が」

昨日、フルボッコにされた集は模擬戦が終わった直後意識を失うように眠りについたが、翌日起きると

体中が筋肉痛で歩くだけで体が悲鳴を上げるほどに重症。

「集：おはよ」

「ああ、おはよう、フォレス」

後ろからフォレスが呟くように挨拶をした。

「：集：体：辛そう：大丈夫？」

「フォレスだけだ。僕の体を心配してくれる心優しい女の子は」

「な！わ、私だって心配はしているぞ！！」

顔を赤くしながら思いつきり集の背中を叩いた。

「痛！！」

「す、すまない」

「心優しい人は筋肉痛のひどい人には本気で、叩かない」

「そ、それは」

「：集」

「ん？何？フォレス」

「私：魔法：楽」

「つまり、僕を治療してくれるの？」

フォレスは頷くと集の腕に触れ魔法を発動させた。

「これは：」

フォレスの手の平から白っぽい光が出始めた。

「私：魔法：自然：治癒^{ホーリー}：怪我：治療：可能」

訳すと私の魔法は自然と治癒^{ホーリー}で怪我の治療が可能だという意味にな

る。

「おお！すっげー！！」

フォレスが治療が終わるとあれだけ、痛かった筋肉痛がかなり、ましになった。

「ありがとう！！フォレス！！」

「…どいたしまして…」

二人の微笑ましい光景を見ていたゆえはイライラしていた。

「イライラする。何でかは分からんが二人を見てるとイライラしてくる」

「ほら、ゆえもフォレスを見習って、ぐぎゃ！！」

「ふん！！もう、貴様の事など知らん！！」

フォレスとでも仲よくしている！！」

ゆえは集の顔面にカバンをおもいつきり、ぶつけ走り去っていった。

「い、痛い」

「集…大丈夫？」

「ああ、大丈夫だけど何なんだ？ゆえの奴」

集はゆえの後ろ姿を見て溜息をついた。

「何でゆえは怒ったんだよ。さっぱり分かんねえ」

集はあれからずっと考えていたが、授業が始まった今になってもゆえが怒った理由が分からなかった。

「今日は一段とキレてたな」

「…ん」

「謝るべきか？」

「…君！！」

「謝らないべきか」

「如月君!!」

「は、はい!!」

考え事をしていると先生に呼ばれている事に気付かなかった。よりによってフィーリの授業中である。

「な、何でしようか!？」

「授業中に考え事とはいい度胸ね。如月君」

「……すみません」

その後の授業は立ちながら受けた。

「あゝ最悪」

「お前が考え事なんて珍しいな。何かあったか？」

休憩時間になりリラックスしていると隣の席のゼロが話しかけてきた。

「いや、別に何も」

「ほんとかよ」

するとあれだけ、騒がしかった教室が一気に静かになった。

「ん？」

集は気になって周りを見渡してみるとゼロを含む

皆の視線が教室のドアに向けられていた。

集もその視線の先を見てみるとそこにはジャラジャラと

貴金属をつけた少年が誰かを探しているのか、首を忙しく動かしていた。

「お! 見つけた、見つけた」

少年は集と目が合うとこちらに近づいて来た。

「お前が如月集だよな？」

「え、ええまあ」

「今日の放課後、1組に来てくれ!! じゃあな!!」

少年は伝言だけ伝えてそのまま走り去っていった。

「だ、誰だあれ？」

「し、知らないの！？ 集君」

隣にいたアミヤが大声を上げて聞いてきた。

「あ、ああ」

「あの人は無機魔法のランカーでレイ・ゼクロスだよ！！
ランクは3位でランカーの中でも上位3人は別格だって言われてる
んだよ！？」

「そ、そうか」

アミヤの気迫に若干押されながら納得をした。

「でも、何でそんなに強い人が僕の所に？」

「さあ、分かんない」

結局、そのままチャイムが鳴り何も分からずじまいのまま放課後となった。

「えっと、1組はどこだ？」

集は絶賛迷子中だった。

保健室から職員室、学食、闘技場が3つに図書室、etc
施設がありすぎて未だに集は地図を片手に
歩いている。

「えっと……あそこだよな」

すると目の前にやたら、壁の色がキラキラしており天井には
ミニサイズのシャンデリアがあり
しまいには廊下に赤じゅうたんまでも引かれていた。

「何でこんなに差別化されてんだよ」

集はその廊下を歩き出すと廊下にいた生徒達が蔑み始めた。

「ねえ、見てあれ」

「あれって確かワルロス家の長男様と闘ったやつよ」

「あら、ほんと。でも、あれはワルロス様が手加減でもなさったんでしょ？」

「当たり前じゃないの！ワルロス様があんな奴に負けるはずなんて…
うう。ワルロス様」

突然、端で話していた4人の少女のうち一人が泣き始めた。

既に全校生徒にはワルロスは死んだと伝えられており

1組の女子生徒の大半が涙を流して、死を惜しんだ。

「ほら、しっかりなさい。そんな姿をあの方に見せてはいけません
わ」

そんな事は気にせず集は1組に入ろうとすると誰かに止められた。

「お前、1組じゃないだろ」

「そうだけど、何か問題でも？」

「大ありだ。1組でもない貴様がこの教室に入ると汚れる」

「離せよ」

集は手を振り払い教室に入ろうとしたが数人の男子生徒に囲まれて
しまった。

「お前！！平民のくせに貴族に逆らってんじゃねえよ！！」

「そうだ！！」

「は、ここは小学校か？」

「どういう意味だ！？」

集はため息をつきながら話し始めた。

「そのまんまの意味だよ。お前らは低レベルすぎるんだよ」

「き、貴様！！俺たち貴族を侮辱する気か！？」

「悪いけど侮辱はしていない。馬鹿にしているんだよ」

「「「！！！！」」」

囲んでいた生徒達は頭に來たのかそれぞれの武器を取りだし始めた。

「もし、今、土下座して謝るのなら許すことも考えてやるが」

「結構、かかって来いよ」

「後悔するなよ!!」

剣を持った一人の生徒が集に切りかかった。

「隙だらけだ」

しかし、集はそれを避けてその生徒のあごに
コークスクリューをぶつけた。

「んぎゃ!!」

殴られた生徒は奇声を上げたと思うとそのまま、白目をむき倒れて
しまった。

「くそ!! 全員で行くぞ!!」

「「おう!!」」

残った男子生徒達は一斉に集に飛びかかった。

「は」

集は刀を抜こうと手を置いた瞬間、後ろからチェーンが飛んできて
飛びかかってきた生徒たちを縛りあげてしまった。

「な、何だこれは!？」

「このチェーンは……まさか!!」

縛られた生徒がもがいていると後ろから陽気な声が聞こえてきた。

「はゝい、そこまで」

「「!!!!」」

「あんたは…今朝の」

「いやゝ悪いねゝ気分を悪くさせて」

後ろを見ると今朝の貴金属をジャラジャラさせたランカーの
レイ・ゼクロスがいた。

「レ、レイさん!!」

「お前たちもそこまでだ。誇り高い貴族がそんな事したらダメだろ」
「で、ですが!!」

「何か文句でもあんのか!？」

「い、いえ何もありません」

レイが反論した生徒を睨みつけるとその生徒は黙った。

一組では暗黙のルールとしてランカーは怒らせてはいけないというルールがある。

その理由は怒らせる＝死に直結するからである。

「ここにこいつを呼んだのは俺だしな。じゃ、行こうか、如月集君」

「集で良いよ」

「なら俺もレイで良いや」

レイは集を連れその場を離れた。

「ここら辺で良いだろ」

「ここは…」

集が連れてこられたのは広い庭園のような場所だった。

そこには色とりどりの花が植えられており蝶々等も飛んでおり非常にのほほんとした場所だった。

「綺麗だろ? この花は全部、理事長と俺で植えたんだぜ」

「え? でも、まだレイは1年生じゃ」

「そうだけど、理事長とは家が近所だから良くガキの頃遊んでもらったし」

中学の時も学校体験という事で顔パスで入れるようにしてもらって一緒にこの庭園の花を植えたんだ」

「へ…それで用ってのは?」

「ああ、そうだったな。ま、用っていう用は無いんだけどな」

「は? じゃあ、何で」

「一度、こうやって話したかったんだよ。失われた魔法を使う者を」
「ふん」

それから数分間、沈黙が流れレイがその沈黙を壊した。

「そう言えば今日、あいつと何かあったのか？」

「ゆえだよ。あいつ、今日一日不機嫌だったからさ」

「何故に僕に聞く」

「お前、いつもあいつと登下校してんだろ？」

「あゝそういう事：別にこれといつては無かったと思うけど」
「それでも、何かあったんだろ？ 教えろよ」

「まあ、良いけど」

それから集は今朝の事をレイに話した。

「ぶひやひやひやひや……！腹痛え」

聞き終わったとき、レイは大爆笑し始めた。

「何が面白いんだ？」

「まさか、あいつがそんな事をねーあひやひやはひやひや!!!」

「レイは意味が分かったの？」

「まあね。ま、自分で考えな」

そういうとレイは帰っていった。

「さっば、分かんねえ」

一方その頃、ゆえは……

「まったく！集の奴はどこに行ってるんだ！！」

怒りながら集を探していた。

「どこだー！ー！集ー！ー！ー！」

この叫びは遠く離れた集にまで聞こえたとか。

第15話 ランク3位の男（後書き）

こんばんわ！！連続更新です！！

如何でしたか？

それでは、感想もお待ちしております。

さようなら！！

第16話 忍び寄る影

ゆえの機嫌も少し良くなり一緒に下校していた時の事。

「ん〜やつと1週間終わった〜」

「そうだな。明日は鍛錬だという事を忘れるなよ?」

「あいあい。分かってますよ。ん?」

「どうした? 集……お前は!」

集達の目の前に一人の男子が立っていた。

「お久しぶりですね〜ゆえさん」

「あんたは誰だ?」

「私はマグナ・ギルスと申します」

「また、あの話か?」

「ええ、考えていただきましたか?」

「前にも言っただろう。考える余地もなくNOだ」

「ゆえ、あの話って?」

「集には関係ない。行こう」

ゆえは集の腕を取りそのまま、マグナを置いて去っていった。

「ふふふ、そう言ってられるのも今のうちですよ。ゆえさ〜ん」

マグナはニタニタとにやけながら呟いた。

「おい、ゆえ!」

ゆえは集の腕をつかんだまま、ずかずかと歩いていた。

「ゆえ!」

「あ、ああ悪い」

ゆえは集の叫びを聞いてようやく腕を放した。

「どうしたんだよ。お前らしくないぞ」

「ああ、すまない。気にしないでくれ」

「あいつは誰なんだよ」

「貴様には関係ない」

「良いから聞かせ…」

「貴様には関係ないと言っているだろう!!!!!!!!!!」
「!!!!!!!!!!」

集は初めてゆえの怒りを見て何も言えなかった。

「……すまない。本当にあいつとは何もないんだ」

「あ、ああ僕もごめん。無理に聞こうとして」

「いや、良しさ。帰ろう」

「うん」

「何もないのならそんな悲しそうな顔はしないよ。ゆえ」
ゆえの顔は今にも泣きそうな顔だった。

集は家に帰りゆえが寝静まった頃にユイに聞いてみる事にした。

「あの、ユイさん。ちょっと良いですか？」

「ええ、良いわよ。そこに座って」

「はい」

「それで聞きたい事って？」

「マグナ・ギルスって知ってますか？」

「!!!!!!!!!!!!!!」

その名前を聞いた時、突然ユイの顔が驚愕に染まった。

「い、いや知らないわね、誰の名前かしら？」

「知ってるんですね」

「い、いやだから知らないって」

「僕はマグナ・ギルスという名が人間の名前とは言ってますんけど？」
「!!!!!!!!!!」

ユイは墓穴を掘ってしまっていた。

集は最初からユイがしらを切る事を予想し、カマを掛けていた。

「教えてくれませんか？ユイさん」

「そろそろ寝ないとね。明日も早いし」

「ユイさん！！」

はぐらかされてしまい、何も聞けなかった。

〔集にあの事を言うべきか、言わないべきか〕

ゆえは自室で布団にくるまって考えていた。

〔あの事を言えば集は必ず私を護ろうとする。

それは、嬉しい。だが、そうするとあいつは何をしでかすか分からない〕

ゆえの頭の中にマグナの顔が浮かび上がった。

〔私はどうすれば良いんだ！！〕

その晩、ゆえはなかなか寝付けなかった。

「おはよう、集」

「あ、ああ。おはよう、ゆえ」

次の日の朝は、少しギクシャクしていた。

一緒に歩いていても、一言も話さなかった。

「じゃ、僕は先に行ってるから！！」

「お、おい、集！！」

集はそのまま走り去っていった。

「は」

「おやおや、失恋でもしたような乙女ですね」

「また貴様か！！マグナ・ギルス！！」

「わたくしの事はマグナとお呼びくださいと

前から何度も言ってるじゃないですか」

「呼ぶものか！！」

「ま、良いでしょう。今日の放課後に会議室に来てくれませんか？」

「断る！！貴様のいる場所になど行きたくもない！！」

ゆえはそのまま立ち去ろうとしたがギルスがそうはさせなかった。

「おやおやくこんな所に写真があるぞ」

「！！！！！！」

「これは、誰かが生徒を刀で切っている写真の样だけどな」

「き、貴様！！なぜ、その写真を！！」

その写真に写っていたのは顔を返り血で赤くしているゆえの写真だった。

そして、写真の端には血を流して片腕を切断されている少年の姿が映っていた。

「これを学校にばらまけば貴方の地位は下がり

ご両親は働けなくなるでしょうね」

「くっ！！」

「それで今日の放課後來てくれますか？」

「分かった」

「ふふふ、最初からそうしていればいいんですよ」

マグナはニタニタとにやけながら学校へと向かった。

そして、時間は流れ放課後となり集は、この前にレイと一緒に来た庭園にいた。

「やっぱり、キレイだな。のどかでいいし」

「それは同感だな」

「理事長」

後ろから声がして振り向いてみると理事長が立っていた。

「ここに来るといつも落ち着く」

「そうですね……理事長」

「ん？」

集は彼の事を聞いてみる事にした。

「マグナ・ギルスって知ってますか？」

「ああ、知っているよ。彼もうちの生徒だ。知らない筈はない」

「その人はゆえと何かあったんですか？」

「桜さんとかい？：別にそういう事は聞いては無いがどうかしたのかい？」

「あ、いえ別に」

「では、こちらでも質問をしよう」

「????？」

「君は桜さんをどこまで知っているんだ？」

「どこまでって、別に交友に最低限必要な事しか」

「そうか：なら良い」

「へ？」

「いや、なんでもない。私は帰るとしよう。じゃあな」

「はい、さよなら」

「やゝやゝ、お待ちしておりましたよ。ゆえさん」

「戯言は良い。さっさと要件を言え」

「ん、もうゝ冷たいですねゝ。ま、そういう所も好きですよ」

「良いから、言え！！」

「ちっ！分かりました。単刀直入に言いましょう。

僕と結婚して下さい」

「付き合ってくれの次は結婚か。断る」

「でも、僕は貴族ですから絶対に結婚しないといけませんよゝ」

「それは平民との間だけだ。ランカーはそういう事には縛られない」
ランカーは普通なら制限される行動もある程度は自由に行える。

「それだけか？」

「いいえ。では、一つお聞き致します。貴方様のお父上の

グラン様は確か、国家直属の守護隊の隊長だとお聞きしましたが」

「ああ、そうだ」

「いやゝ実はですね、僕の父様は守護隊の管轄者なんですよねゝ」
「それが、どうかしたのか」

「実は父上は平民というものが大嫌いでしたゝ一度、国家の役職に就いていた平民を辞めさせたこともありましてねゝ」

「それがどうした」

「確かゆえさんのお父上はもとは平民で、先の戦乱で国家に勝利をもたらした英雄だそうですね」

「……まさか、貴様……」

「おわかりですか？ 私の父様に言えば、貴方のお父上など今の役職から

外すことなど容易いこと、それに父様は平民を嫌ってもおりますからねゝ

それにあの写真も流せばまず、守護隊になどいられないでしょうねゝ」

「貴様……汚いぞ……」

「おやおやゝそんな口をきいて良いんですかゝ？」

「……！！！！」

「それじゃあ、父様に言って」

「ま、待て……」

「待て？」

「……待って下さい」

「それで良いんですよゝで？」

「私は何をすれば……」

「そんなの決まり切ってますよゝ僕と結婚して下さい」

「ふ、ふざけるな……」

「んゝ？」

「くっ……」

「どうしますか？」

「……………考えさせて下さい」

「ふふ、良いですよ。3日あげます。その間に考えておいて下さいね。ま、答えは決まり切っていますがね」
その台詞を残しマグナは去っていった。

「私は……………どうすれば良いんだ……………集」

第16話 忍び寄る影（後書き）

こんばんわ!! ケンです!!

如何でしたか? ようやくここで第二章です!!

今までは第一章として日常編でした!!

感想もお待ちしております!

それでは!!

第17話　ゆえの決心

その日の晩、ゆえは食事もとらずに部屋に閉じこもっていた。

集が心配して何度も呼びにきたが、それを無視してまで考えていた。

「私があいつの条件を呑めば父様はこれからも、隊長を続けられる。だが、断れば父様は職を失う。答えは決まり切っている。でも、私は……」

ゆえが考えているとノックされた。

「さっきから言っているだろう、集。今日は一人に」

「私よ、ゆえちゃん」

「母さん？」

ドアを開けるとそこには集ではなく、母親のユイがいた。

「少し、良いかしら」

「うん」

「何かあったの？ ゆえちゃん」

「……また、あいつに」

「…そう。それで今度はなんて？」

「結婚を申し込まれた」

「そんなの断れば…」

「もし、結婚を拒否したら父さんの役職を無理やり辞めさせるって」

「そんなの横暴すぎるわ！！ もう我慢の限界よ！！ 直接、言ってくるわ！！」

「だ、ダメ！！」

「ゆえちゃん…」

「駄目だよ。私はランカーだからあいつと対等に話せるけどお母さんがいたら、あいつ、何をしでかすか分からない」

「でも…」

平民であるユイが貴族に文句を言えば、貴族の権利で有罪にでも

されれば、それこそいつ出てこれるか分からなくなる。

「この件は私が何とかするから」

「分かったわ。それで、この事は集君には？」

「言ってるない。集に言ったら絶対に何かするから。」

それだけは、させたくない！！」

「分かったわ。私も集君には言わないわ」

「ごめんね、お母さん」

「良いのよ。さ、ご飯を食べましょ」

「うん」

それから、時間は流れ期限の前日となった。

「明日か……」

「何か言った？ ゆえ」

「いや、何もない」

「そう」

「すまない、集。君には迷惑はかけない」

食事も終え、集が寝静まった時間にゆえは自分の決心を母に伝えた。

「本気で言ってるの！？ ゆえちゃん」

「うん」

「でも、そんな事したらゆえちゃんは！！」

「私は大丈夫。折角お父さんが頑張ってきたことを私の所為で奪われたくない。だから、私はあいつの要求をのむ」

「ゆえちゃん…」

「今まで育ててくれてありがと。こんなにも、わがままになっちゃってごめんね？」

「ゆえちゃん」

ユイは涙を流しながらゆえを抱きしめた。

そして、期限当日となり指定された崖にゆえが向かうとランカーの皆が集まっていた。

「「「ゆえ!!!!」」」

「みんな」

「なんで、あんな奴と結婚するのよ!?!」

「ライカの言う通りだよ!!! 何で私たちに相談してくれなかったの!?!」

ルーラとライカが涙目で言った。

「すまない。皆には迷惑はかけたくはないし、それにこれは私の決めた事だ」

「でも!?!」

「そうですよこれは僕達の事なんですから皆さんは口出ししないでくださいよ」

ラナが話そうとした時、マグナとレイ、そして六色の髪の色少年が来た。

「あんたはそれで良いの!?! レイ、アーク!?!」

「別にこのいつが決めたんなら俺達は口出しは不要だし」

「アークはどうなの!?!」

「俺もこいつと同感だ。ゆえが決めたのなら俺達は何もしない」

「そうですよ、で、答えを聞かせてもらいましょうか? ゆえさん」

「ああ、お前と結婚しよう」

「ふははははははははは!!!!!! そうですかいやうよかったよかった」

マグナが笑っていると地面が凍りついた。

「ん？氷？」

「その話、ちょっと待った」

「集！！」

ライカが振り向くとそこには集がいた。

「貴方が氷の魔法を使う如月集さんですか」

「ああ。そんな事よりさっきの話はどういう意味だ」

「そのまんまですよ。ゆえさんと僕は結婚するんです」

「そうなのか？ゆえ」

「ああ、こいつの言うとおり私はこいつと結婚する」

「ゆえ、本当の事を言ってくれ」

「本当だ」

「ゆえ！！」

「本当だと言っているだろう！！」

ゆえは集に炎の魔法を放ちながら叫んだ。

「あっち！！ゆえ！！」

集は少し、喰らいながらも避けた。

「いい加減認めたらどうですか？如月さん」

「お前は黙ってろ！！それで、お前らは良いのかよ！！」

集はランカーの皆に向かって叫んだ。

「こいつが決めた事には口出しできないしな」

それに、掟だしな」

「どういう意味だよ！？レイ！！」

「知らないんですか」

マグナは神経を逆なでするように集に言った。

「何？」

「平民同士での結婚ならば双方の納得があれば自由に行う事が出来るが、

平民が貴族から婚姻を申し込まれた場合には有無を言わず平民はそいつと結婚しなければいけない」
今まで、片言でしか話さなかったフォレスが初めて、文で喋った。

「フォレスさんの言う通りですね、僕は貴族ですから絶対にしなければいけないですよ」

「そんなもん不条理だろ！！」

「だから、掟だから俺たちには何も言えないんだって。分かってくれよ、集」

レイが呆れたように集に行った。

「そういう事だ。だから、集。お前はもう帰れ」

「ゆえ…だったら無理やりにでもお前を連れて帰る」

「ほほ、どうしてですか？」

「この前、あれだけゆえはお前の事を嫌っていたのに今になって結婚だなんてあり得ねえ。何かあるんだろ」

「ありませんよ、そんな事」

マグナはニタニタと笑いながら言った。

「それは調べてから聞いてやる！！」

集は背中に氷の翼を生やしものすごい速さで、ゆえに向かって突っ込んでいった。

「今、皆はあいつの後ろにいる。この速さならあいつらに捕まる前にゆえを連れ戻せるはずだ。待ってろゆえ！！」

集の手がゆえに届きかけた時、体全体に衝撃と腹部に激痛が走った。

「え？」

集は腹部に目をやるとそこには……

「ごめんね。私達が掟を破るわけにはいかないから。だから……死んで、集」

いつもの明るいルーラの声が聞こえたがこの時だけは、まるで悪魔のささやきの様にしか聞こえなかった。

なぜなら、集の体はゆえとマグナの二人を除く、全員の武器で貫かれていたから。

「な……ん……で」

武器を抜かれると、集は血を流しながら地面に倒れ伏した。

「ふははははははははは！……！あなた程度の力で、

ランカーから一人救えるとも思ったら大間違いですよ!!!」

マグナは笑いながら集を蔑んだ。

「が……あ」

「まだ息がありますね。止めは僕がさしましょう」

マグナが集に近づこうとした時、ゆえに止められた。

「ゆえさん？」

「私が止めを刺そう」

「ふははははは！……！　そうですか！　まさか、また貴方の本性を見れるとは思いませんでした。どうぞ、ゆえさん」

ゆえは刀を抜き、集に近づいて行つた。

「ゆ……え」

「まさか、助けに来るとわな。お疲れ様。」

あの世でゆっくり休んでいろ。

我が炎よ、全てを飲み込み、全てを燃やしつくせ、フェニックス！

ゆえが刀を振るうと炎が取りの形を形成し、集に突撃し大爆発を起こして集が倒れていた一帯の崖を削り取った。

$$\left. \begin{array}{c} \text{ゆ} \\ \vdots \\ \text{え} \\ \vdots \end{array} \right\}$$

そのまま、集は氣を失いながら落下していった。

「これでお終いだ。さっさと帰るぞ」

「はは！！容赦ないですねーゆえさん。流石は僕の
伴侶になる人です！！」

「…そうだな」

ゆえとマグナは一緒に帰っていった。

「…私達も帰りましょう」

「うん…」

「ええ…」

「オツケ」

残った4人も帰ろうとしていた。

「…」

アークだけは崖の下を見ながら、動こうとしなかった。

「おーい、アーク、帰ろうぜ」

「ああ」

立ち止まっていたアークもレイの声で崖から離れ帰っていった。

「ンニャー眠たいにゃーこういうときは日向ぼっこに限るニャー」

一匹の猫が人間の言語を話しながら森の中を歩いていた。

彼は精霊と呼ばれるカテゴリーに属しているミラ族である。

ミラ族は他の精霊と共に集落の様なものを作り共存する。

精霊の中では比較的珍しい種族だった。

「んふふ♪んふ…んぎゃー！！」

彼は鼻歌を歌いながら機嫌よくいつもの、場所に行こうとしたが

下をよく見ておらず、何かに足を引っかけてしまい転んでしまった。

「ミヤー!!どこなの?」

遠くの方から少女が走って来た。

「ンニヤゝご主人様の声だにゃゝこっちにゃゝ」

「もう!勝手にさきさき、行っちゃダメでしょ?」

「ごめんさないにゃゝ」

「ねえ、ミヤ、貴方何に乗ってるの?」

「ふえ?」

下を見てみると刀があった。

「何かひんやりすると思ったらこれだったのにゃゝ」

「なんだろこれ。…え?」

刀を持ちあげようと視線を上げた時、人が倒れていた。

「だ、大丈夫ですか!」

それは先程、崖を落とされた血まみれの集だった。

第17話 ゆえの決心（後書き）

こんにちわ!! ケンです!!

テスト中なのにアホほど書きすぎて連続更新です!!
如何でしたか?

結構この作品を見て下さる方も増えてきました!!

ありがとうございます!!

それでは!!

「そんなに叫ぶと傷が開きますよ？」
「うぐ!!」

叫んだ瞬間に巻かれていた白い包帯が赤色に染まっていた。

「まあ、このくらいなら放っておいても良いでしょう」

「いやいや、痛いんですが」

「ご主人さまが言うんだから大丈夫なんだにゃ」

「また、喋った」

「まあ、驚くのも無理はありませんね」

「ところで、君は誰？」

集は目の前にいる少女に質問した。

「初めまして。私はスーダ・レヴィです。こっちが契約している」

「ミヤだにゃ」

「えっと、君たちは」

「あ、すみません。そこから説明しますね。ここは、ミラ族とヒラミ族が

共生している村です。そして、私達はあなた方と言う精霊と呼ばれるものです」

「ほとんど人間にしか見えない」

「ふふふ、私達ヒラミ族は外見は人間ですからね。

人間との違いはこれです」

スーダが耳にかかっていた髪を退けると垂れ下った耳が出てきた。

「あ、垂れ下ってる」

「はい、精霊の中には姿から違う種族もいますが、我々は耳がたれ下がってるのが特徴です」

「へーそうか」

「ところで、なんでお前さんはあんな所で倒れてたのにゃ？」

「……色々あってな」

想い雰囲気が辺りに漂い始めるとスーダは雰囲気を変えるべくある事を提案した。

「気分転換に村でも見ますか？案内しますよ」

「お願いするかな」

「はい！ミヤ、行くよ」

「にゃ」

ミヤはスーダの肩に乗った。

その頃、ゆえはというと……

「これなんかどうです？ゆえさん」

「ああ、綺麗だな」

ゆえはマグナに連れられ、ウエディングドレスを見に来ていた。

なんでも、準備は早い方がいいという事でもう準備を始め出したのだ。

とはいっても、先程からゆえはマグナに聞かれても、ああ、そうだなとしか返答しなかった。

「どうしたんですか？ゆえさん。さっきから片言の様にしか返事してませんけど、具合でも悪いんですか？」

「いや、大丈夫だ。それよりも、ほかのも見ないか？」

「そうですね、向こうの方にも行きましようか」

ゆえとマグナの光景を遠くから見ている者たちがいた。

「本当にこれで良かったのかな？」

ラナは他の皆に疑問をぶつけた。

「仕方がないでしょ。掟だから」

「でも！！そうだとしても、ゆえのあんな顔見たくないよ」

ライカは諦めているかのように返事をし、ラナは目に涙を浮かべて言った。

ライカ達のすぐ後ろにアークとレイがいた。

「なあ、アーク」

「なんだ」

「あいつ、死んだかな？」

「如月集の事か？」

「勿論」

「さあな」

アークは興味無さそうに返事をした。

「氷を使えると言っても所詮は素人か」

アークは口には出さずに心の中でそう考えた。

場所は変わり、集は村を散策していた。

「綺麗だな。自然がいっぱいあって」

「ふふふ、私もここが好きです。ミヤがいてみんながいるこの村が大好きです」

「そっか……そう言えば、さっき言ってた契約って？」

「あ、言い忘れてましたね。私達はミラ族と契約して力を貸してもらってるんです」

「力を？」

「はい。元々、ヒラミ族は魔力が少ない一族なんです。そのせいで昔は、一番襲われやすい一族だったんです。それに対してミラ族は魔力は持っているんですが、猫の為に魔法が使えないんです。

そこで、昔の人はヒラミとミラで協定を結んだんです」

「ミラ族はヒラミ族に力を与えるってわけか」

「はい！それで、ミラ族が他の精霊に襲われないように護るのが私達の使命なんです」

「そっか……使える魔法ってなんなんだ？」

「使えるのは獣人化です」

「獣人化？なんだそれ？」

「獣人化っていうものはミラ族とヒラミ族に伝わる魔法なんだにゃ」

「ミラの言うとおりで、獣人化する事で初めて私達は戦う事が出来るんです」

「一回見してくれるかな？」

「良いですよ。行くよ、ミヤ!!」

「あいにゃ!!」

ミヤとスーダが光に包まれ、一つになった。

「これが……」

『はい、これが獣人化です』

そこには、鋭い爪を持ち髪の毛が肩までだったものが腰に届くぐらいにまで伸びたスーダがいた。

「凄いな」

『獣人化の特徴は速さです。高速で移動して相手を爪で切り裂く。これが私達の主な戦い方です』

「ふんふん」

すると、急に光に包まれスーダは元に戻ってしまった。

「でも、これって未熟なうちは短い間でしかなれないんですよ」

「ふにゃ」

足もとには疲れ切ったミヤが寝転がっていた。

「私みたいに未熟者は、短い間しかなれないのとミラ族の体力を極端に消費しちゃうんです」

寝転がっていたミヤをスーダは持ち上げ頭に乗せた。

「こんなものです」

「ありがと。お札に僕のも見せてあげるよ」

「本当ですか!？」

突然、スーダは目を輝かせながら叫んだ。

「お、おう」

「私、外の魔法を見るのって初めてなんですよね」

確か、外は炎、水、雷、自然、無機、闇があるんですね!？」

「まあ、そうだけど僕のは少し違うんだ」

「え？」

「僕のは氷だ」

集は近くにあった小枝を拾い、凍らした。

「……」

ミヤとスーダは集が凍らしたものをまじまじと見て、お互いに目を合わしたりしていた。

「どうかしたのか？」

集が不審に思い聞いてみるとミヤが話し始めた。

「たしか、集とか言ったかにか？」

「あ、ああそうだけど」

「少し、ついて来て欲しいにゃ。会わせたい人がいるんだにゃ」

「うん、良いけど」

集はスーダに連れられてきたのは、大きな小屋だった。

「ここは村長の家なんだにゃ」

「この村の？」

「はい。村長は何百年も生きてて、昔の事を知っています。

恐らく、氷の魔法の事も」

「!!!!!!」

集は驚きながらも村長の小屋に入った。

「失礼します、村長」

「その声はスーダかな？」

「はい」

「今日はどうしたのかな？」

そこには、顔にいくつもの皺が折りたたまれ、気で出来た杖を持ち、対面する者に安心感を与えているようなオーラを出すおばあちゃんがいた。

「村長に聞きたい事があります」

「ふむ、何かな？」

「氷の魔法についてです」

「ふむ、今日はそこに来たか。懐かしいの〜」

村長は目を細めながら懐かしんでいた。

「そう言えば後ろにいる少年は誰かな？この村の者ではないみたいだが」

「あ、初めまして。如月集です」

「ふむ、集君か。それで、何の用だい？」

「村長」

スーダが後ろから口をはさんだ。

「氷の魔法はその昔、存在していましたが今は完全に消え去ったんですね？」

「ふむ、昔は氷の魔法があったんじゃがなく今は消えとる」

「もし、その氷の魔法が現代に蘇ったらどうしますか？」

「ふおっふおっふおっふおっふおっ！！スーダ、冗談でも

そんな事言っちゃいけないよ？」

村長は笑いながらスーダに注意をした。

「では、実物を見て頂いた方がいいですね。集さん、これを凍らしてくれませんか？」

スーダは村長が飲んでいただろうカップを渡した。

その中には、先程入れた為かまだ、少し湯気が立っていた。

「うん、分かった」

集は指を一本その中にいれ、先程まで湯気が出るほど熱かった液体が徐々に凍りだし、最終的に氷になった。

それを、スーダは村長に渡し液体を触るように言った。

「！！！！！！！！」

村長が触れた瞬間、顔が驚愕に染まった。

「凍っている」

「はい」

「まさか、これを集君がしたのかい？」

「はい」

「集君、君の顔を近くで見せてくれないか？」

「分かりました」

集は言われたとおり村長の顔の近くによると

村長が手で集の顔を触りだし、今まで瞑っていた目を開けた。

「おお、似ている」

「え？」

村長はそう、呟いた。

「そっくりだ。あの時の戦いであやつを凍りづけにし
封印した彼女にそっくりだ」

村長は目に涙を浮かばせながら懐かしんでいた。

「え、えっと」

集は勝手に触られた揚句、似ている、似ていると言われても混乱するだけだった。

「ああ、すまないね。そうか、君は氷を使うのか」

「はい」

「君に伝えたい事があるんだが聞いてくれるかい？」

「あ、あの僕、急がないと」

「大丈夫。君が止めようとする結婚式はまだ、始まらないよ」

「な、なんでそれを！？」

集は思っていた事を言われ驚いた。

「わしやは昔から人の事が分かるのさ。今日は泊まっていきなさい」
「はい」

集は不思議なものを村長に感じ、言う事を聞いた。

第18話 ヒラミ族とミラ族（後書き）

こんばんわ！！ケンです！！

如何でしたか？

それでは、御休みなさい！！

第19話 魔の洞窟

集が村にいる頃、ゆえは部屋で月を眺めていた。

「綺麗な月だな。集」

ゆえは集が隣のベッドに居ると思いつい、いつも通りに話しかけてしまった。

「……」

ゆえはベッドから立ち上がり集が使っていたベッドに寝転ぶと少しだけ、気が楽になった感じがした。

「集の匂いだ」

ゆえはシーツの匂いを嗅ぐと集の匂いが残っていた。

「集……集」

ゆえはシーツに涙をこぼしていた。

「会いたい、会いたいよ。集」

その晩、ゆえは集が使っていたベッドで涙を流して眠りについた。

同時刻、集は村長の話を聞いていた。

内容は昔の氷の魔法使いについてなど。

「ま、こんなところか。私が知っているのは」

「そうなんですか……」

「君は何を迷っているのかね？」

「え？ 僕がですか？」

「さよう。少年は何か悩んでいる」

「……村長」

「なにかね」

「もしも、助けたい人に拒絶されたらどうしますか？」

「ふむ、つまり、その助けたい人のもとに行ったらあらかた、助けに来なくていいと言われたのかね」

「はい……」

「ならば、聞こう。君のその助けたいと思っている人はその人に拒絶されたらもう助けなくても良い人なのかい？」

「そんな事は……」

「君はそう言ってるのと同じだよ。助けたい人はその程度の人なのかい？」

「僕は……助けたい。助けたいですよ!!」

集は涙を流しながら叫んだ。

「でも、力もないのにどうやって助けろって言うんですか」

「力ならある」

「え？」

村長が小さな声で呟いた。

「この村の住人は皆、ミラ族と契約しているのは知っているね？」

「はい」

「でも、唯一この村で誰とも契約していないミラ族がいる」

「契約していない？」

「そうじゃ。そやつはこれまでに何人も契約してくれと頼み込まれても」

頑なに許さなかった」

「どうしてですか？」

「分からぬ。何度も理由を聞いたが一向に教えてくれぬ」

「契約って僕でも出来ますか？」

「うむ。契約自体はどの種族でも出来る」

「……そいつに会わせてくれませんか？」

「ああ、良からう。だが、今日はもう遅い。ここで寝るがよい」

「はい。ありがとうございます」

集は村長に用意された布団を使い寝た。

その日の夜はとても静かな夜だった。

翌日、集は起きるとすぐにその誰とも契約していないという

ミラ族に会う為に生息している場所にスーダと共に向かっていった。

「ど、どこまで行くんだ？」

「頑張ってください。後もう少しです」

村からかなり離れた場所にいるというが

先程から森を突き進み、道なき道を歩いてばかりだった。

「っ、着きました」

「ここが…」

着いた場所は洞窟があり周りは森林に囲まれ、

魔物と思われる骨も転がっていた。

「ここは、私達の村ではあの中に入ると無事では帰れない場所だと言われています」

「だから、行きしな村の皆に心配されたのか」

出発する時に何故かやたら皆に気をつけてとか、生きて帰ってきてねなどと言われた

がこういう意味だったとは知らなかった。

「よし！んじゃ、入るか」

「え、ちょ！入るんですかー！！」

「当たり前だろ。ここにあいっががいるらしいからな」

集が洞窟に入ろうとした瞬間、突然、集の姿が消えた。

「え？あ、あれ？集さーん！！どこですか？」

「ご主人さま、下を見てみるにゃ」

「え？下？」

ミヤに言われ下を見るとぽっかりと穴が開いておりそこに集が落ちていたのだ。

「痛たたた」

「大丈夫ですか？、集さん」

「うん、まあなんとか」

スーダの手を借りながらなんとか穴から出ると再び気合いを入れなおして洞窟に入った。

「暗いじゃ」

「な、何も見えないです」

「ふむ、少し試してみるか」

集は手のひらに小さめの炎の玉を生成すると周りが炎によって照らされた。

「よし、成功だな」

「にしても不安になる明かりだじゃ」

「うっせえ」

ミヤの言うとおり集が作りだした炎は時折、風も吹いていないのにたなびくほど弱弱しかった。

「でも、無いよりかはましですよね」

「……行こうか」

若干、集はがっかりしながら先へと進んでいく。

その頃、ある場所ではある報告がされていた。

「失礼致します、女王様」

「入りなさい」

ここは、ユートリスの首都にある政府の様なものだった。

ここでは、ユートリスという国全体の情報が日夜、慌ただしく入ってきている。

「それで、この前頼んでいた物は」

「はい。極秘に調査しましたところ、女王様の言うとおりでした」

「そうですか」

「しかし、あやつの立場もあり発表したとしても、もみ消されるで

しょう」

「そうですか……時を待ちましょう」

「は！」

場所は戻り、集達は洞窟の中を必死に進んでいた。しかし……

「あゝもう！！なんなんだよ！！こいつらは！！！」

「きゃーーーー！！！！！！虫は嫌ーーーー！！！！！！」

集は迫りくる巨大な昆虫を刀を使い切り落としていったがキリがなかった。

切っても切ってもどこからか、大量にわき出ておりそこを叩かない限り

殲滅するのは不可能だった。

「くそ！！こいつら、1匹、1匹がかなり強い！！」

アゝもう、邪魔だ！！数で来られると厄介だな」

集の言うとおりこの昆虫たちは1匹が強くさらに、生命力も強い
ため頭を潰さない限り死なない。それに加え、情報でも共有してるのか
一度やった攻撃は見切られており当たらなかった。

「きゃーーーー！！！！！！！！もう嫌ーーーー！！！！！！！！」
！」

スーダは大の虫嫌いで軽く錯乱していた。

「あゝもう！！面倒だ！！全員、氷の中で眠ってろ！！！」

集は昆虫たちの入り口を凍りつかせ入れないようにし
残った奴らは全員、きっちりと凍らした。

「はあ、はあ、はあ。やっと、片付いた」

「お、終わったの？」

スーダは涙目でさらには体をガタガタ震わせていた。

「ああ、終わったよ。さ、行こうぜ」

「はい」

集はスーダの手を取り再び歩き出した：が

「グルルルル！！！」

「「……………」」

目の前に猪を5倍ほど大きくした魔物がいた。

「ちなみにあれば、ガルラの親玉のレンガラだにゃ」
目の前にはパツと見で軽く、40匹程いた。

「せ、説明は良い。どうすれば…」

「こいつらは殺さない限り何度でも突進してくるにゃ」
「もういや」

スーダはその場にへたり込んでしまった。

「グラララララ！！！！」

「うおらっああああ！！！！やったらああああ！！！！」

集は刀一本でイノシシに突進していった。

「猪だけにイノシシに突進だにゃ」

「ギャグはいらねえよおおおおお！！！！」

洞窟に集の突っ込みが響いた。

第19話 魔の洞窟（後書き）

おはようございます！！ケンです！！

今日でようやくテストが終わります！！

これようやく落ち着けます。

如何でしたか？

それでは、行ってきます。

第20話 契約しない理由

集が猪と闘っている同時刻、ゆえはというと……

「やはり美しいですね。流石はゆえさん」

ウエディングドレスの試着をしていた。

結局、あれから見回ったがゆえの反応がイマイチなのでマグナはオーダーメイドで作らせた。

そのウエディングドレスは宝石がいたるところに散りばめられておりキラキラと光っていた。

試着の場にはマグナの母親と弟、そしてゆえの母親がいた。

二人の父親は仕事があるため今回は欠席となった。

「まあ！とてもきれいです事！！とても、平民の人間から生まれたようには思えませんわ！！」

ハイテンションで嫌みを言っているのが、マグナの母親で夫に代わりギルス家の当主を務めている、フリマス・ギルスである。

そして、フリマスに手を繋がれている4、5歳くらいの少年が、弟であるアギト・ギルスである。

二人の格好は自分が金持ちであると周りに自慢するかのような豪勢なものだった。

フリマスは指輪を何個もつけネックレスも宝石がふんだんに使われた物をつけていた。

そして、アギトはというとまだ、4、5歳の為、お洒落に目覚めてはいないが

恐らく母親につけているといわれつけている指輪が2、3個あった。

「ねーママー」

「なーに、アギト」

「あの人誰？」

アギトはゆえに指を差して母親に聞いた。

「うん、あの人はねマグナお兄ちゃんが結婚する人なの」

「結婚ってな〜に〜?」

「ん〜とね、パパとママみたいになる事」

「ふ〜ん」

「ふふ、可愛いでしょう?あれが僕の弟です」

「…そうか」

「可愛くありませんか?」

「いや、可愛いな」

それに対し、ゆえの母親であるユイは質素な服を着ており
ネックレスなどの貴金属は一切付けておらず、フラリスの様に
めちやくちゃ厚化粧している訳でもなく必要最低限に化粧をしてい
た。

「貴方があの子の母親かしら?」

「あ、はい。私は」

「ああ、別に良いわ」

フラリスはユイが名乗ろうとするのを止めさせた。

「え?」

「あたしは平民の名前は覚える気ないから」

明らかにユイを見下しながらフラリスは言った。

「は、はい」

ユイはこの場はおとなしく下がった。

「ママ、どうかな?」

マグナがフラリスにさういうと、先程とは打って変わりフラリスは
満面の笑みでマグナに近づいて行った。

「あらまあ!!綺麗!!流石はマグナちゃんが職人に
言って作らしたことはあるわね」

「ふふ、ありがとう。ママ」

その後、細かい作業が終わってないという事でドレスは店に預け、5人は店を後にした。

「それで、どの様に式をあげようかしら」
フラリスとマグナ、ゆえはギルス家に集まり、式の内容を決めていた。

「ん〜やっぱり、招待客は多めの方がいいね」
「どうして？」

「何言ってるのさ、ママ。僕の結婚式だよ？人々に未来永劫伝えられる

式にしないとギルス家の名が泣くよ？」

「そうね。ごめんなさい。招待客の方は私に任せて！！」

「うん、お願いするよ。ゆえさんもそれで良いよね？」

「あ、ああ」

ゆえは慌てて返事を返したがほとんど話を聞いていなかった。
先程までずっと、集の事を考えていたのである。

頭の中が集という単語だけでいっぱいになるほど考えていた。

「そうね〜招待客の数を考慮に入れると準備期間に2週間は必要ね」

「そっか〜2週間か…うん、分かった」

そして、この時制限時間タイムリミットは2週間と決まった。

その頃、集はというと…

「最後の一匹！」

「ぶぎゃああ！！！」

集が最後の一匹に刀を突き刺すとともに洞窟に静けさが戻って来た。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

「だ、大丈夫ですか！？集さん！！」

「ああ、なんとかね。でも、魔力がもうやばいかな」

「んにゃゝ魔力が尽きる前に早く行くにゃゝ」

ミヤの催促で集はスーダの肩を借りながら洞窟の奥に向かった。

「あ、あれ行き止まり？」

「本当だ」

数分歩くと二人と一匹は行き止まりに辿り着いてしまった。

「どうしましょう。これ以上進めないようですし」

「うん、そうだね…ん？」

「どうかしたかにゃゝ？」

「何か聞こえない？」

「え？」

集に言われスーダは耳を傾けると確かに何かを擦る音がしていた。

「なんだろこの音」

「んにゃゝ、まるで刃と刃をこすってるみたいな音にゃゝ」

「刃と刃…まさか」

「どうしましたか？ 集さん」

集は何かに気付いたのか顔を青白くしていた。

「た、多分だけど、ここに来る途中でたくさん昆虫がいたよな？」

「はい…まさか」

「うん、多分この音源は」

集が言いかけた時、ミヤが呟いた。

「んにゃゝ大きなカマキリだにゃゝ」

「そうそう、カマキリ…え？」

スーダと集は恐る恐る後ろを振り向くとそこには大きなカマキリがいた。

「「……………」」

「キシヤアアアア！……！！」

「「ああああああ！！！！」」

二人が叫び、後ろの壁にもたれた途端、壁に穴があき集とスーダは

「いや、お前が言うなよ」

「違う違う。もっと良く見なさいよ!!」

「? ? ? ? ?」

上をさらに注意深く見ると鳥の頭に猫が乗っていた。

「見つけた!!」

集は嬉しさのあまり叫んだ。

「ピロ、二人を下ろしてあげて」

「ピロピロ」

ピロと言われた鳥はゆっくりと二人を地面に置き飛び去った。

「ふーで? なんの用なの、こんなところに」

「え、えっと貴方が誰とも契約していないリッタさんですよ?」

「そうだけど」

「頼む!!」

集は突然、猫に土下座をした。

「僕と契約して力をくれ!!」

「嫌よ」

バツサリとリッタは集の頼みを断った。

「な、なんで! ?」

「私は契約しないのよ、誰ともね」

「どうしてですか?」

「あんたはヒラミ族ね?」

「はい」

「あんたになら言っても良い。でも、人間はダメ」

「な、なんでだよ!!」

「落ち着いて下さい、集さん。私が説得してみます」

「あ、ああ頼む」

「じゃあ、向こうで聞かせてくれませんか? リッタさん」

「ええ、良いわよ」

スーダはリツタを連れ向こうに行ってしまった。

「じゃあ、教えてくれませんか？」

「良いわよ。あれは2年前かな。わたしもそれまでは普通に過ごして契約するのを待っていたの。もう、本当に楽しみだったわ。だって、契約した人とは一生過ごす事になる。言うなら人生のパートナーを

見つけるような物よ。あんただってそうでしょ？」

「はい」

スーダも初めてミヤと会うまで、契約を心待ちにしていたのだ。

「それで、ようやく私と契約をする人が現れたわ。嬉しかった。だって、ようやくパートナーを見つけたんだもの。でも、」

「でも？」

さっきまで嬉しそうに話していたリツタの顔が変わった。

「でも、その人は死んだ。契約する日にね。次の契約者も死んだ。最初は偶然かと思った。でも、3人目も死んだとなるともう耐えられなかった。私と契約する人は皆死ぬ。

だから、私はこの洞窟にすんでいるの」

「だからリツタさんは誰とも契約を」

「ええ。それから、私はトラウマが出来て契約が出来なくなった。それで、人に会わない為にこの洞窟で生活しているのよ」

「そ、そんな事があったなんて」

「だから私は契約しない。あいつにもそう言っておいて」

「やっぱり契約はしないって？」

「はい。どうしてもしたくないって」

「んゝ……だったら何をすれば良い？」

「は？ あんた何言って」

「だから、お前が望んでいる事を僕がするから。もし、出来たら契約してよ」

「ちょ、ちよっと集さん!!」

「良いじゃない。のってあげるわ」

「リッタさんも!!」

「よし、ならまずは何からだ？」

「まずは今日の晩御飯になる奴を狩って来て頂戴」

「任せろ!!!」

集は刀を持ち外へといった。

果たして集は契約できるのだろうか？
タイムリミット

制限時間まで、後2週間

第20話 契約しない理由（後書き）

こんばんわ〜ケンです。

如何でしたか？それでは！！！！

「取ってきたぞ!!! リッタ!!!」

「はい、じゃあ次」

「よし、任せろ!!!」

あれから集はリッタに言われた事を全てこなしていた。

例えば、昆虫が食べたいから100匹狩って来いと言われれば

100匹ちょうど狩ってき、猪が食べたいという事で

親玉を10匹狩って来いと言われれば狩って来ていた。

そして、リッタが一番驚いたのは徐々にその個体を狩る速さが

驚く程早くなってきた事だった。

初日はあれだけ苦戦していた、昆虫にも魔法を使わずに刀だけで

100匹を狩ったり、レンガルラを10匹狩るのにもそう時間はか

からなくなっていた。

こんな生活を5日程続けていた。

スーダ達は先に村へと帰っていった。

「取ってきたぞ!!! リッタ!!!」

「そ、そう。今夜はもう良いわ」

「オッケ」

「食べたらず?こんなに私食べきれないし」

リッタの目の前には大量の食材が出されていた。

「よし!!! 頂きます!!!」

集はよっぽどお腹が空いていたのか流し込むように食べていった。

「そんな食べ方したら喉詰まらせるわよ」

「んぐ!!!」

「ほら、言わんこっちゃない。はい、水」

「ん! ごっくん!!! ぷは〜生き返った〜」

「ねえ」

「ん？なんだ？」

「どうして、貴方はそこまでするの？」

「だって、リッタの望む事をして契約してもらうためだよ」

「ふざけんじゃないわよ！！！」

リッタは大声を出し今まで我慢していた感情を吐露した。

「リッタ？」

「あんたにさせてるのは雑用なのよ！！私の望む事をしてくれれば契約するって誰が言ったのよ！！」

「リッタ……」

「私は契約はしないのよ」

「はゝほら」

「え、ちょー！！」

集はリッタを頭の上に乗せた。

「僕は君が望む事はなんでもする。もし、それで契約してくれなくても僕はずっとし続ける」

「どうしてよ」

「どうしてかな？…僕にも分かんないや」

「ぷふ！！なんなのよそれ」

「さあ？」

二人はお互いに笑い始めた。

あれだけ静かだった洞窟が笑い声で満たされていた。

しかし、その雰囲気は何者かによりつぶされた。

「キシヤアアアア！！！」

「！！！！！！」

何かの叫び声が聞こえ二人は上を向くとカマキリの様な昆虫が壁を破壊してこちらに迫っていた。

さらに壊された穴から生体の子供であろう小さなカマキリが無数に飛んできた。

「う、嘘！！この場所もだめじゃない！！」

「ひとまず、どうする？」

「逃げるのよ！！あれだけの数じゃ無理よ！！」

リッタは集の頭から降り逃げようと走っていくが
集は動こうとしなかった。

「何やってるのよ！？あんた！！さっさと逃げるわよ！！」

「大丈夫だよ、リッタ。僕がついてるから」

「集」

「昔の君に何があったのかは知らないし知る気もない。

でも、これだけは言える。僕は君を悲しませないし

裏切りもしない」

「！！！！！！」

「だから、僕と契約してくれませんか？リッタさん」

集に無数のカマキリの子供が襲いかかろうとした瞬間、

一匹の猫が集に走っていくのが見えた。

そして、光が辺りを包みだしカマキリの子供を吹き飛ばした。

「キシヤアアアアアア！！！！」

親が子を殺された事に怒ったのか二つの鋭い刃を

集に振りかざしたが、それを当たる事はなく空を切り裂いた。

『鬼さんこちら、手の鳴るほうへ』

その言葉が聞こえた瞬間、親は真っ二つに切り裂かれた。

『獣人化の特徴はその速さ。刀と合わせて使えば相手は切られた事にすら

気付かずに死に至る』

そこには白い髪が腰に届くくらいにまで伸びた集の姿があった。

「遅いなく集さん」

スーダは洞窟の入り口で待っているが集が出てくる気配は一向にし

なかった。

「にゃーもうすぐ来るにゃー」

「なんで分かるの？ミヤ」

「猫の勘だにゃーほら、噂をすればにゃー」

「あ、ほんとだ」

洞窟から白い刀を持ち、頭にリッタを乗せた集が出てきた。

「お帰りなさい！！集さん！！」

「ああ、ただいま。スーダ、心配掛けてごめんね？」

「あれ？」

「じゃあ、村に帰ろうか？」

「あ、はい」

「集さん、なんだか雰囲気変わったかな？」

スーダはそう思いながらもそれを頭の端に追いやり村へと戻っていた。

村に帰ると集は村の皆に驚かれた。

なんせ、無事では帰ってこれないと言われた場所から帰ってきたのである。

驚くのも無理はない。

そのまま、集は村長の所に向かった。

「村長」

「おやおや、帰って来たかね」

「はい。ご心配をおかけしてすみません」

「ふおっふおっふおっふお。良きさ、別に。それで、

頭の猫を見る限り契約は出来たんだね？」

「はい」

「そうかい。なら行っておいで。今ならまだ間に合うよ」

「村長……ありがとうございます!!」

集は一礼してから小屋を出た。

「あの子はお前さんの子なのかい? イーリ」

村長がその名を呟いた事は誰も知らない。

「今までありがとう。スーダ」

「もう行っちゃうんですか? 集さん」

スーダは涙目で集にしがみついた。

「嫌です!! 集さんもこの村で住みましょうよ!!」

「それは嬉しいけど僕は助けに行かないといけない人がいるから」

集は優しくスーダの頭を撫でた。

「集さん…約束して下さい。また、ここに遊びに来るって」

「ああ、約束だ!!」

「はい!!」

二人は笑顔で握手をかわしてお互い戻るべき場所へと向かった。

「にしても、まさか私が人間と契約するなんてね」

「そういえばミラ族はヒラミとしか契約しないんだっけ?」

「まあ、ヒラミとしかしない訳ではないんだけどね」

「じゃ、良いだろ。とばすからつかまってる!!」

「了解」

集は氷の翼を生やし空へと飛びあがった。

一方その頃、ランカー達はある場所に集められていた。

「いやゝ皆様、集まっていただいて感謝します」

マグナが頭を下げながらお礼を言った。

「それで、俺たちに何をさせようってんだ？」

レイが急かすようにマグナに聞いた。

「貴方達には警備を頼みたいのです」

「はあ？警備？そんなもんいらねえだろ。お前んとこのボディーガードで十分だろ」

「いえいえ、レイさん。確かに家の方でも警備はしますが念の為です。僕たちの結婚式を邪魔させないようにね」

マグナは隣にいたゆえの腰に手を置き自分に引き寄せた。

それに対しゆえは一瞬、嫌そうな顔をしたがそれを無理やり押し込めた。

「ああ、そういう訳で皆、警備をしてくれんか？」

「まあ、ゆえが言うなら私達は良いよ。ね？」

「え、ええ」

「…」

「私は良いよ」

ルーラが後ろにいたライカ、フォレス、ラナに確認すると3人とも首を縦に振った。

「そうですか。それは良かった。お礼は弾みま…！！！！！！」

「「「「！！！！！！」」」」

全員が何者かの魔力を感じていた。

「な、何だこの魔力は！？」

「少し変わった魔力ですね」

「…魔力量…私達…変わらない」

「ようやく、見つけた」

「「「「！！！！！！！！！！」」」」

全員が上を向くと上から集が降りてきた。

「しゅ、集なのか？」

ゆえは集の変わり様に驚いていた。

前は短かった髪の毛が目にかかるくらいにまで伸び、そして一番驚いたのはその魔力の量だった。

以前からすると数10倍の量はある。

「久しぶりだな、ゆえ。えっと、1週間ぶりくらいか？」

「また、貴方ですか。如月集!!」

マグナは言葉にいらつきを含ませて言った。

「ああ、僕はゆえを返してもらうまで邪魔をするよ」
すると話していた集に向けて突然、雷が落とされた。

「ラ、ライカ!!」

「ここは私に任せて貴方達は行きなさい!!」

「お願いします。ライカさん」

ライカを除くランカーは全員、能力を使い遠くへと逃げた。

「あ、逃げられた」

集も翼を生成し追いかけようとするが再び、雷が落とされ向かう事が出来なかった。

「ここから先は行かせない」

「ライカ：退いてよ」

「断るわ」

「そう・・・なら」

刀と刀がぶつかり合い火花が散った。

「力づくでも退かせる!!」

集とライカの戦いが始まった。

第21話

Could you please contact with

こんばんわ、ケンです!!

期末テストも終わりホッとしたのも束の間、今度は学校が耐震補強工事とか言って別の教室に移動。
そんな事はさておき、如何でしたか？

第22話 集VSライカ

「ここなら戦いやすいかな？」

集は先程の崖に囲まれた狭い場所で戦うよりも、

広い場所で戦う事を選び、広い草地に降り立った。

「あら、ここでもいいの？さっきの場所みたいに壁があった方が良くないの？」

「壁があつたら逆に戦いづらいし」

「そう……なら後悔させてあげる。さっきの場所で戦えばよかったってね！！！」

二人の近くに落雷が落ちた。

「私はランク5位のライカ・サイト！！貴方を黒焦げにしてあげる！！！」

「だったら僕は凍りづけだ」

お互いに刀に魔力を流し込み、戦いが始まった。

「まずは小手調べね」

「そら！！！」

ライカは刀を軽く振ると雷が斬撃として放たれた。

「遅いよ」

集は刀で弾こうとせず最小限の動きで斬撃を避けた。

「やるじゃない！！ならこれはどう！？」

もう一度、斬撃を放つと今度は、分裂していき

3つから4つ、4つから5つと数は何倍にも膨れ上がった。

「これはやばいね」

集は避けきれないと判断し、翼を生成し後ろに下がり避けた。

「こんなもんか」

「な訳ないでしょうが！！」

ライカは地面に放電すると刀に砂鉄が引きつけられた。

「この蹉跌はね毎秒、何万回も往復してるの。だから、当たったら少し切れるかもね!!」

「少しじゃなくてザックリね」

集はつつこみながら蹉跌の剣をかわしていく。

かわした蹉跌の剣が地面に掠るとその部分だけ、地面が抉れた。

「やるじゃないの。なら、これはどう!？」

ライカが刀を振ると砂鉄が集に向かった伸びていった。

「さしずめ伸びる剣か」

集はその場から動こうとしなかった。

「なによ!? 避ける気なしなの!？」

蹉跌の剣が集の刀とぶつかり火花が散った。

「むむ」

「無駄よ!! 例え先を止めても蹉跌は無限に加えられる!!」

だから、長さも太さも不定なのよ!!」

ライカが電磁波を地面に送ると大量の砂鉄が刀に付着し

さらに太さ、長さが倍増し、枝分かれするように砂鉄が分かれ集に

襲いかかった

「終わりよ!!!」

「終わらないよ? ゆえを助けるまでは」

集がそう言った途端に砂鉄が凍り始めた。

「な! くそ! !!」

自分に向かってくる氷を慌てて砂鉄を刀から切り離し回避した。

「おいしい、もう少しだったのに」

「なんなのよ!!! この強さは!!! 前のあいつは弱かったのに、この1週間何があったのよ!？」

「じゃあ、そろそろ終わりにしよう」

「は?」

「リッタ」

「ふにゃ〜呼んだ？」

集の服の中からリッタが出てきた。

どうやら服の中で昼寝をしていたみたいである。

その証拠に毛が若干はねていた。

「あんたふざけてるの？戦場に猫なんか連れて」

「ふざけていない。彼女も立派な僕の相棒だよ」
パートナー

「あっそ。だったらその猫と一緒に仲良く死ね！！」

ライカが手を上げながら魔法呪文を吐くと

晴れ渡っていた空が雲に覆われ始めた。

「雷は全てを灰にする、その力を我に付与せよ！！」

アマルブラス
雷神の腕！！！！」

ライカの腕に落雷が落ちたかと思うとその雷は腕を基盤とし
巨大な雷を纏った腕を形成した。

「デカイな」

「そうね〜」

集とリッタは呑気に大きさに驚いていた。

その様子にライカの堪忍袋の緒が切れた。

「いい加減にしなさいよ！！あんた、分かってるの！？」

今は殺し合いをしてるのよ！？そんなんであいつを助けれると思っ
てるの！？」

「殺しあい？違うな」

「なんですって！？」

「僕たちがしてるのは殺し合いじゃない。ただのじゃれあいだよ」

「ふざけるなあああああああ！！！！！！」

ライカはその雷の腕を集にめがけて振り下ろした。

その速度は雷と同じ速さであり、ライカと対峙して

これを避けたものはランカー以外いと言われており

威力も高く、殴った地面は小隕石が落ちたかのようなクレータが出
来た。

「はあ、はあ、はあ。これで」

『終わりじゃないよ』

「!!!!!!」

後ろから声が聞こえ慌てて振り向くとそこには、
白い髪を腰にまで伸ばした集がいた。

「な、なんなのよ!?! その姿は!!!!なんで生きてるのよ!?!」

『こんな所で死ねないからかな』

ライカは慌てて刀を抜こうとしたがそれをさせる前に

集はライカに近づき首筋に刀を当てた。

「!!!!!!」

『終わりだ、ライカ』

「……分かったわよ」

ライカは抜こうとしていた刀から手を離し降参した。

「強くなったのね、集」

集が光に包みこまれ元の姿に戻った。

「当たり前だ。僕はゆえを助けるからな」

「いいな、強くて」

「何言ってるんだよ、ライカだって」

「強くなかないよ。だって友達一人救いだせないんだよ?」

ライカは涙を流していた。

「本当は私だってゆえを救いだしたい、救いだしたいけど

あいつは強いのだよ!!!! マグナに太刀打ちできるのはアークだけなの
よ!!!!」

「どういう意味だよ」

「マグナは第2位なのよ」

「そうか……じゃ、行くわ」

集は翼を生成し飛び立とうとしていた。

「ちよっと、どこに行くのよ!?!」

「どこってあいつらの所に」

「無理だって言ってるでしょ!! あいつは2位なのよ!?

ランカーでもないあんたが太刀打ちできる奴じゃないのよ!!

あんただって知ってるでしょ!?! 上位3人は別格だって言われてるのよ!?!」

「だから?」

「だからって、あんたみすみす死に行くようなものなのよ!?! それを分かって言ってるの!?!」

「僕はゆえを助ける。その目的に変わりはない」

「でも!! そうだとしても、あんたは無事じゃすまないのよ!?! あいつと闘って生きて帰ってこれるかも分からないのよ!?!」

「それでも行くさ。たとえ犬死でも僕は行く」

ライカは集の真剣なまなざしを見て、何も反論できなかった。

「……………分かったわよ。でも、今のあんたじゃ死ぬのは目に見えてる」

「はっきりと言われるのは辛いな」

集はライカにストレートに言われ、苦笑いをしながら言った。

「ねえ、知ってる? 魔法を使う者同士での戦闘方法を」

「魔法を使うか、武器を使うかじゃないの?」

「大まかはあるわ。でも、それじゃあ、餓鬼がチャンバラしてるのと同じ」

「他にもあるの?」

「ええ。習得できるものはそういない。ランカーは全員、それを習得している」

「それは?」

「その戦闘方法の名はバースト」

タイムリミット

制限時間まで、後1週間。

第22話 集VSライカ（後書き）

こんにちわ、ケンです!!

如何でしたか？

それでは、さようなら。

第23話 最高戦闘術、バースト

集はあれから、ライカと共に一度学校に戻り、バーストについて聞いていた。

ちなみに、何故かライカの服は科学者などがよく着る白衣である。

「まず、バーストというのは私達の最高戦闘術よ。昔、戦いが頻発していた

そこで戦いを終わらせる為に魔力が多い者、すなわち今の貴族の先祖に当たる

奴らが開発したものよ。教師のほとんどはバーストを習得しているわ」

「じゃあ、フィーリ先生も？」

「恐らくね。まだ見たこと無いけど」

ライカによると教師のバーストはまだ見たことが無いらしい。

大抵は普通に魔法で倒すらしい。

「それで、その習得方法は？」

「さあ？」

「は？」

ライカの返答に思わず口を開けてしまった。

「正確に言えば人それぞれなのよね」

「つまり、決まった習得方法は無いのか？」

「ええ、ちなみに私は戦ってたら習得したわ」

「そんな簡単に？」

「そう。まあ、相手は龍だったけどね」

「まじかよ」

「ま、頑張んなさい」

「え？どこ行くんだよ」

「帰るのよ。いくら私でもバーストは教えられないしね」

そう言い残しライカは白衣を脱ぎ棄ててどこかに行ってしまった。

「どうすりゃいいんだか」

「悩んでいるようだな、集君」

「り、理事長！！！」

突然、後ろから声が聞こえたかと思うと後ろに理事長が聞こえた。その容姿は若干大きめの服を着てズボンの裾が地面についてるんじゃないのかと

思うくらいダボダボしていた。

「い、いつからここに」

「君たちがここに来る前からだが」

（小さくて見えなかった）

集は足の脛を思いつき蹴られた。

「んぎゃああ！！！！」

「小さくて悪かったのう」

「勝手に心の中を読まないで下さい」

「そんな事よりもバーストが必要なのかい？」

「はい」

「どうして？」

「ゆえを助ける為です」

「詳しく聞かせたまえ」

集はゆえの結婚の事を詳しく理事長に説明した。

「そうか：ちょうどいい機会だ。教えておいてやろう」
「何をですか？」

「ギルス家はある犯罪を犯している」

「犯罪を？」

「ああ。奴の父はこの国では栽培禁止の植物を栽培している」
「植物ですか？」

「ああ、マジックフラワーという物を知ってるかい？」

「聞いたことがあります。確かその花は魔力の潜在値を高める効果があるんですね？」

マジックフラワーはそのままでは意味を成さないが、花びらを収穫し氷結させた後にすり潰し

水に薄めて飲むと魔力の潜在量を無理やり高める効果があるいわば麻薬の様なものだが同様に強い依存性があり一回飲めば、一生、依存症になる危険なものである。

この花は繁殖力が強く、またどの国、地域でも咲く為此れを巡り争いが広がっている。

「それを奴は栽培し裏ルートで莫大な利益を得ている。

マグナが強いのもその影響だろう」

「分かっているなら手を打てば」

「そうだが、奴は貴族の中でもかなり上位層にいる為に国も手が出せんのだ」

「そんな……」

「だが、君が奴を倒せばこちらは彼を治療としてこちらに閉じ込める事が出来る。そこで、証拠を提示すればこっちのものだ。頼める」

理事長が最後まで言うのを待たずに集は机にかかと落としを決めた。

「さつきから、聞いていればゴチャゴチャとうっせえな。

俺はあんたがして欲しい理由で奴を倒すんじゃない。

ゆえを取り戻す為に戦うんだ!!」

「ふふふ、そうだったな。すまない、この話は忘れてくれ。

続きを話そう。バーストの習得方法はある」

「ないんじゃないのか？」

「ある事にはある。だがこの方法でバーストを習得した者はいない。それでも、やるのか？」

「上等だ!! やってやる」

「良いだろう。ついてきなさい」

理事長に連れられ集が着た場所はとある部屋だった。

「この部屋は？」

「普段は使用禁止の部屋で、あるべき時にのみ使用が解禁される」
「あるべき時って」

「さあな？そう言われているだけだ。ドアを開け部屋に入れば
それがある時だ。さ、開けてみる」

集は理事長に言われるがままにドアノブに手を置き

ノブを回すとドアが開き集は中に吸い込まれるように消え去った。

「…これで二人目か。私に続き、一回でドアを開けた者は」

理事長はそう呟き、理事長室へと戻っていった。

「うわああああああ！！！！」

目の前が突然、白く光ったかと思うと集はまっ逆さに落ちていた。
そこは何も見えずあるのは闇、ただそれだけだった。

「どうすれば！！」

『落ち着きなさい』

「！！！！」

頭の中に声が響いてきた。

『何もしなければ辿り着く』

言われたとおり集は落ち着くと徐々に落下スピードが
落ちていき最終的に地面に降り立った。

「ここは…」

周りを見渡すがそこには何もなく真っ暗だった。

『ここは、貴方の精神世界』

声が響くと突然、景色が変わり草地に変わった。

「おお！！すごい！」

『久しぶりね』

そこには集と同じ白い髪を腰まで伸ばし、上下とも
白い服を着た女性がいた。

「貴方は……この前の」

『そう。あの時は顔を隠してたのによく分かったわね』

「なんというか雰囲気で」

『ま、良いわ。ここに来たという事は貴方、バーストを習得に来たのね?』

「ああ。それよりもここはなんなんだ?」

『そこから説明するわ。貴方が通ったドアはあるべき時にしか入る事が出来ない』

部屋の入口よ。そして、貴方のあるべき時が今っていう訳』

「そうなのか……さっさと始めようぜ」

『落ち着きなさいよ。言い忘れてたけどこの空間は外界とは切り離された空間。それゆえに時間の流れる速さが違う。』

ここでの1日は外界では1分にも満たないわ』

「つまり、じっくり習得できる訳か」

『そういう事。じゃ、始めましょうか』

「ま、待ってくれ!まだ、やり方を聞いてないぞ!」

『やり方は簡単よ。私を倒すこと』

「確かに簡単だな。リッタ!!!」

リッタを呼んだつもりだがいつまで経っても出てこなかった。

『無駄よ。この空間に入れるのは貴方のみ。リッタとかいう猫は今頃、外界で寝てるわよ』

女性の言うとおりのリッタは理事長室でぐっすりと寝ていた。

『始めるわよ』

「ああ!」

集は刀を抜き女性に切りかかった。

『遅すぎるわよ』

女性はそう言うと2本の指で挟んで刀を止めた。

「な!」

『こんな物いらないわよ』

女性はその刀を掴むと集から取り上げどこかへ飛ばしてしまった。

「くそ!!」

集は一度、距離を取り彼女を観察した。

「刀を指で止めるとか人外すぎるだろ」

『なに? こんな物なの? 貴方の力は』

「そんな訳ない!!」

集は翼を生成し向かって行った。

その頃、ゆえはマグナの家で暮らしていた。

どの道結婚してこの家に住んだから、もう住んだ方がいいと
マグナに言われ半強制的にこっちにこさされた。

ゆえには部屋が一つ与えられそこで暮らしていた。

「後、5日か」

「そうですね、ゆえさん」

「入る時はノックをしろ。マグナ・ギルス」

「ですから、マグナって呼んでくださいよ」

「結婚したらな」

「約束ですよ?」

マグナは子供みたいに笑った。

「楽しみですねぇ結婚式。やっとゆえさんと出来ますよ」

「何故、私と結婚などする」

ゆえは以前から疑問に思ってた事をマグナに聞いた。

「そんなの簡単じゃないですか」

……我がギルス家のさらなる発展の為だ」

先程の笑顔は消え失せマグナの顔は怖いものになっていた。

「やはりか」

「別に誰とでも良かったが貴様の父親は政府とも強いパイプがある。
それを使いギルス家をさらに、発展させる」

「そうか……」

「今日は早く寝て下さいね、風邪をひかれても困るので。じゃ、御

休みなさい」

マグナは部屋の鍵を外からかけた。

「この部屋は婚約者を住まわせるというより逃げないように閉じ込める牢屋だな」

ゆえの言うとおり、

窓はあるが開けられないようになっており、鍵も先程の様に内側から閉めるものではなく、外側から閉めるものだった。

さらに、食事は毎回、部屋にまで届けられそこで食べていた。

「……集にはもう会えないのだろうか」

ゆえは集の事を思わなかった日は無かった。

「会えないだろうな……私がこの手で殺したのだから」

タイムリミット

制限時間まで残り5日。

第23話 最高戦闘術、バースト（後書き）

こんばんわ！ケンです！！

如何でしたか？

徐々にお気に入り登録が増えてきたーーーー！！！！！！

これからも頑張っていきます！！

それでは！！

第24話 精神世界

翌日に結婚式を控えマグナの家はごった返していた。

ウェディングプランナーが何人も来て、綿密に式の内容を話し合っていた。

そして、招待客の確認や出される食事の下準備などで忙しく走り回っていた。

「ゆえさくん」

マグナはニタニタとにやけながらゆえの部屋に入っていた。

「ノックをしろと言っているだろう」

「良いじゃないですか！ どうせ、明日には夫婦になるんですし」

「それでも、人間としての最低限のマナーぐらいは守れ」

「はいはい」

すると、部屋のドアがノックされた。

「誰だ」

マグナがそう尋ねると召使が部屋に入ってきた。

「失礼致します。ドラス様がお戻りになられたのでご報告に」

「おお！ やっと父さんが帰って来たのか！！ ゆえさん、待っててね。すぐにこっちに呼んでくるから」

マグナは嬉しそうに父親のもとに向かって行った。

その後、マグナの父で政府の高級官僚でもあるドラス・マグナが入ってきた。

その容姿は金髪でスーツをしっかりと着こなしており恰幅の良い男性だった。

「君が今度、家にくる子かい？」

「はい。始めまして。ゆえと申します」

「ほう。本当に平民の子かい？ マグナ」

「そうだよ。僕と同じランカーでもあるんだ!!」

「そうか、それは明日が楽しみだな」

「うん!!…それでお父さん、あれ頂戴」

「ああ、そうだったな。その時間か」

ドラスは胸ポケットから粉末が入った小瓶を出した。

「そ、それは!!!!」

ゆえはその小瓶の中の粉末を見て顔を青ざめた。

「おや、知ってるのかい？」

「それは全世界で禁止されている麻薬花のマジックフラワーでしょう!!」

「なんで、それを貴方が!？」

「麻薬花? 違う!! これは最高の花だ!!」
「!!!!!!」

先程までの優しそうな顔を一変させドラスはゆえに叫び出した。

「この花を使えば強大な力が入る!! これを欲しがっている奴らは

世界に五万という!! そんな夢の様な花を禁止する世界が狂っているんだよ!!」

君も分かるだろう? 力が無い者はどのような手を使ってでも力を欲するのだよ!!」

「じゃあ、マグナがあそこまで強いのは!!」

「そうだ。マグナには幼少のころから飲ませている。この子は昔から魔力の潜在量が人よりも遥かに少なかった。そんな子はギルス家にいないのさ」

ドラスはカップに粉末を入れお湯を入れると辺りに甘ったるい匂いが漂ってきた。

「さあ、飲みなさい。ギルス」

「うん!!」

ギルスは待ってましたと言わんばかりにカップを受け取り

飲み干すと魔力が増大していった。

「はぁぁゝ最高だ!! この魔力が増える感覚。何度飲んでもこの感覚には飽きない」

マグナは口から涎が垂れているのも気にも留めずに笑った。

「く、狂っている」

ゆえはその光景に絶句していた。

「くくく、何を言ってるんだい? ゆえさん。狂っているのは貴方達世界の方でしょう!! こんな夢の様なものを禁止するなんて考えられませんよ」

「それを1回でも飲めば人間の道は外れ、それに支配される人生を送るのだぞ!!!」

それに依存性だって強いと聞く!! 何でそんな物に頼るんだ!! マグナ・ギルス!!」

「うるさいよ!!」

「ぐう!!」

ギルスはゆえの腹部を蹴り飛ばした。

「お前に何が分かる!! 魔力が少ない僕は周りから苛められ蔑まれてきた!! 最初から強かった君たちに何が分かる!!」

マグナは叫びながら何度もゆえを蹴り続けた。

「ごほ! ごほ!」

「はぁ、はぁ、はぁ。まあ良い。明日の式で貴様にも味あわせてやるさ。」

この花の快感をな」

マグナは満足したのかそのままゆえをほったらかしにして、ドラスと共に部屋から出て行った。

「集…助けて、集」

ゆえは涙を流しながら少年の名を口ずさんだ。

「! ! ! ! !」

一方その頃、精神世界で戦っていた集は何かと呼ばれた気がして後ろを振り向いた。

『どうかしたの？』

「いや、誰かに呼ばれたような気がして」

『空耳でしょ。この空間には貴方と私以外の声は決して届かない』

「そうか：ここにきて何日目なんだ？」

『この時間軸で言えば1か月だけど向こうで言えば6日ぐらいね』

「う、嘘だろ！？」

『嘘じゃないわ。このペースで行けばまあ、間に合わないわね』

「休憩はもういらない！！続きをするぞ！！」

『まだ気づかないのね…』

「何か言ったか？」

『いえ、やりましょうか』

二人はもう何度目かも分からない闘いを始めた。

翌日、結婚式当日の今日は郊外にある式場にたくさん、来賓が来ていた。

政府の高級官僚やギルス家と親交のある貴族、そしてランカーが全員招待されていた。

「ん！！これ、美味しいよ！！皆も食べなよ！！」

「どれどれ？：うん、美味しい！！」

ルーラはお皿とフォークを片手に食材を食べまくっていた。レイもルーラがおいしいと言った物は全部、食べていた。

「あんた達よく、そんなに食べれるわね」

ライカは呆れたように二人を見た。

ライカや、ルーラそれにラナの今の服装はいつもの私服ではなく学校の制服を着ていた。

「ふあふあふえふいふあふえ!!」(ライカも食べなよ!!美味しいよ!!)」

ルーラは口いっぱいにほうばりながら喋った。

「食べるか話すかどっちにしては如何です?レディーがそんな、はしたない事をしてはいけませんよ」

ライトも制服を着こなしていた。

「ねえ、ライト。あんたどう思う?」

「そうですね。先ほどから甘ったるい匂いがしてたまりませんね」
「じゃあ、やっぱり」

「まだ、証拠はつかめていません。食材の匂いだと言われればそれ以上は踏み込めません」

実はライトとライカは子この結婚式に疑問を持ち
独自に調査をしていると不可解な点が何個も浮上した。

「周りにいる来賓もそうだけど、全員が
ギルス家の傘下にいる者しかない」

「ええ、普通、貴族の結婚式なら女王様も来られるのに
今日は来ていない」

「何かあるんでしょうね」
すると突然、明かりが落ちた。

「皆様、本日はお忙しいところご出席いただき誠にありがとうございます。
います。」

私は本日、司会を務めさせていただくフリル・イツと申します。
それでは、今日の主役に登場してもらいましょ!!」

一応、補足しておくところの世界での結婚式という物は
現実とは異なり、まずは新郎が来賓に挨拶をし

その後、神々に二人を会わせてくれたのに感謝を込めて
祈りを捧げ、そして最後に新婦が登場し新郎のいる場所まで
歩き、辿り着いた後、神父による誓いを立て、最後は誓いのキスと

なる。

「皆様、今日は忙しい中僕たちの結婚式に出席してもらいありがとうございます」

それから、ダラダラと偽りの馴れ初めを語りだした。

「それでは、登場してもらいましょう。今日、僕の伴侶になる女性に――！」

ドアにライトがアップされ、出てきたのはウェディングドレスを着たゆえがゆつくりと歩いてきた。

「ゆえ……」

ライカは自分の弱さを憎んだ。

友達すら救えない自分を。

そして、ゆえがマグナの手を取ろうとした瞬間……

「な！」

「き、消えた!？」

突如、ゆえの姿が消え会場は騒がしくなり始めた。

「お、落ち着いてください!!」

視界が場を鎮めようとした瞬間、窓ガラスが割れる音がした。

「あそこか!!!!」

マグナが割れた音の方へ走りだすと

それを来賓達も後ろから追いかけた。

「どこだ!？」

マグナは外に出て周りを見渡すが誰もいなかった。

「あ、あそこだ!!」

来賓の一人が声を上げ指をさした方向に全員の視線がそちらを向い

た。

「お、お前は!!」

見上げた視線の先には式場の屋根に一人の白い髪をし刀を一本携え上下とも真っ白な服を着た少年がいた。

「中々の見晴らしだな、リツタ」

「そうね。下で虫どもがぎゃあ、ぎゃあ騒いでいるのが残念だけど」
「何でここに来たんだ!! 集!!」

その少年の名は如月集。

「助けに来たよ。ゆえ」

第24話 精神世界（後書き）

おはようございます！！

ケンです！！如何でしたか？

今年ももうすぐ終わりますね～
それでは、行ってきます。

第24・5話 それはまるで母親の様

精神世界で戦っていた時のこと。

「はあ、はあ、はあ」

『この程度なの？ 貴方の力は』

集の体は所々氷結している部分があり切り傷も多く出血の量も多かった。

『こんな弱い奴が私の氷を受け継いだものだなんて』

「あ、あんたも氷の魔法を使っていたのか？」

『ええ。私はいうなら初代の氷の魔法使いよ』

「初代だと」

『そう。そんな事は今となってはどうでも良いわ。立ちなさい。

バーストを習得するんでしょ？』

集は立とうとするが力が入らず崩れ落ちてしまった。

「あ……ぐ」

『呆れた。ここまで弱いなんてね』

女性は踵を返した。

「どこに行くんだよ!？」

『帰るのよ。これ以上貴方とやっても時間の無駄。貴方には習得出来ない』

『こんな所で諦めていいのか!？ ゆえを助けるにはバーストが必要なの!！』

……嫌だ!！ 俺はもう大切な物を失いたくない!！』

『まだ、立つの?』

「ああ、こんな所で諦める事は出来ない!！」

死んでもバーストは習得するんだ!！」

集は翼を生成し女性に特攻していった。

「うおあああああああ!！!！!！!」

『……集』

「！！！！！」

自分の名を突然呼ばれ集は驚くがそのまま突撃していった。

『死んでもなんて絶対に言わないで』

その顔はまるで我が息子を心配している母性に満ち溢れた母親の様な顔だった。

「な、なんであんた避けなかったんだ」

集の攻撃を避けようともせずにもろに喰らっていた。

しかし、女性の顔には痛みに顔をゆがめる事はなくただ単に微笑みながら集を抱きしめていた。まるで、子供をあやすように。それに加え集は何故か心が落ち着いていくような安心感を感じていた。

『良く聞いて、集。力を手に入れようとする事、事態は何も言わない。』

でも、自分の命だけは絶対にかけないで。貴方が傷ついて悲しむ人が傍にいるのを忘れないで』

「あ、ああ」

『信じているわ集。今の貴方は戦いを通じて

バーストと氷の魔法をほぼ習得したわ』

「……あまり実感がない」

『そうね……貴方は私と似て感覚で覚えるから実感湧かないわね』

「え？今なんて」

『行きなさい、集。その力で大切な人を助けてきなさい』

女性は集に魔法をかけ自身と同じ真っ白な服を着せた。

「この服は」

女性はそっと集を元の世界へと通じる入り口へと押した。

「まだ、あんたに聞きたい事が……！」

集が女性に手を伸ばそうとした瞬間にドアが閉まり目の前が暗くな

った。

「あら、帰ってきたの」

「リッタ」

気づくと集はドアの前に立っていた。

目の前には頭の上にリッタを乗せた理事長がいた。

「やあ、お帰り。意外と速かったんだね」

「僕が入ってから何日経ちましたか？」

「そうだね。今日は式当日だと言えればいいかな」

「そうですか：リッタ」

「にゃ」

リッタは理事長の頭から集の肩に乗り換えた。

「集君。桜さんの結婚は奴による無理やりな結婚だ。これが教会の場所だ」

「そうでしたか：ありがとうございます。それと：行ってきます」

「ああ、行って来い」

集は翼を出し窓から飛び降り飛んでいった。

「雰囲気がいぶ落ち着いたな。初めて見たときはまだ、子供っぽさが

残っているように感じたが今は、だいぶマシになった」

理事長はそう呟き自室へと帰っていった。

「にしてもやっぱり貴方の頭の上が一番落ち着くわ」

「そうか、ありがと」

集は空を飛びながら向かっていると理事長に教えられた教会の場所についた。

良く見てみるとゆえが歩いているのが見えた。

「あそこか」

「そうみたいね……行きましようか」

「ああ、ゆえの奪還の始まりだ」

ここから如月集の戦いが始まる。

第24・5話 それはまるで母親の様（後書き）

こんばんわ、ケンです。

なんで学校が24日まであるのかが今でも納得のいかない
今日この頃です。如何でしたか？

お気に入り登録件数も上がったり下がったり、
気持も上がったり下がったり。

いつそのことドカンと増えないかな

そんな事はありませんがね。

それでは、今日はこの辺で。

第25話 戦いの始まり

「なんでここに來たんだ!？」

「そりゃ、君を助ける為だよ」

「ふざけるな!!」

「????」

「私がいつ、貴様に助けを求めた!？ 貴様の助けなどいらんのだ！
私は奴と結婚する!!」

「それが脅されて愛してもいない奴とでもか？」

「な、何故それを」

「理事長が調べてくれたんだ。なんで教えてくれなかったの？」
「……」

ゆえは言えなかった。

集に教える事で彼に危害が及ぶのを恐れた事を
恥ずかしさから言えなかった。

「ま、いいや。…顔、怪我してる」

「え？」

集はゆえの頬にやさしく手を置くと氷の魔法を使い
腫れている部分を冷やした。

「あいつにでも殴られた？ 怖かったよね？ 辛かったよね？ もう、大
丈夫だよ」

集はゆえを優しく抱き締めた。

「しゅ、集!!」

ゆえは顔を赤くし押し返そうとしたが思いのほか強く
抱きしめられていた為、押し返せなかった。

集の体は男性らしく筋肉が程良く着いた逞しいものになっていた。

「君は………僕が護る」

「!!!!!!!!!!!!!!」

ゆえはその言葉を聞き一気に顔を赤くし俯いた。

「助けてって君が言ったら僕は何か何でも君を護る」
そう言い残し集は下に降りていった。

顔を赤くし俯いたゆえを残して。

「貴様、よくも邪魔をしてくれたな!!!」

「邪魔しない方がおかしい」

「お前たちやr」

マグナが警備に集を殺すように命令しようとした時、空から落雷が落ちてきた。

「な!」

「うおらああああああ!!!」

ライカが魔法を発動し警備の者に落雷をぶつけていた。

「「ぐわああああああ!!!」」

「よくも!!!」

警備員の一人がライカに銃を撃とうとした時、
チェーンが銃を貫き使い物にならなかった。

「やらせねえよ。バゝカ」

レイがチェーンで警備員を何人も束縛していた。

「ひい!」

逃げようとする者もいたが突然、地面に引きずり込まれていった。

「な、何だこれは!? 地面が黒く!!!」

「逃がさないよ! 全員、私が食べてあげる?」

ルーラが闇を地面に這わせ飲みこもうとしていた。

闇の魔法は全てを飲み込む。それは人間すら飲み込む。

「食べちゃダメよ。ルーラ」

ラナは呆れながら警備員を水の魔法で倒していった。

「き、貴様ら何をしている！？何故、味方を！？」

「マグナ。終わりだ、諦めろ」

「ア、アーク。貴様の仕業か！？」

「今回は俺は何もしていない。が、お前は闇に落ち過ぎた」

「な、なんの事だ！！」

アークはある物を胸ポケットから出しマグナに見せつけた。

それは、小瓶に入ったマジックフラワーの粉末だった。

「な、何故それを！？」

「これはお前の部屋から見つけたものだ。今頃、お前の父親も取り押さえられている筈だ」

「馬鹿な！？父さんは上位貴族なんだぞ！？」

そんな簡単に捕まる筈は」

「これを見てもそう言えるのか？」

アークはもう一度、ポケットに手をいれ紙を取りだすとそこには女王の名が書かれた用紙があり、取り押さえ許可状なる物があった。

「じよ、女王の名による捜査だと！？」

「そうだ。女王も既に気付かれておられる。終わりだ」

「こんなところで捕まってたまるかよ！！！！！！」

マグナは逃走を図るがそれは集によって防がれた。

「逃げる気か？マグナ・ギルス」

「き、貴様！！」

「おい、アークとか言ったな。こいつは俺にやらせろ」

「初めからそのつもりだ。奴は強いぞ。勝てるのか？」

「ああ、その為に修行してきたんだからな」

「ふん。期待している」

アークは他のランカーのもとへと向かって行った。

「場所を変えようか。マグナ・ギルス」

「良いだろう。貴様を殺し逃げのびてやる」

集とマグナは戦いやすい場所へと舞台を移した。

「ここで良いかな？」

集は翼をなおし、地面に降り立つとマグナがどこからともなく飛んできた。

集の姿はすでに獣人化を済まし髪の毛が腰の長さまでであった。

「死ぬ覚悟は出来たか？如月集！！」

「お前を倒す覚悟ならあるけどね」

「言っておくが俺は殺す奴には手加減はしない」

「勿論」

集は刀を抜き魔力を流し込むと刀が白く染まった。

「あんたは無いのか？武器」

「ああ。俺は刀の様なものは一切持っていない。

俺の体が武器だからだ！！」

マグナがそう叫ぶと体の筋肉が膨張していった。

「無機の肉体強化か」

「そうだ！！この力で俺は2位までのし上がった。

お前など視界にも入っていない！！」

マグナは足に魔力を流し込み脚力を強化させ、一步踏み出すだけで集の近くにまで移動した。

「死ね」

マグナは集の顔面に魔力を流し強化した拳をぶつけた。はずだった。

「な！」

「遅すぎない？」

集はマグナの拳を片手で全て受け止めていた。

「バ、バカな魔力で強化した俺の拳を受け止めただと！？」

マグナは驚きながらも止まることなく殴ったり蹴りをいれていった。

「はははは！！！！楽しいな」

集は笑いながら刀で蹴りや拳を刀身にぶつけ

軌道をずらしながら避けていった。

「おおおおおおお！！！！！！」

一発が集の頬を掠った。

「ちっ！」

集は一旦、距離をとるために翼を生成し離れた。

「こんなものか！？貴様の力は！？」

「そんな訳ないだろ。でも、流石は第2位。

一筋縄じゃいかねえよな」

「どうだ、諦めるか？」

「は！むしろ、気合が入ってくるよ」

「ほざけ！！貴様は殺す、必ず！！」

マグナは構えを取った。

「距離があるのに何で構えてんだ？」

「喰らえ！！」

マグナの腕が一瞬、ぶれたかと思うと集は吹き飛ばされていた。

「ぐう！！」

「今のを防ぐとわな。だが、連続で放てばどうなるかな！？」

マグナはマシンガンの様に何かを集に飛ばしていった。

「何がどうなってるんだ！？」

集は訳も分からないまま獣人化の速さでかわしていくがそれでも、掠ってしまうほどの速さだった。

「くそ！！」

「遅いのはお前の方だ」

「！！！！！！」

集の目の前にマグナの拳が見えた。

「吹き飛ばせ！！」

集は防御する暇も与えられずに殴り飛ばされた。

一方その頃、ゆえ達は警備員に手を焼いていた。

「あゝ！！もうこいつら一体何人いるのよ！？」

ライカが鬱陶しそうに吐いた。

先程から倒しても倒しても湧き出てくる水のように補充されていった。

「早く集のもとに行かないと！！」

ゆえは服を借りて戦っていた。

「ねゝもう、食べちゃっていい？」

「ダメに決まってるでしょ！！ルーラ！！」

「うゝ」ライカのいけず。体重が重い癖に

ぼそっとルーラは呟いたがライカにはよく、聞こえていた。

「な、何ですって！？誰が体重が重いですってーーーー！！！？？」

ライカの怒りに呼応するように落雷もその激しさを増していった。その威力は近くにいた味方まで巻き込みかけるほどの威力だった。

「だってそうじゃない！！この前計ったら59kgあったって言うてたじゃない！！」

「あんたとは違ってあたしにはこの大きな胸があるのよ！！知ってる？」

胸って大きいと、とっても重くなるのよ。そのせいで体重が増えてるのよ！！

ま、あんたみたいな貧乳にはこの苦しみは分からないか」

その貧乳という言葉聞いた瞬間、ルーラの周りの闇がさらに濃くなった。

「だ、誰が貧乳だって！？あんたとは違ってこれから大きくなるのよ！！」

「ほゝ。そのまな板から大きくなるかゝぷふ！！」

「もうあつたまに来了！！闇に伝わる12の柱の主よ！！」

我にその力を与えたまえ！！いでよ！！第10の柱！！The condensation of Darkness！！」

ルーラがそう唱えると地面から二つの巨大な剣を持った断罪者が現

れた。

「第10の柱は闇のルールを決める法の番人。あんたの罪は私を愚弄したこと!! 行け!!」

「ぐおおおおお!!!!」

「上等よ!! やってやろうじゃないのよ!!」

雷は全てを灰にする、その力を我に付与せよ!!

アマルブラスズ
雷神の2本の腕!!!!」

ライカの両方の腕に落雷が落ちると巨大な2本の腕を形成した。

「今のうちだ!! 捕えろ!!」

警備員とて強さはランカーと同等である。

しかし、相手にする人物を間違えた。

「あ!？」

「「!!!!」」

二人に睨まれ警備員は怖気ついてしまった。

「「私達の喧嘩を」」

「「ひい!!」」

「「邪魔してんじゃないわよ!!!!」」

雷の腕と断罪者の2本の剣が警備員を襲った。

「「「うわあああああ!!!!」」」

「うゝん。今、あそこには近づきたくないわね」

「私もだ、ラナ」

普段意見が合わないラナとゆえは珍しく意見が一致した。

すると、向こうの方から爆発音が鳴り響いた。

「集!!!!」

ゆえは心配そうにそちらを見た。

第25話 戦いの始まり（後書き）

おはようございます。ケンです。

如何でしたか？

それでは今日はこの辺で。

第26話 集のバースト

「痛ってゝな」

集は吹き飛ばされながらも何とか受け身を取り
無傷とまではいかないが軽症で済んだ。

「あいつの技は……恐らく魔力で強化した両腕を高速でふって
その衝撃波でもぶつけているのか？ だったら簡単だ」

「まだ、立つか」

「勿論さ。お前を倒すまでは倒れない」

「ふん！ 出来るものならやってみろ！！ 雑魚が！！」

マグナは先程の技をマシンガンの様に撃ち始めた。

だが、それを集は一発も当たらずに全てかわしていった。

「な、なんで避けている！！」

「簡単な話さ。あんたはそれを弾丸の様に撃ちだしているんだろ？

弾丸は曲がらない。銃口の向いている一直線上にしか飛ばない。
それと同じだ。来る場所が分かってるならそれをかわせばいい」

集は避けながら徐々にマグナとの距離を縮めていった。

「馬鹿な！！ そんな避け方、聞いたことが無い！！」

「おら！！」

「しまっ！！」

集はマグナの両足を蹴りあげた。

「初撃一閃てな」

集の刀がマグナを切り裂いた。

「ぐは！！」

「もういっちょ！！」

集はマグナの顔面を思いっきり殴りとばした。

「はあ、はあ、はあ」

マグナの体から血液がぼたぼたと滴り落ち地面を赤く汚していた。

「くそ！！この俺がこんな雑魚に！！」

「おい、使えよ。バースト」

「なんだと！？」

「ランカーは全員、使えるんだろ？全力のお前を倒してこそこの勝負に俺は勝つんだ」

「ふははははははははは！！！！いいだろう！！」

だが、後悔するなよ。これが俺のバーストだ！！」

マグナがそう叫ぶとマグナを魔力が包みこみ始めた。

「「「「「！！！！！！」」」」」

他のランカー達もマグナがバーストを発動したことに気が付いていた。

「とうとう使ったか。マグナ」

アークは魔力が火柱の様に立ち上っている光景を見ながらそう呟いた。

「集……」

ゆえはその光景を心配そうに見つめた。

「集を心配するのは分かるけど先にここを片付けなさいよ！！」

「ああ、すまないライカ」

ゆえは気を取り直し警備員に向かっていった。

「なんて魔力だ。さっきの比じゃない」

魔力が晴れるとそこにはマグナが立っていた。

「これが俺のバーストだ。俺の魔法は肉体強化故に姿は一切変わらない。他の奴らは知らんがな。」

そして、バーストを発動した際の魔力は」

マグナは先程の衝撃を飛ばす構えを取り始めた。

「来るか」

集は先程と同じ避け方をしようとしたが…

「うおらあああ！！！！」

「！！！！！！」

集は避ける間もなく吹き飛ばされた。

「がはあ！！」

口から血を吐きだしながら吹き飛んで行った。

「10倍だ」

何メートルも後ろに飛ばされてしまった。

「げほ、げほ。くそ！！」

「まだだ」

マグナが消えたかと思うと集は空中に殴り飛ばされていた。

「速過ぎて見えない！！」

「こっちだ」

「！！！！」

集は慌てて後ろを振り向くが遅かった。

「ふん！！」

「うわああああ！！！！」

集は地面に叩きつけられた。

その威力は地面が抉れ、人一人が軽く埋まってしまうほどの威力だった。

「死ね」

マグナは高速で集に向けて降りていきひじ打ちを入れようとしたが集は横に転がり何とか避けた。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

集がいた場所はさらに深く抉れていた。

「所詮はそんなものだ。ランカーでもない奴がランカーに

挑もうとするのが悪い。貴様には勝てない」

「ああ、そうだろうな。げほ！そりゃ、ランカーのバーストと雑魚がバーストを使わずに戦うのじゃ、像とアリが戦うようなものだ」

「分かってるじゃないか。だったら」

「でも！！お前と同じ次元に立てたら話は別だ」

「どういう意味だ？」

「分からないのか？バーストを使えばお前を倒せるんだよ！！」
その言葉を聞いてマグナは大笑いし始めた。

「ふはははははははは！！！！！！何を言い出すかと

思えばバーストを使えばだと！？寝言は寝てから言え！！

それでは、まるでバーストを使えると言ってるのと同じだぞ！！」

「ああ、そう言ってるんだよ！！マグナ・ギルス！！」

「お前分かって言ってるのか？元来、バーストは魔力の多い貴族が作りだした戦術だ。魔力の潜在値が多い貴族でも習得するのに年月がかかる。この俺でも5歳から始めて

習得できたのは14だ。それを貴族でない貴様がましてや、1週間そこらしか特訓していない貴様などには不可能だ」

「はは！！！！だったら見せてやるよ！！！！これが俺のバーストだ！！」
集の周りに魔力が集まっていき徐々にその量を増大させていった。

「なんだ、この魔力の量は！？魔力の潜在値が多い貴族でも

これ程の魔力を持つ者はそう滅多にいない。

それなのに、何故、平民のこいつがこれ程の魔力を放っている！！！！」

「そう言えば、貴族が平民に婚約を申し込んだら強制的にしないといけないかったんだっけ？」

「ああ、そうだ」

「その掟がゆえを泣かしたのか？そんな掟、俺がぶっ潰してやる！！この力でな！！」

「！！！！！！！！」

「バースト」

その言葉を発した瞬間、天に向かって魔力の柱が上った。

「「「「!!!!!!」」」」

ゆえ達はそれを見て硬まった。

「この魔力の感じ」

ライカが独り言の様に呟いた。

「集なのか」

「ゆえ、行って来い」

「アーク、だが」

「奴らももう、全滅した。事後処理は俺たちでやる。行って来い」

「……任せる」

ゆえは炎の翼を生成し集が戦っているもとへと向かっていった。

「集……とうとうバーストを」

「みたいね。これで二人目ね。貴族出身ではない奴がバーストをしたのは」

ルーラとラナは思い出すように呟いた。

魔力が晴れ、姿を現した集の容姿はほぼ、変わっていなかった。

髪の毛は獣人化の時よりも遥かに伸び踵に付くか付かないかの瀬戸際だった。

服は上下繋がった和服の様な白い服になり、右手に刀を持っていた。

「それがバーストだと？」

「ああ、これが俺のバーストだ」

「何も変わっていないように見えるが」

「変ってるさ。強さがな」

「ふははは!! そうか、だったら試してやろう。貴様のバーストがどんなものなのかをな!!」

マグナは衝撃波を飛ばす構えを取った瞬間、血しぶきがあがった。

「な!!!!」

目の前にいたはずの集はおらず、振り向くと後ろに立っていた。その剣には血液が滴り落ちていた。

「バ、バカな!!」

「この力でお前を倒す。行くぜ、マグナ・ギルス」

第26話 集のバースト（後書き）

おはようございます、ケンです。

如何でしたか？それでは、行ってきまゝす。

第27話 マジックフラワー

二人が戦っていた広い広場は既に原形を留めておらず、各所に大きい穴が開いており

さらには、大きな氷山の様な物までいくつもあった。

その数は現在進行形で増えている。

「ふん！！」

マグナが魔力を流し込み強化した足で集に蹴りを入れようとするが集は

それをかわし刀で切っていく。先ほどまで傷が少なかったギルスの体には

切り傷が次第に刻まれていった。

「くそ！！」

ギルスは一旦、空高く上がり距離をとるが集は獣人化にさらにバーストを

足している為、距離など無いに等しいものだった。

「今の俺に距離など関係ない」

「い、いつの間に」

「氷一閃」
ひょういつせん

集が刀を振るうと氷の斬撃がマグナに直撃し地面に叩きつけた。

「まだだ、氷柱雨」
つららあめ

先程の斬撃を細かく撃ちだしまるで、氷柱が雨の様に降り注いでいるように見えた。

「舐めるなーーーーー！！！！」

マグナは氷柱を一つ一つ衝撃波をぶつけ粉碎していくと氷の結晶がキラキラと舞った。

「こんなもの痛くも痒くもない！！」

「氷は痒くはない。部分氷結」
パルティアルフリージング

集がそう呟くと先程のマグナに付着していた結晶がその部分から

氷の花を次々と咲かせていった。

「くそ！！」

マグナはその氷を砕き割り侵食をとめた。

「終わり？」

「まだに決まっているだろう！！」

マグナが集に向かおうとした瞬間、突然マグナの顔に斑点がいくつも浮かび上がって来て吐血し始めた。

「な、なんだこれは！？」

その斑点はものすごい速度で体中に増えていった。

「マジックフラワーの副作用か何かだろう」

「こんな副作用は聞いた事は無い！！」

マグナはポケットから非常用に常備していた小瓶に入った

液体を飲み干すとその斑点は徐々に納まっていき魔力が増大していった。

「はははは！！！！最高だ、この感覚。だが、こんな物じゃ足りない！！！！」

マグナはさらに複数の小瓶を取り出し飲み始めた。

それに伴い魔力は増大していった。

「止めておけ。死ぬつもりか？」

「俺は死なない！！この世界は腐っている！！日々、夢の効能を持つ製品や花などが

次々と規制を受け、しまいには絶滅させようとまでしている！！

何故、貴様らはこんなにも素晴らしい物を排除しようとするんだ！！」

「当たり前だ。力を無理やりに上げる物など

この世にあってはならない。力は自分で上げるものだ」

「それは貴様らが勝者だからだ！！！！メリットがあればデメリットがあるように勝者がいれば敗者もいる！！！！敗者はより強き力を求め

る！！

魔力も同じだ！！貴族とて平民より上でも貴族の中では屑と蔑まれるような

量しか持たない者もいる！！この俺の様にな！！」

「なら、一つ聞くんがお前は努力をしたのか？」

「何！？」

「例え魔力が少なくても戦い様によっては強者を倒すこともできる。お前はその努力をしたのか？」

「努力など無駄だ！！この花の様に何もせずに力を上げるものこそ今必要なものだ！！努力など時間の無駄だ！！！！」

集はその言葉を聞きマグナを殴りつけた。

「ぐう！！」

「努力が無駄だと？ふざけるな！！お前に何が分かる！？

確かに、努力しても得られるものは全て嬉しいものではないのかもしれない。

だったら、見方を変えればいい！！努力の仕方が悪かったのかもしれない！！

本当は自分には向いていない事だったのかもしれない！！それを探すのが努力ってもんだろ！！

努力もしていない奴が努力をしている奴を否定する権利はない！！！！

「努力など俺は認めん！！力さえあればいいのだ！！力さえあれば、他者を圧倒できる力さえあればそれで構わん！！」

マグナは強化した脚力を使いある場所へと向かった。

「待て！！逃がすか！！」

集は翼を生成しマグナを追いかけていった。

「ここだ」

マグナは花々がたくさん咲いている庭園の様な場所に降り立った。

「何をする気だ!？」

「そこで、見ていろ!!これが力だ!!」

マグナは突然、草花を引きちぎりそのまま食べ始めた。

「な!!」

その光景に集は言葉を失った。

マグナは狂ったように花々を引きちぎっては食べ、また引きちぎっては食べていた。

ふと、辺りに甘ったるい香りが漂い始めた。

「ん?…この匂いは、まさか、マジックフラワー!？」

辺りを見渡すとマジックフラワーの特徴である茎にとげの様なものが無数に生えているのが見えた。

その庭園はギルス家が密かに裏のルートで売るために栽培していた場所だったのだ。

「させるかよ!!」

集は食べさせるのを止めさせる為に高速で近づくがマグナが辺りに衝撃波を飛ばし吹き飛ばされた。

「ぐあ!!おい、止めろ!!それ以上、食べば精神をなくすぞ!!」

マジックフラワーの摂取方法は花びらを収集しそれを2日程、冷凍し凍らした物を粉末状になるまで

すり潰し、お湯で5000倍に希釈するのが一般的と言われているが稀に欲望が暴走し花のまま食べると魔力は格段に増大するが

依存度が遥かに上がり人間ではなくなると言われている。

それをマグナがしているという事はすでに彼には人間の感覚は無い。

「くそ!!」

集が地面に手を置くと巨大な魔法陣が現れ庭園を大きく超えるほど広がっていった。

「精神世界で教えてもらった氷魔法、今使わせてもらおう！

全てを氷結せよ！！氷界^{ひょうかい}」

魔法陣が輝きだし、陣内にあった集を除くすべての物質が氷結した。水の魔法を使う集は陣内を自由に動ける為、氷結した後に脱出しマグナと全てのマジックフラワーを凍結した。

「これで」

集が安心したのもつかの間、氷にひびが入ったかと思うと

一気に氷が粉碎し出てきたのは

既に人間の心を失い目に映るものの全てを破壊しようとする獣がいた。口からはだらしなく涎を垂らし目は白目をむいていた。

「如月集…殺す！！」

「くそ！！」

マグナが集に殴りかかってきたがそれを刀で防いだ。が…

「な、なんて力だよ！！押し返される！！」

「ぐああああ！！！！！！」

「ぐあ！！」

マグナが叫び声を上げると衝撃波が集を襲い血しぶきを上げさせた。

「ぐう！！」

「うぐ！！」

マグナは集の首を掴みそのまま握りつぶそうとした。

「げは！！」

集は吐血しながらも刀でマグナを切り刻んでいくがどれだけ、深い傷を与えようとも

一向に離そうとせず寧ろ、力を強めていった。

「ぐるううう！！！！！！」

「ゆ…るせよ！！」

集は刀でマグナの腕を切断しようとしたが筋肉で刀が止められた。

「『ただけ筋肉が厚くなってんだ！！』」

「集！！！！」

後ろから、声が聞こえ振り向くとそこにはゆえがいた。

「ゆ…え」

「死…ね」

ゆえが集に近づこうとした瞬間にフルパワーの衝撃波が集を襲い
大量に血が吹きでた。

「が…は！」

「集……………！！！！！！！！！！」

ゆえの悲痛な叫び声が庭園に響いた。

第27話 マジックフラワー（後書き）

こんばんわ、ケンです。

如何でしたか？相変わらず文章表現が下手です。

それに面白いのかさえ不明。でも、この作品をお気に入り登録して下さった方にはとても感謝しております。

読んだ後におかしな点があれば感想で指摘して下さい。

それでは、さようなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7088y/>

マジックワールド。魔法の世界へようこそ

2011年12月17日14時18分発行